

こどものための

柏崎物語



笹川芳三著

再版発行に際して

この「こどものための柏崎物語」は、笹川芳三先生（現在西山町石地小学校長・当時柏崎市教育委員会指導主事）が昭和三十四年七月から十一月にかけて五十五回にわたり、柏崎日報に連載、好評をばくしたものを昭和三十五年三月一冊にまとめて発刊したのですが、さらに今回、地元教育界、産業文化界などのご熱望にこたえ、一部補筆訂正のうえ、再版発行することになったものであります。

この「こどものための柏崎物語」は、時代とともに成長していくふるさと柏崎刈羽の姿を歴史的、民俗学的に正しく、詩情ゆたかに、興味深く物語りふうに書いたもので、なにより著者のこどもによせる深い愛情と、郷土に対する研究心がみごとに結晶したものであります。既刊の「続・こどものための柏崎物語」とあわせ、末長く柏崎刈羽のこどもたちのふるさとを理解し愛する心をはぐくむ良書として残るものと信じます。

再版にあたり、著者笹川先生、ならびにご協力下さいました皆様に厚くお礼を申しあげます。

昭和三十九年十二月

柏崎日報社

社長 山田 龍雄

「柏崎物語」をおすすめする

柏崎市教育長

大橋 士郎

笹川先生が長い年月にわたる労作「こどものための柏崎物語」を広くおすすめします。

このような仕事を完成するには、よいところに目をつけても、ねばり強い根気がないと、とても出来ないものであります。先生が柏崎に生まれ、こよなく郷土柏崎を愛し、そして、その心が柏崎に生まれ育ちゆく、若い少年少女に注ぐ深い愛情がこの仕事を成しとげたのであります。

この柏崎の地に、笹川先生のようなよい仕事をして下さる先生が、つぎつぎに出ることを切望します。

柏崎の地はゆえなく生まれたのではなく、また、わたしども柏崎人もまたゆえなく生まれて来たのではない。多くの遠い祖先たち、そして、今、こうして柏崎の地に生きて働いているわたしたち、また、これからずっと、柏崎に生まれ育ちゆく人たちの心に「柏崎」の映像を描いていくことは、教育の一つの仕事である。

柏崎からよい、りっぱな人間を育てるには、それはそれは、複雑で多くのことがなされねばならないと思う。けれども、心身ともに健全な人間、しゃんとした人間をつくるには、心を培うにつきる。その心とは、あるところに一つのより所を持つことによって、しゃんとする。そのより所は、まず家からである。柏崎人は柏崎にその家を持つ。その柏崎の姿がどうなのかを、その生々發展の歴史を知り、今の姿を、将来への見通しで知ることが、柏崎への愛情となり、自分を磨くのである。

柏崎に生まれて、青年になって異郷に働く人もあろう。けれども、その人の心の中には、いつも、故郷が生きている。そして仕事に向かって、勇気を与え、ゲキレイされる。そのことは、女々しい望郷ではない。

この「柏崎物語」は、そうした教育上の意味から、まことによい資料であるので、一言述べてご推せんします。また、大人の読みものとしても、滋味ある好読みものであります。あえて、おすすめします。

よい子のために

元柏崎市教育長 大滝 貞雄

柏崎のたんじょうは、ずうっと昔のことです。

その頃の柏崎の姿は、どんなであったか、全く、今の私たちにはそうどうもつきません。浜べに生まれた柏崎はその後、長い月日の流れとともに、ある時は急速に、ある時はゆるやかに、その姿をかえてきたことでしょう。

裏浜の砂丘も、市を流れている二つの川もたてよこに走る道も、そこに立ちならんでいる家々も、あるいは楽しく行なわれた年中行事も、年をふるにつれてその姿をかえてきました。そして今では、あとかたも消えて、ただ、物語り言いつたえに残るもの、わずかにそのおもかげを残すものなど、こうしてすべてが過去に去っていきます。

こうして移りかわる郷土の中にある私たちは、この郷土の移りかわりのあとを理解することから、ゆたかな郷土への愛情もわいてくるのではないのでしょうか。それは、次の新しい柏崎を建設していこうとするためにも、大切なことではないのでしょうか。

こんな意味から、だれか、みなさんのために柏崎の移りかわりのことを書いてと願っておりましたところ、このたび、市の教育委員会におつとめの笹川先生が、たいへんお忙しい仕事の間に、柏崎の子どものために「こどものための柏崎物語」を書いてくださいました。ほんとに嬉しいことです。みなさんが社会科などの勉強に、柏崎のことを勉強したいと思っても、よい本がなく困っていましたが、この本ができて、たいへん役だつことと思えます。文もわかりやすく、おもしろく書いてあります。一九六〇年の新しい年の柏崎の子どもへのよいおくりものです。

この本をまとめるまでの笹川先生のお骨折りを感謝しながら勉強して、柏崎を愛し、新しい住みよい柏崎をみんなの力で育てましょう。

笹川先生のこと

西 卷 達 一 郎

笹川先生とわたしとの関係は、少年団を通してはじめて知りあったものである。しかしほんとうに話合うようになったのは、郷土史に関心を持って互にお互に知ってからで、先生が比角小学校の教頭でおられた頃のいまから約十二三年前である。その頃、先生は戦後の新しい教育課程の社会科の中に、郷土をいかに取扱うかに苦心をされた。わたしは教育界になんの関係もなかったが、たまたま四年生の教材としての単元「郷土のうつりかわり」というガリ版印刷の本を、特に郷土史に関心があるというので頂戴する機会にめぐまれた。わたしはその本を手にして、編集の苦心が並大抵のものでないことを如実に知るとともに、なにもかも不足の環境の中でできた約二一〇頁のザラ紙の本が珠玉のように思われて、感激して読んだことをいまでも憶いおこすことができる。

わたしは、わたしの郷土史関係の蔵書の中にたゞいまもこの本を大切に保存している。印刷技術も話ならぬほどそまつなこの本は、どの頁も黄味を帯びてきている。しかしその一頁々々が先生の血のにじむような想いと、情熱で満たされて作られたものだと感じ、日が経っても少しもあせることなく、一層心を打つものがある。

昨年七月から柏崎日報紙上に「こどものための柏崎物語」が先生によって書かれたとき、わたしはまさきに先生が苦心して作られた「郷土のうつりかわり」を思いおこした。それは一般には発表になっていないが、このたびの書かれたもの下地になっっているに違いなく、それから十年後の今日、ずっと心に持ちつづけられた先生の郷土に想うこと、郷土を愛することの書くべきものを当然書かれたといつては言い過ぎであろうか。そして、一冊の本となつてわたしたちの子供の手に、いや、わたしたちにも渡されることになつた。

「こどものための柏崎物語」は、土地の昔の人々の生活のし方と、現在の生活のし方のつながりを明らかにしよう」という自主性の確立の立場から、また「適応への創意がどのように工夫されたか」という科学的生活の重視の立場から、あるいは社会的生活の確立、社会的技術の要求の立場から子供たちに身近かな生活を通して語りながら書かれています。

子供たちは、この本によってそれ／＼の立場において／＼な条件を克服して努力することが、お互いの幸福になること、すなわち郷土を住みよくするものであることを知るにちがいない。そして、郷土柏崎を共通の生活意識をもってより一層美しく豊かに創りあげて行くだろう。

笹川先生は子供たちに大きな夢を托している。

(昭和三十五年三月)

推薦の言葉

酒井薫風

柏崎日報に五十五回にわたって連載されて大へん好評を博した笹川さんの「こどものための柏崎物語」が今回一冊の本にまとめられて発行されることはまことにうれしいことであります。柏崎に産声をあげ、柏崎に育った人にとって大人と子供にかかわらず、この物語はどんなに郷愁をさそい、懐旧の情をそそることでしょう。そして今後限りなく伸びていこうとする柏崎に暗示ともなることと信じます。

新しい教育の社会科のことを考えると、世に生きるための知識がまだまだ整理されず、資料の収集と系列が指導者の苦勞の種とあります。昔の鑄型にはめた教育がこわれ、代りのものの方向が示されておりやすものの、理論だけで会得できるものでなく、心にも身にも養いになるものがのぞましいものであります。この意味において柏崎物語はほんとうに子供の心からのぞむ本であります。

今日では社会科に教えられ、歴史を知るとともに道徳教育も受けているでしょう。昔の修身教育に復旧する懸念のある道徳教育の特設の必要がなく、笹川さんの柏崎物語などを資料として総合教育の形態をとった最も自然であり、環境に忠実に生きることになると思います。そういう意味でこの本は子供になくはならない知慧の培養素であると信じます。しかも笹川さんの美しい愛情によって物語が進められ、詩情も豊かに、滋味はあふれています。柏崎日報の連載の物語を読みつづける孫二人を見るにつけてもこの感を深くしたのであります。

笹川さんとは安田校でいっしょになり、私が比角校へ転任まで数年間、この道のために励み励まれた親しい仲であります。まことに克明に研さんされ、静かな愛情をもって子供を教育された実践の敬虔な風格そのままに、その声そのままにこの物語の本にじんんでいます。生まれて育ったふるさと、柏崎の推移の足音に老いも若きも子供もひとしく耳を傾けようではありませんか。結構の本であります。ぜひみんなの家庭でも一本お備えになっていたいただきたいものです。海の風のつくった砂丘の上に時の刻みに自ずから誕生し伸びてきた柏崎の物語の本は、市制二十周年記念にふさわしい記念品であります。(元比角小学校長)

柏崎の灯

柏崎市立荒浜第二小学校六年

大島

清

柏崎は昔から古い歴史をきざんでいる。

その中で、

ちぢみや石油やあみつくりが、

ぼくたちの町を、ぐんとあかるくしてくれた。

でも、いまでは光のうすれた、さびしい灯となっている。

どうして、こんな灯になってしまったのだろう。

昔は、

石油もたくさんあった。

りけんもできた。

灯もだんだん強くなってきたのに……。

四十年で、石油がなくなり、

戦争のあと、りけんのくさりがバラバラになると、

灯の色のしなびた町になってしまった。

あみも名をしられたという。

一年間に大型トラックに百台ものあみをつくり、

あみつくりの本場といわれ、

日本海をつぎきって、北海道へ売りひろめた。

七十年前に、この海の沖に汽船がきて、

あみをはこんでいったのだ。

しかし、今では……。

歴史はかわるものだなあ。

あんなにさかんだったのがほろび、

そして、新しいものもがもりあがってくるといふ。

ぼくたちは、今、

その中にすんでいる。

なんで、どうやって、もりあげたらいいんだろう。

ちぢみやさん、あみつくりやさん、

骨をおられた方たち。

ぼくも足もとに目をむけて、

柏崎の灯を高くあげたいなあ。

目次

再版発行に際して……………	柏崎日報社社長……………	山田龍雄
「柏崎物語」をおすすめる……………	柏崎市教育長……………	大橋士郎
良い子のために……………	元柏崎市教育長……………	大滝貞雄
笹川先生のこと……………	……………	西巻達一郎
推薦の言葉……………	……………	酒井薫風
柏崎の灯……………	……………	大島清
砂をあたためる	教室もうずまる……………	二六
わくぐりの行事……………	砂を静める松林……………	二六
おかの上のまち……………	くらしの中の石……………	二六
砂原での運動会……………	大切な石の役目……………	二六
浜のけいりん場……………	土に育つもの……………	三三
砂山のぐみの実……………	古見野の砂原……………	三三
楽しい浜あそび……………	初めは四軒から……………	三四
	まず道ができる……………	二六
	駅通りも田んぼ……………	二六
	川の大工事進む……………	二六
	偉かった若い奉行……………	二六
	あれ地を新田に……………	二六
	砂を肥えた土に……………	二六

根をはる

おくら山の歴史
 鶴川町が本街道
 柏崎の町の交通
 その頃の柏崎港
 いのちのうた

ちぢみの町柏崎
 江戸商人との苦しい戦い
 手先で作った郷土
 荒浜の網づくり
 米蔵さんの網工場
 尾花祭りの行事
 三日講のゆらい
 柏崎名物火事
 高忠さんの偉業

著者略歴
 あとがき

胸の底を流れるもの

昔の人々の勉強
 生徒わずか三十三人
 三角だるまと馬の子鈴
 昔の子らの遊び
 みちをひらく

石油の町四十年
 砂山の裏と表
 刈羽節成キウリ
 八千頭の馬並ぶ
 茨目の花売り
 加納の雪が来た
 花をかざす
 珍しい洋服姿
 八百人の朝起会

装丁
 山田龍雄

少年団たんじょう
 頼もしい夢育つ
 生徒も勤労奉仕
 赤坂山に汗流す
 ちえの目

特長は共同井戸
 60年変わらぬ湯量
 初めての上水道
 駅通りの発てん
 駅通りの変わり方
 あすへの願い
 勝海さんの苦心
 石油から機械へ
 工業のまぢ
 第五の時代は何

三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

こどものための
柏崎物語

砂をあたためる

わくぐりの行事

—子どもたちの心のふるさと—

むかしの子どもも

吹雪(ふぶき)がうなつて、吹き流しの旗が、ちぎれそうに音をたてても、ものともしません。「サンヨ」のいせいのいい子どもたちです。三月三日(三十年前ころは二月二十三日でした)のおしあいサンヨは、力いっぱいおしまくる、ずいぶんむかしからの子どもの世界でした。

お宮の拝殿のまん中にかやをたばねて作った、ちよんどすもうの土俵のような形にした大きな輪がつるしてあります。港町の宮田さんが毎年きふされたものです。何十本のろうそくの火がならんだ前にある、この輪をくぐってお祈りをするのです。神主さんのうしろについて輪をくぐります。左からまわって、もう一度くぐり、右へまわっておまいをします。たいこや笛がおそかです。うすぐらい拝殿もたくさんのろうそくの火が一きわあかる、正面にかざったまいる



子どもサンヨ (常福寺)

鏡ハキラキラ光ります。私も弟をおんぶした母に手を引かれて、何だかこわいような、面白いような、へんな気持で輪くぐりをしたことがあります。「こう

二

えんま市へ中学生ほどのくらいいくか(三中・二五年資料)

毎年でかけるもの

八〇割以上でかける

米山・田尻・北条・北鱒石・西中通・荒浜

三〇割—八〇割

中鱒石・八王子・千谷沢

中通・刈羽

三〇割以下

高田・城北・鶴川・石黒

高柳・南鱒石・上小国・

伊海・中里・二田・内郷

石地・高浜

まちへくる人の数

バスや汽車をつかわない

人(比角校四年生調査)

えんま市の日(昭和二三

・六・一六)

西中通	北鱒石	田尻
421	254	524
603	258	406
640	730	424
554	534	445
205	527	293
		402

して輪をくぐって、からだをきよめるのだよ」そう教えられたことを思い出します。「悪い病気にかからんようになるのし」そんなふうに信じたのです。

胸をふくらませて

またまっ白な紙を二つおりにして作った人形（ひとがた）で、からだをさすったり、名を書いたりしてお宮へ持っていくませんでしたか。ずっと昔から「きれいな心」を祈って、つづけられてきた信こうです。輪くぐりの行事もこの人形の行事と同じ気持ちのものでしよう。

輪くぐりは八坂神社にもありました。十二月の大はらいの時ですが、八坂さんのは竹で作った大きな輪でした。たしか、ぶすぶすとどぶつて、白い煙がお宮の

中にはいまわっていたようです。「八坂さんの輪は火がついているンだテヤ」小学校一年生位だった私はおっかなびっくり、父につれられていったものです。帰りにたんざくがたの紫の旗をもらって大とくいになりました。白くそめぬかれた「八坂神社」の太い字と八つの輪を組みあわせたものがはつきりしていました。

六月のたのしみはエンマ市でしょう。お祭りのこづかいはいは五銭（せん）がおきまりなのに「えんま市だから十五銭くれる下」と、いきなり三ばいのこづかいですからばんざいです。五銭で「のぞきめがね」をみま

んでいるめがねをじゅんにみまします。えんまサンの子どろです。そのころの子どもたちはこれをみないとえんま市にならないのです。柏高だいのん「からくり」は残りの十銭がおしくて、おし絵のかんばんをみるだけでがまんします。

柏商マーケットは組立て式の小屋で、おかずか紙屋さんの前からダビ小路かどまでつづいています。五十銭の福袋（ふくろ）がほしいのですが、がまんします。サーカスのがくたいがなつかしい。「てんねんの美」をあたりいっばいにびひかせます。

くらしのくふうを

「と妹が答えます。そこで弟があずきがゆを木のまたにのせてやります。たくさん実をつけてほしいという、これが子どもたちの願いでした。

柏崎の人たちの心につなごうと、昔からいろいろなことがくり返されたり、新しく始まつたりしてききました。今までもにぎわい分たたくさんの方々が、それらをしらべたり、書いたりして下さいました。これからはしばらくそういう方たちのお話や書かれたもののお力をかりてお話をしようと思ひます。

どんな時でもみなさんの新しい工夫が、きょうどのくらしを発展させるものになるというのを胸においで読んで下さい。

ふつうの日（昭和二三・九・日曜日）

時間	荒方	浜面
8時	199	
10時	908	
12時	716	
2時	475	
4時	581	
6時		611
8時		

時間	荒方	浜面	西方面	通方面	北方面	石方面	田方面	尻方面
6時	105	168	220	143				
8時	140	291	321	298				
10時	125	114	108	142				
12時	80	203	140	179				
2時	183	86	27	78				
4時								
6時	170	319	96	157				

○柏商マーケット
・大正四年より天幕張りで開始
・大正八年木屋根造りの売店にする
この経費一五〇円

おかの上のまち

— 一列にならんだ四頭の馬 —

二倍も高い中浜

さあ、裏浜へでて海岸道路を歩いてみましょう。砂っぱらを海にそってできたこの道は、長くつづいて柏崎のはじからはじをつなぐちようどなべのつるのよう

な位置にあります。う川の近くまでいったら振り返ってみて下さい。

まちの家々がならんでいきます。ちよっと高い台の上にかざられたように見えるでしょう。長い台です。白いアパートが二つ、みがいだタンクのようにたっている中浜の方も見てごらん

さい。いちだん高いところに家がならんでいます。どちらも丘の上のまちだとい

うことがひと目でわかります。中浜の方が本町の方より二倍ほど高いのですが、長さはその三分の一くらいになります。

四頭の馬の背骨

この丘は砂丘(さきゅう)で、もと柏高におられた鈴木先生は鯨波砂丘・塔之輪(とうのわ)砂丘・中浜砂丘・柏崎砂丘とくべつしておられます。一列にならんだ四頭の馬のせなかにおんぶしたようなまちです。一

本の太い道が四頭をつないで、背骨のようにはしっています。きょうどの昔は、砂丘の上にできあがったまちです。長い間の人々のはたらきで、今はせ骨の上から幅をひろげようとしています。やせた馬からたくましい馬になろうとしています。だんだんに、みなさんはこのようすを知ることが

できるでしょう。

一年中吹く西風

柏崎には年中、きまつて西から吹いてくる風があります。柏崎砂丘は、この強い西風の力をうけてできて、風と同じ方向にのびています。本町通りは、この上にできた一本町ですが、東へよって四本の枝にわかれます。鈴木先生は四ツ谷砂丘線、春日(かすが)砂

丘線、悪田(あくだ)砂丘線、海岸砂丘線と名をつけられました。比角の四ツ谷通り、春日通り、悪田通り、柴町や新花町はそれぞれの砂丘線の風下にできているわけです。風で飛ばされてくる砂を、できるだけけようとする昔の人たちの苦心があつたのです。

砂丘線と鯖石川

この枝の砂丘線は、鯖石(さばいし)川のうつり方を物語っているといわれています。はじめは団子山(だんごやま)砂丘の南がわ、四ツ谷砂丘の北を流れたものが、団子山が大きくなるにつれて北へうつりま

す。それで団子山は鯖石川が蛇(へび)のようにうねったところに、とりのこさされた——たもとと呼びます

○鯨波砂丘

海岸段丘上をおおって標高二〇—二五^{メートル}。裏浜通りは全くの砂の丘で、漁業を主とする家屋が並び、本通りは農業を主とした。下町は飛砂をさけて裏浜町の風下にたてられた。

○塔之輪砂丘

砂の固まった地層を主とする海岸段丘の上をおおって、平均標高二五^{メートル}。砂丘の厚さはせいぜい数メートル以内で、この関係は海辺からもよくうかがわれる。

○中浜砂丘

表層の二層ないし数メートルが砂層で、その下が砂交りの粘土層、更にその下が砂礫層で、砂礫層の下は安山岩の岩盤であり、この砂礫層が井戸の水位となっている。

○柏崎砂丘

が——ものらしいというこ
とになります。この砂丘だ
けは本町の丘とちがって、
西風をまともに受けて大手



家 だ ら ン 上 の 丘 砂 浜 中

をひろげたようにできてい
ます。砂の丘は強い風を受
けるところは風と同じ方向
のび、弱い風を受けると
ころは、風にむかって左右
にのびるのがふつうです。
本町の砂丘をこえて、弱ま
った西風がここへ吹きつけ
ることになったからでしょ
うか。比角駅ふきんにでき
た砂山が、更に吹き寄せら
れて大きくなったのが団子
山だろうということです。
砂山の三段跳（さんだんと
び）です。
その次に川がはこんでき
た砂をつむくと、西風が吹
きためるとで春日線がで
き、川は更に北へまわりま
す。そして悪田線が同じよ
うにできると、川はまた北
へ流れみちを作ります。川
は自分でも砂をはきだしな
がら、西風のしごとを手つ
だうわけです。海岸砂丘が
できると自然に、その外が
わをまわって流れることにな
ります。海へは西にむか
って流れこんでいたわけで
す。
きょう土の川は西風にお
されて、東へむかって海に
そそぐのがふつうですが、
鱒石川だけは荒浜（あらは
ま）の砂山におされて西へ
むかっていました。だんだ
ん西風の力で、川口は北へ
むけられ、東へまわりそう
になります。七、八年前で
しょうか、いつきに東へね
じまがって、松並（まつな
み）町の背なかの砂山を、
うんとけずりといったこと
があります。

分岐砂丘、平均標高十層
団子山一五層、市役所分
室所在地七・一層、裁判
所側の丘は二〇層余あつ
て、二〇三高地の愛称で
学生たちに親しまれた。
○本町の丘

（ぎぎよ堂桑山太市朗
氏談）

西永寺、浄土寺、石井神
社、妙行寺の高台はひと
つづきの砂山だった。な
や町の人はこの辺を「山
山」と呼ぶ。本町通りは
この一連の砂山を背にし
てできたもの。石井神社
も山の上にはこらがあり
氏子全部で地ならしをし
たことが、桑山さんの小
さい時の記憶としてここ
っている。三丁目局わき
の道をきったのは海津清
悟さんの親ごさんだとい
う。

砂原での運動会

—空をとぶ大きな風船—

砂原の運動会場

グラウンドのなかったころ、運動会は学校の裏山を一つこえたここで開かれました。今の中一中裏です。砂山と砂山の間の凹んだ平地で、砂原のところどころにハマヒルガオがのびていた

り、コウボウムギのかたまりがあったり、チガヤが根をはってもいましたが、子どもたちには年一度の楽しい場所でした。

運動会の朝になると、学校から砂山を越えて会場まで、荷物を運ぶ列が並び

ます。高等科の生徒は（今中学生にあたるわけです）「ワッッシュ、ワッッシュ」と教壇まで運びました。

机を二人持ちするもの、賞品を入れた大きなふろしきを五、六人でかかえたり、つなひきのロープ、紅白たま入れのかご、水の入った

バケツと長い行列で運びます。丘の上のハマゴウのやぶをこぐ時など、足のうらが痛くて困ったものでした。

▽……

でこぼこコース

スタートの線にならぶと

先生は肩の上に大きなたぼろをまっすくに立てて持っています。「よいドン」はこれがないのです。

走り出してからがたいへん、コースはでこぼこ、砂はざくざく、草のところはかたかったり、でいきがぎれます。よくころびます。汗ばんだ顔にくっついた砂

はなかなかとれないし、口の中まで砂をほおぼってしまふ。

よきょうで子どもたちをびっくりさせたことがありません。会場のまんなかで火がたかれて、板ぎれや草がいぶされ始めると、四、五人の高等科の生徒が大きな紙のふくろをもちだしてき

ました。せのひくい、金ぶちめがねの大平（おおだいら）先生がさしずをしてい

られます。ふくろをさかさにして煙の上にかざします。まるくて大きいふくろです。おとなの一人や二人、たったまますっぽりは

いつてしましそうです。青白い煙がモクモクとふくろのなかへ入っていきます。白く大きな風船（ふうせん）の形になっていきま

す。これがユラリユラリとあたまを振りながら空へあがりはじめたからおどろきました。子どもたちは手を

たたいて大よろこび。高等科の生徒は風船を追ってかけだしていきます。

これは大平先生が苦心して作られたものです。子どもたちがチクシ紙とよんだうすくてじょうぶな紙をはりあわせてありました。は

ら）先生がさしずをしてい

えのきと古い川
すじ

（昭二九、越後タイムス
布施宗一氏稿）

（きぎよ堂桑山太市朗氏
談）

きょう土では「えのき」はいろいろの用を与えられてきたが、この分布をしらべると、おおよそ二、三百年前の土堤の形成をうかがうことができる。

本町一丁目のなかほど、中野さんの裏に昔、植えたまままで現存し、この辺から八坂さんまでつづき、永徳寺、西永寺、浄土寺と裏がわの土堤にしげり、浄願寺、柏崎神社、図書館と見事な大樹があり、更に浄敬寺、えんま堂裏にまでつながる。

（商業高校前のものは数年前にきられた。）

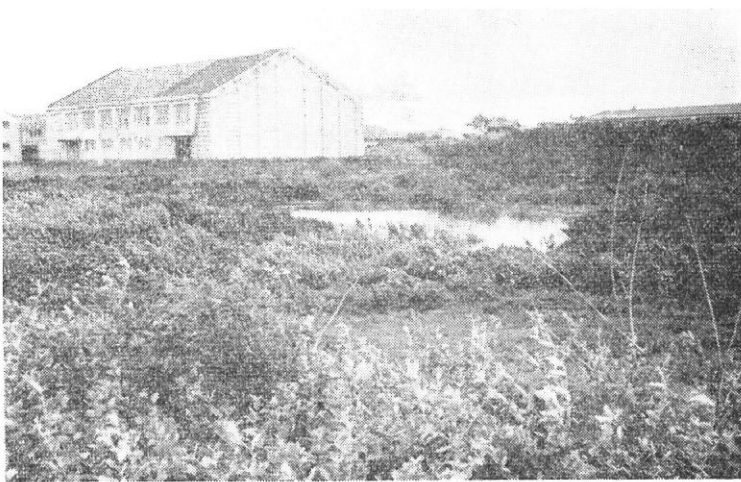
比角小学校の裏がわにもたくさんあった。この位置は現在の校庭のまんなかになっている。常に出水、滞

じめてロケットを走らせて
みせてくれた先生です。

▽……

すりばちのそと

この平地は砂丘のかげに
できたすりばちの大きなそ
こなです。風に吹きあげ
られてできる丘は、風が吹
いてくる海岸のがわはゆる
やかで、そのほんたいの、
つまりまちの方ががわは急
なさかになります。そのか
げにくぼ地ができる。これ
がすりばちです。工業高校
のグラウンドになっている
ところにも、はっきりした
すりばちがありました。ま
わりの砂丘がもつと高かつ
たので、火山のふん火口み
たいでした。ころげて落ち
てみたり、かけおりたいき



おいで、ほんたいがわをか
けのぼったりして遊びまし

今はスポーツコンビナートとなつた「田の頭」

▽……

このへんにう川

ところで、運動会をした
場所ですが、雪どけのころ
やつゆ時になると、水がた
まって大きな池になったも
のです。岸へのすんだ水が
底の砂をきれいに見せて、
こまかく小さくゆれる波に
見とれたことがあります。
昔は池になっていたところ
で、今でも「田の頭」（タ
のガシラ）とよぶ人があり
ます。実はう川の流れの
わりかたにつながりがある
のです。十全堂さんが子
どものころ「あれはお前さ
ん、池でしてね。ふなやど
じょうをつかまえたテもん
だ。たまげたネ」というの
です。う川の流れていたあ
とらしいのです。

水した湿地帯に接する裏浦
り側にも、多く分布してい
る）

これは成長が早く、根の
張りが密で強固、枝は密生
して塩風に強い「よろん
ご」の特性を利用して、塩風
をふせぎ、土堤をかためた
ものであろう。

長くつながる緑蔭の土堤
は壮観であつたと思われ
る。

鵜川（鈴木氏近郊の地形）

勾配（落差）

上流十数*につき四〇〇*
中流十二*につき六〇*
下流十二*につき一〇*

河道の変わりかた

一期 柏崎砂丘の南麓を洗

って大きく蛇行、八
坂の鼻から港町を横

断して柏工裏へ注ぐ
二期 八坂鼻から天屋下へ

三期 現在

浜のけいりん場

—パンツがめずらしかったころ—

▽……

新花町うらの浜

砂浜で運動会をしたころ
陸上きょうぎのけいこをし
たグラウンドが、もう一つ
ありました。

今はこのようにりっぱな
家なみになっていますが、
この新花町のお宮（コンピ
ラさん）のうしろ付近は、
海岸砂丘のかげの砂原でし
た。ねむの木やまなしが
たくさん見られました。ア
カシヤの木かげもありまし
た。そこにまん丸のグラウ
ンドが走るとこだけ土をし
いて、大きなドーナツのよ

うに見えました。

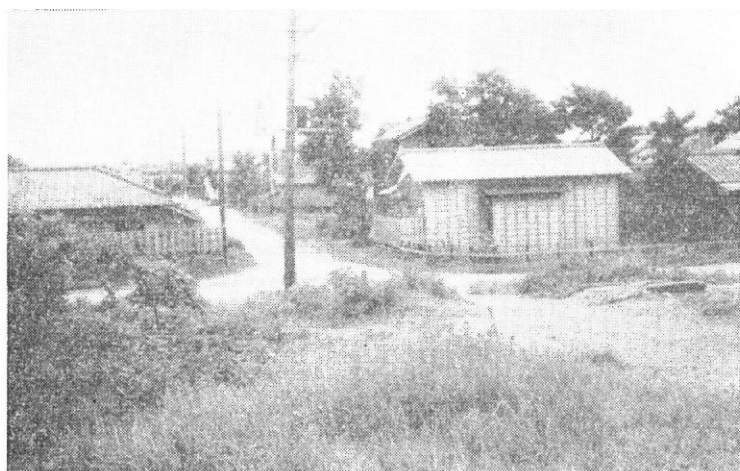
初めてとびぎょうそうの

選手みたいなものがぎめら
れて、坂田先生につれられ
てけいこにでかけました。

「ランニングにいくぞ」と
ハイカラなことばを使うだ
けでも、胸がはずみます。

洋服というものは子ども
の着るものではないと思っ
ていたころですから、みん
な着物です。じゅばん一枚
になって、すそを腰のそこ
ろまでおりあげ、その上か
らおびでしぼり直します。
これでしたくができたこと
になります。着物をぬいで
シャツすがたになっても、
シャツは手首まであつてボ

タンどめ、ももひきは足首
まであつてヒモでしぼる。
こをします。



新花町老人ホームの前付近

八

○柏崎尚輪会

明治三十八年の記録によ
ると比角村に中越輪友会
があり会員三十余名、柏
崎に柏輪会があつて会員
おなじく三十余名とあ
る。

明治四十三年八月柏崎尚
輪会が東浦浜にグラウン
ドを新設し自転車競走を
行なつた。

翌四十四年七月十二日、
自転車大会がこのグラウ
ンドで開催され、遠く東
京、横浜、名古屋の選手
も参加した。

○昔の柏崎日報から

・大正三・七・一〇輪士会
主催自転車大競走会
八坂新地グラウンド
入賞者 二三名

参加者 柏崎、見附、長
岡 見番優勝旗 安達豊
治 タイムス優勝旗 桑
原弥太郎

・大正四・四・一七
中越競馬会主催競馬会

新花町裏浜

▽……

ももひぎで走る

これでも、すばらしいスタイルだと思っ
ていました。しかも、シャツもももひぎは細い青色のたてじまがこまかくついでいて、厚くてじょうぶな、一度作っていただくと、三年くらいは着られる。兄さんが着てまた弟が着る、そうなるとも色もいかげん黒くなりま

す。今のようなランニングシャツやパンツなど見たこともない。ほんとのグラウンドができてからポツポツ子どもたちも作ってもらえるようになりまし
た。てんじくとかキャラコの布で、お母さんがぬってくれるのですが、肩のところはピンと四角ばって、胴は今のサックドレスみたいにズボンとして
います。メリヤスの

ランニングを着てみたい、というのが子どもたちのぞみでした。東京のおじさんのみやげがパンツで、それを
はいて写真をとってもらう、めずらしかったのです。

▽……

ドーナツみたい

このドーナツみたいなグラウンドは自
てん車きょうそののグラウンドだった
です。赤や緑できれいなぼうしや服をつけた選手が、優勝旗を風になびかせて走
っていました。たくさんの人がまわり
に集まっています、子どもなどは割りこめない。スタンドなどないのですから。ぶっかき水を
ほおぼって、ラムネ屋やトコロテンの店のあたりをうろついたり、「ワーッ」と
声があがるとあわてて大人

の足の下をくぐって、足の柱のあいだからのぞいたり
します。

自てん車きょうそうが間もなくやめになった時、トコロテンのはり紙かんばんがもう見られないのかと、
がっかりでした。

▽……

にぎやかな競馬場

この自転車きょうそうのグラウンドのはんたいがわ
アパートや市営住宅（しえいじゅうたく）のあるところ
に競馬場（けいばじょう）があり
ました。毎年七月に開か
れました。はじめての競馬場
開きで、佐藤オンタケさん
がおほらいをされたのは昭
和七年七月三日です。

オンタケさんがこの頃おほらいしたものに、昭和八年九月の八坂プールの工事

入賞 一六頭

賞金

三周 一着 一円

二着 〇・五円

四周 一着 一・五円

二着 〇・七五円

五周 一着 二円

二着 一円

六周 一着 二・五円

二着 二・五円

七周 一着 三円

二着 一・五円

大正四・六・一六

輪友会、新花町裏に常設

グラウンドを作る

経費 一二〇余円

大正四・七・一一

輪友会主催自転車競走会

優勝旗四本

余興 芸妓自転車競走

大正五・六・一九

北越輪友会主催第三回県

下自転車競技会

選手百余名、見物人数千

決勝種目 五〇回まわり

四〇回まわり、三〇回まわり（一周三八五回）

昭和のはじめに中止された。

砂山のぐみの実

— 36年前の公認グラウンド —

柏小うらの砂山

柏小の校旗は三十七年前に、花田屋さんが図案を考えられて、二宮(ふたみや)さんと共同して作られたものですが、その頃は海岸からまちになっている砂丘までの間に、いくつかの砂丘がありました。

今ほりっぱな公認(こうにん)グラウンドですが高い砂の山がありました。スタンドのあたりは山のせなかです。グラウンドのまん中近くが台のようなテッペンでした。この丘は校舎の方のわはえぐれたように急になっていました。

テッペンのふちにはグミの根やハマゴウの根がのぞき

でています。そして校舎のきわまで砂っぱらです。高等学校よりの方はひくくなつた大きなくぼ地で、グミがしき物のように茂っていました。子どもたちは紙のふくろを持って、赤い実を集めました。さとうの入っていたふくろとか、くずビスケットを買ったときのふくろです。手ぬぐいで作つたふくろなどは上の部です。

砂山玉ころがし

天気の良い日は、はれば

れた子どもたちの声が、この砂山のがけをはい上ったり、かけおいたりします。「玉ころがし」をしています。一人が上の方でおしりをつけて、着物のすそを両足の間からグッと引いて、たづなを持ったように後ろにそります。のびた足をほかの一人がつかんで、一気に下までかけおきます。「そら、できたいや」立ち上るとおしりのあとの長いみちができました。これがねんど玉のころがるコースです。てんでにふところやかくしから、よくころがりそうな選手をだします。着物の腰のあたりに四角の布をぬいつけてもらって、だじな玉やダチンやたからものの泥でよごれたバチなどをいれていたものです。そのポッケのようなのがかくしです。三つ四つならべて「よいい、ド

ン」もうむちゅうです。ころがる玉といっしょにかけおきます。時々、よくころがるように手の中でまるめます。プップとつばをつけたりして砂とねんどですます玉は黒くなり、手のひらにも黒い泥がこびりついています。時にはトノコをねってたいこがたの玉を作ったりします。これは横綱でした。ぐねぐねまがつたみちにしたり、ジャンプ台を作ったり、トンネルやさくを通すしうがい物さようそうも始まります。どの子の着物もおしりが泥で白くなっています。

熱心な坂田先生

その場所に三十六年前、坂田先生が「グラウンドきちがい」とまでいわれるほどの熱心さで、このグラウ

○グラウンドの建設

(紫楼叢書)

大正十年

三月坂田先生最初の提案
「柏崎に大運動場を建設せよ」
柏崎日報にはじめに掲載

年内に四回くり返し提唱発表

三十五才柏小末席の坂田訓導を絶えずはげまし特に同僚として協力された方は宮川邦雄、内山政之助、雲林浄澄の三先生

大正十一年

「一足で作った」といわれる坂田先生の東奔西走拍車をかける

前川童左衛門氏の紹介で単身上京、内藤久寛、山口誠太郎両氏に協力懇望
・郡長、町長、警察署長各
・学校長、二宮伝右衛門、
西巻進四郎各氏役場楼上
で協議

・那会二千元の補助決定、
傍聴席の坂田氏どうこく
の話は有名

・柏崎町会三千元の補助決定

・山口、内藤、飯塚の三氏各千円寄付

ソド工事が始まりました。日本一といわれた東京のグ
ラウンドより三年前の話で
す。海水浴のいきかえりに



グラウンド整地工事（大正十二年）

ここを通ると、坂田先生に呼びとめられて、トロッコおしやローラー引きをさせられました。すげ笠をかぶり、腰にメガホン、手にくわの先生のユニホームは、これからしばらく柏崎の名物になります。

▽……

比のマークとKのマーク

全国にいくつもないグラウンドができあがって、第一回の県下少年少女オリンピック大会が開かれます。三十二カ校八百人の選手、まわりをうすめた黒山のおうえん団、むしろ旗をたてているところもあります。八千浦（やちお）の大的ぼり南さば石の長い旗、比角の三角旗などみごとです。柏小の赤い大旗がKの字をつ

けて、ひらめいています。この旗は諏訪町のタキザワさんがシペリヤからもってきたものです。柏小と比小が優勝をあらそいましたが夕日がしずんでしまつて、よく日にまでのび、しょうぶはおあずけになりました。

この一年前に長岡でも開かれました。この時は比小が優勝、次の第二回では比小優勝、二位柏小、三年目は柏小優勝、比小二位。県大会では比のマークとKのマークがいつも群をぬいていました。トラックにちょうちんをかざり、がくたいをせんとくに駆へむかえにでたものです。

・二宮伝右衛門氏グラウンド用地寄付

大正十二年

・刈羽郡体育協会結成、グラウンド建設にのりだす
・五月十二日起工式
・工費一万二千余円で河合組請負う
・各村青年団の労力奉仕さかん

八月七日

中鱒石村青年団中沢直伸氏引率のもとに百数十名奉仕、みのを着、くわをかついでの整然たる行進で来場、作業あざやかで、百余名の人夫作業振りひきしまる。おひる休みに洲崎氏「諸君」と謝辞をのべようとして絶句坂田氏の肩を抱いたまま両氏涙。青年団員感激して休みなしに黒くなつて作業、できたのが百斤のバックストレッツ
・十月七日竣工式、第一回県下少年少女オリンピック大会、全国記録十三種目中五種目を破る

楽しい浜あそび

—ポロポロこぼれる赤い実—

▽……

一面のグミの木

自てん車きょうそうばへ
とびきょうそうのけいこに
いったころ、ハマナシの赤
い実を見つげると、われが
ちにとりあったものです。

「いそいで、したく始め—」

の坂田先生の大きな声で、

あわててさんじゃく（お

び）をとくと、ふところか

ら赤い実がポロポロころが

りおちたりします。白いつ

ぶつぶの種だけはきだしな

がら、カリカリ音をいわせ

て走りだす子どももありま

す。

休む時はネムの木の下に

はいこんだりします。花が

きれいです。たくさんの細

い糸を赤・白にそめて、お

ぎょうぎよくたばねたよう

な花です。子どもたちはコ

コの花とよんで、ぼうしの

きしょうの上にさしたりし

ました。

このころの子どもたちは

よく浜へ遊びにいぎまし

た。玉ころがしや兵隊ごっ

こで遊びほおけるのです

が、赤いぐみの実を集める

子もたくさんいました。グ

ミの木はどの丘にもいちめ

んにありました。今のグ

ラウンドや一中のあたりは

ことに見事でした。

▽……

チカヤの甘い汁

チカヤの根をほったもの

です。地下茎ですが、かじ

るとあまい汁がでます。チ

ガヤのほもツンとのびたさ

やをかぶったものを抜きと

ります。中に白い絹のよう

なつやをもったほか、ぎっ

しりとつまっています。こ

れをチューインガムのように

にかむのです。時には黄色

のほがでたりします。「ヤ

ア、きつねのしょんべんだ

いや」と、これはすてま

す。ハマエンドウの豆もか

くしいっぱいにとって、ダ

チンがわりにします。

▽……

葉っぱの笛

工業高校のところは大き

な砂山で、ヘイタイゴッコ

の大演習（えんしゅう）は

たいていここです。この新

花町がわにはネムの木やア

カシヤ、クロマツの林があ

り、ハマナシの大きな草む

らや赤や黄の花をみせる草

原もありました。はま風の

なりに枝をのぼして、せの

ひくい松によじのぼって、

枝をブルンブルンとゆすり

ます。お馬にのったヘイタ

イさんのつもりです。せい

一ぱいの声で歌っています。

「海のほうから、ニュー

ウツとでたぼうず、……」

自分たちのつくった歌です

から大とくいです。教室で

小池先生といっしょにフシ

をつけたのです。小池先生

は詩（し）をつくってもっ

ていくと、みんなでフシを

つくるしごとをして下さい

二

浜の植物（柏高、岡田勇作「砂丘植物の観察」）

汀線から遠ざかるにつれて弱酸性の植物にかわり、砂丘植物から内陸性の植物に傾いてくる。

汀線からの距離別に主なものをあげてみる。

○御野立公園—六八科二〇種程

・公園北側（約七畝）ハマニンニク、オカヒジキ、ハマヒルガオ、ハマニガナ

・鬼穴の上（約三十畝）ススキ、ネズミノオ、ノイバラ、ヒサカキ

・キャンプ地（約五十畝）オオバコ、チドメグサ、クロマツ

・パンガロー村（約一二〇畝）ヨモギ、クサスゲ、ススキ、コツゲ

◆番神段丘—五二科二〇一種程

・砂浜（約三〇畝）ハマニンニク、ハマヒルガオ、イヌタデ

・段丘登り口（約七〇畝）エノキ、イタヤカエデ、カラハナソウ、ウマノミツバ

ました。

お馬にあきると草原にこしをおろして、アカシヤの葉っぱをくちびるにあてます。二本のゆびでうまくかげんをとりながら吹くと、プウブルとなりませす。

「日ぐれにヤ日ぐれのかねがなる……」だれがうまく吹けるか、葉っぱの笛（ふえ）のきょうそうになります。

遊びつかれて帰る時にはノノサンにあげるカワラナデシコやヨメナの花をつんだりします。

▽……

じまんのポウフウ

ポウフウはほり出した根の長さをくらべっこします。「おら、きんのな、うらはまで、こんがのポウフ

ウをとったでヤ」両手で二十センチぐらいの長さを作って見せませす。学校でこんなじまん話があた日は、かばん



スポーツコンピナートも月見草の原だつた

かついでまま、ポウフウとりにいく子どもが五、六人です。これをとって帰ると、家の人がほめてくれるからです。ハマゴウの葉っぱも手ぬぐいで作った袋につめて帰りました。すこしほしてから火ばちにくべると、モクモクと白い煙がでます。蚊とり線香のかわりです。それで「蚊いぶしの葉っぱ」と呼びました。

「ドロボー、ドロボー、戸をあけろ」といいながらカモノハシのほを両手にはさんでまわすと、ほが二つにわれる。浜には子どもを楽しませてくれる相手がたくさんありました。きりぎりすや鈴虫をさがして、草むらの中を歩きまわることもありました。

- ・段丘中央部(約一〇〇ト)
- ・エノキ、オニグルミ、キカラスウリ、ミズヒキ
- ・段丘頂上(約一二〇ト)
- ・コニシキソウ、メヒシバ、カニツリグサ

▲一中裏浜

- ・砂浜(約二〇ト) コウボウシバ、オニシバ、ハマニガナ
- ・砂浜(約七〇ト) ウンラン、コウボウムギ、ハマゴウ、アキメヒシバ

- ・一中裏草原(約一五〇ト)
- ・ハマナシ、ギンギシ、タウコギ、アキグミ

- ・ハマワスレナグサは柏崎特有のもの、ハマナシは柏崎が南限

▲悪田浜

- ・砂浜(約二〇ト)
- ・ハマニガナ、コウボウシバ
- ・砂浜(約五〇ト) ハマニシク、サンゴジュ、ハマゴウ

- ・畑地(約一〇〇ト)
- ・アキメヒシバ、ギンギシ、スベリヒユ

- ・畑地(約二〇〇ト) コニシキソウ、オオバコ

教室もうずまる

—砂に苦しめられたこと—

になりました。冬の強い風に吹き上げられた砂が、山の頭をとびこえて、運動場と山の間のせまいところにたまるのです。

砂とのたたかい

のなかから浜砂を取りのぞかねばならぬところもありました。

砂はまは子どもたちに、たくさんの思い出をのこしてくれませんが、たいせつな問題がこのかげにかくれています。

いずも崎ゆきのバスに乗ってみましょう。あら浜をすぎると、道は砂丘のふもとを海岸にそって、高浜の方へつづいています。この道がひと冬すぎると砂でどっさりうずまったものです。海岸の近くの家で、てんじょう裏や窓下、屋しき

まい日砂をほる

はっ崎小学校でこの春、雪が消えたら運動場の窓もうずまりそうに、砂がうんとつもっているのにびっくりしました。これをすっきり取りすてるために、何万円のお金がかかりました。校しゃは大きな砂山のかげにあります。もとはこの砂山は、ハミルガオやチガヤのきものをきていましたし、ブローチのように月見草も咲いていました。が、くだき石の積みこみ場を作るために、半分はだか

この写真の下の方の教室が上の窓のあたりまで砂にうずまったとは、ちょっとそうぞうできないでしょう。今はこの山は一中道路になり、校しゃは前にでています。グラウンドになる前は、もっと大きな山でした。そこは曾田おいしやさん(曾田医院のごしんせき)のやしきでした。裏は砂山です。この砂山を利用してグラウンドのスタンドもありました。そして東運動場の近くまでゆるくながれた

砂のさかです。そのころの中学生(今の高校生)のスキーのけいこ場でした。子どもたちは青竹をダンロでまげて、スキーのまねをします。わらぐつでふんずけるのですから、ころぶと竹だけ走っていきます。

このスロープのかげの校しゃになります。一ばんはしが六年生の私の教室です。春になったらたいへん、雪の消えたあとに砂だけのこりました。上の方の窓まで砂にうずまっています。くらい砂のお家です。高等科の生徒が毎日、シャベルをもって砂ほりです。のちに番神山というおすもウサンになった子も「まさ、イッペエほったなア」とたまげられています。

飛砂の害

(林業事務所柏崎駐在所 昭和三十三年資料)

○埋没防止を要するもの

道路 八、〇〇〇校

学校 八校

病院 二

家屋 三〇〇

農地 三五〇

○安全保持を要するもの

道路 一五、〇〇〇校

学校 四校

病院 二

家屋 二、〇〇〇

農地 一五〇校

運動場砂防

(柏崎日報大正五・八・

一一)

柏崎小学校裏手の砂浜運動場は何時も茫漠たる砂丘と交じり砂防の苦心一方ならず。

一昨年町費約九〇〇円を投じ、地均しを行ないや

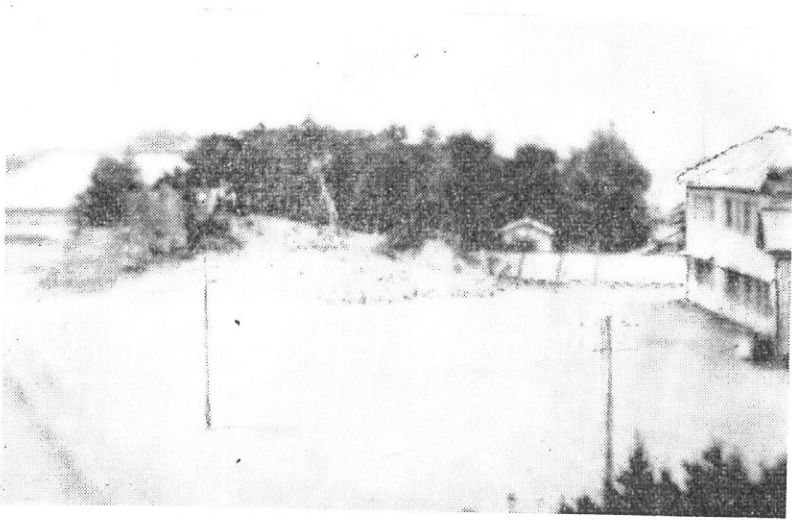
▽……

しようのない砂

ほりだしてもほんの一時で、窓の下の方はしょっちゅう、うずまっていたし、いつの間にか窓の半分位は砂にかくれてしまう。時々砂ほりのてつだいをしては「しようがないノウ、コンツラ砂、やだヤ」とぼやきます。

冬の風がとぼす砂に川口がおされて、鵜(う)川が天屋下の方にまがり、ときつ場のあたりまできたものです。海からのぼってきた魚をとるために、天屋下あたりの川は子どもたちの声でにぎやかです。ボラのスタタキは今も語り草(かたりにぐさ)になっています。

鯨波(くじらなみ)の前



柏崎小学校の裏校舎 (大正十三年)

があります。五、六けんの家があぶなくなりました。昭和二十七年一月の柏崎日報に、このすさまじさが写真ででていました。吹きあげられる砂が、おもわぬまわり道をさせるのです。

松並(まつなみ)町の子どもたちが荒浜(あらはま)の学校へかよった時があります。二ヶの一本道も冬はあるかれません。砂で顔をたたかれるからです。それで、波うちぎわをいきにしたものです。

しようがない砂です。きょう土の人たちはどうしてきたでしょう。みなさんの目にうつるものはないでしょうか。

や面目を認めたりしに、またまたそのあとをのこさざるに至り、当局者はこれが改善にほとんど手をあぐむの状況なり。町当局の意向としては明年度より一〇ヶ年間の継続事業として、東西六八間、南北三三間を画して砂防植物を密植し、城内二千坪の粘土質土壌の上置き工事を開始すべし。されば経費数千円の巨額にのぼるべく、取りあえず明年予算中に約三〇〇〇円を計上せらるべしと聞けり。

川も吹きつもる砂におされて、浜茶屋のたつところへ大まがりに流れ、鬼穴(おにあな)の方へぬけたこと

砂を静める松林

—昔からの人たちの苦心—

▽……

種類多い草や木

スポーツコンピナートになって、新しい浜の風景ができてきました。すばらしいです。ここは月見草が咲きみだれていた草原でした。柏高の岡田先生がおしらべになられたら、グラウンド裏には、春から夏にかけて八十二種類、夏から秋にかけては四十二種類の草や木が見られたそうです。

いまでも、くる松の林が残っています。三十六、七年前のことです。柏小の子どもたちが長くならんで浜へできてきました。学校裏の

砂山から天屋裏の方まで、

よしずの垣がごぼんの目のように、あたらしく、長くつづいています。ここへ一人一本ずつの松のなえ木をうえるのです。もう、うえつけがすんで、きまりよくならんでいる松もあります。高等科の生徒がれんらくにかけまわっています。長いはしらのついた立てぶだをかついで、走っている子も見えます。砂のあなに赤土を入れて、大きい生徒がうえています。

▽……

みんなで植えた松



今も残っている松林

子どもたちは「砂よけの松をみんなでうえるので、す。たいせつなことは、これから、お前たちがどれた

一六

柏崎地区飛砂防備林計画

(林業事務所柏崎駐在所資料)

昭和三十四年度までに工事を終わった分

第一工区

(港町裏—鯖石川口)

堆砂垣三分の一・植栽八分の三 地域人の施設保護に対する協力はこの区が一番悪い。

第二工区

(鯖石川口—荒浜入口)

堆砂垣五分の三・植栽十分の七

第三工区

(荒浜入口—青山下)

堆砂垣未着手植栽十二分の十一

第四工区

(青山—大湊境界)

全工事未着手

・砂防計画と経費

昭和三十二年までの分

総額 三〇〇万円

堆砂垣 102基 六五万円

け、この松をかわいがって

やることができるからだ」

といわれた先生のことばを

思い出しながら見ている

す。

苦心を語る松林

▽……

荒浜地内の松林はみごと

なものです。百五十年前に

品田八郎ざえ門さんが瀧町

(かたまち)から松の苗(な

え)を買ってきて、グミと

いっしょに植えたのが初ま

りです。九十年程前に二代

牧口さんが道の両がわに松

を植え、柴野源七(しばの

げんしち)さんが砂山より

に、たくさんの松を植えら

れました。牧口よしのりさ

んがアメリカ・ヨーロッパ

旅行のきねんに、松を植え

られたのが五十五、六年前

です。松波町から荒浜まで

の二*の道の両がわです。

昔からこのあたりは松林つ

の美しい林に育つには、長

い年月を一日一日、自分の

子のようにせわしてきた荒

浜の人たちのほねおりがあ

ることを、思わねばなりま

せん。

昭和八年から県のしごと

として浜の工事がすすめら

れることになり、昭和二十

四年から大作業がすすめら

れています。

▽……

今も続くリレー

ずい分昔からの人々の苦

心が、一本のぐみ、一えだ

の松にこめられています。

砂のとばない砂浜づくりは

何代もつづいたリレーで

す。今も浜へでてみると、

このしごとが続けられてい

るのがわかるでしょう。土

手づくりの竹の垣、四角が

たくさんつづいたすの垣、

その中にうえられた松のな

えやアカシヤを見るでしょ

う。あら浜の子どもたちが

浜の学校林に松のなえをう

え、かんさつしたり、手入

れをしたりして、みんなで

たいせつにしあっている話

を聞きました。

浜のまん中に工業高校が

でき、一中がたち、家がど

んどんできています。てっ

きんコンクリートのアパー

トもたちました。昔の人々

の力が私たちのまわりで実

をむすんでいます。私たち

の力はこれから先、どんな

花を咲かせてくれるでしょ

う。

静砂垣 四〇九蓋が 三七五万円

防風垣 二〇〇蓋が 四万円

植栽 黒松、ニセアカシ

ヤ 四一〇、六三四万円

昭和三十三年以降五カ

年計画

総額 五七二八万円

堆砂垣 七〇〇蓋が 八五五万円

静砂垣 二五〇〇蓋が 二〇五万円

防風垣 一九〇〇蓋が 三〇万円

植栽 一〇四蓋が 二〇〇万円

植草 ぐみ、ちがや一

七蓋 四〇〇万円

くらしの中の石

—たぐさん使った柏崎—

石を積みかさねる

馬のせをじくにしてできた丘の上のまち、きょう土は坂のある小路がたぐさんです。家のしき地もだんだんになってつながります。やしきをじならしすると、低い方がわはその下のやしきからみると高い台になります。砂地ですから何を何とかためないとかずれます。きょう土では早くから石をつかって、この写真のような工夫をしてきました。坂道のあるところや、高台を背にしている家の裏がわをのぞいてごらんなさ

い。かならず石垣かコンクリートがためをみることで済ませよう。そういうところには、古い石垣がある

が残り残っています。そしていろいろの石がつかわれていことに気がつかれるでしょう。西巻達一郎さんの「石」という本を読みながら、まちを歩いてみましょう。

柏崎の石の見本

横の石道をあがったところに、せんぶく寺があります。ここの石垣はいろいろの石をみせてくれます。正

面は御影（みかげ）石の門で、中山石のそで垣です。右をみると地（じ）石を土台にして間瀬（まぜ）石が二、三段、古い形でつまね、青石でしゅうりされていいます。かどをまがって朝倉小路がわは、地石の割つたものがウロコ形につもれ、四十五度角位のものもみえます。くずれたところをなおしたものでしょう。なかほどは中山石が組まれています。門の左がわも古い形で残っていて、地石の垣です。丸のままの石もみえます。柏崎神社がわは大くずれたところがあるので、青石の六段づみでりっぱです。かしわざきの石の見本が集まっているようなものです。

役に立った地石

地石というのは土地でと

れる石のことで、鶴川や鑓石川の川底から、近くの高から、海岸からはこぼれてきた石です。長浜や比角の田んぼがわにみられるものは、ほとんどこの石です。丸のままに使われているものが多く、ほかの石はあまりみられません。学校の石垣は、これが九段もつまれて上に中山石が二段のっかっています。どこでもみられますが、すみよし町、小町の裏がわの港町辺にあるものや、大久保のものは見事です。

この地石はげんぶ岩ですが、柏崎神社の下、六角堂付近のりっぱな垣の石は、割れ口がちがっています。この石は番神や鯨波で岩つたいをすると足の痛いあんなかまです。椎谷の見事な石垣も土地の砂岩をいかし、よい例でしょう。

○柏崎で使われた主な石

（西巻達一郎著「石」）

・越前の石

三國の石、加賀の安宅の石（一名小松の石）

舟便で米を積んで行き、帰り舟に積んでくる。年に二、三船、一船に六、七十個。青石に似て質が硬い。昔の井戸側に使われている

・出雲の石

帆前船が「ばらす」代わりに積んできた、尺五寸角三寸という板石、庭の敷石に使われる

・八坂神社入口の笠石のおちた一對のとうろうも、これだという

・塩釜石

一名豆腐石とよばれる。風化され易いが、塩気と火に強いので、新潟鉄工所の大煙突下のボイラーや、一時さかんであった中浜三共製塩所の釜場に使用された

移入された数は一万五千本くらいか

石垣にも用いる

間瀬石はやひこの近く間瀬の山からぎりだされた、寸法のきまつた石です。六十年位たった家の土台に多くみられます。黒っぽく、白いてんてんがかすりのようになつていて、今は指でつついてもポロポロとかけらでしよう。時にはなかからほうかい石のつぶがでることもあります。夜の十二時すぎに舟につんでこぎだし、午後の三時か四時ころ天屋下についたものだそうです。三丁目郵便局のわきの道、両がわの石垣がこれです。みょうぎよう寺の裏がわですみよし町のくぼ地になるところにも六段つみになつています。文化劇場のすじむかい、戸田先生のお家のやしきまわりは、こ

の石でふちがためがしてあるに土をもち、玉椿を植えてあります。西光寺大門の西川んだ垣はきれいです。大洲さんの間瀬石三段つんだ上小学校近くの裏通りにも、

この石を使った名残りをみる事ができます。

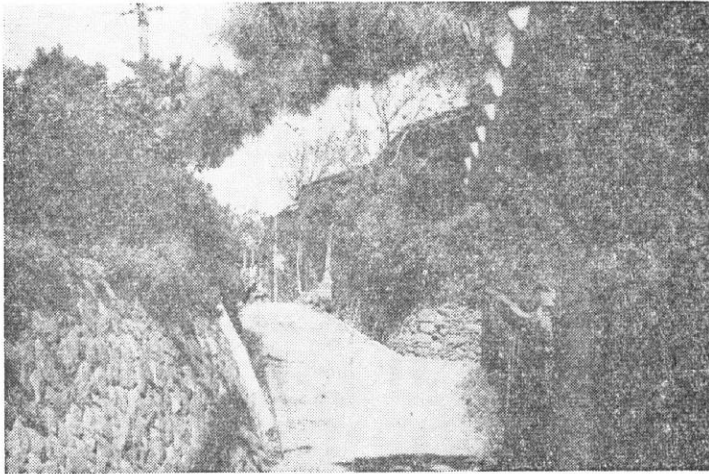
代表的な中山石

お寺の大門の石だたみはたいいてい中山石です。これは柿崎のおくでできりだされた寸法物です。浜まで七の道をかついではこび、舟で天屋下までもつてきます。目方をかるくするため、裏がわはくりとつてあります。できかたからいうと青石のなかまで、ずいぶん使われています。家の名のほつてある柏崎神社や八坂さんの垣がこれです。こうじゃく寺のへいもこれですし本町六丁目の石グラもこれです。かしわざきで使われた古い石の代表です。

・その他
新井の石―「ちぐさ」石で、墓石に見られる。加茂在の赤谷石、頸城の関山石、栃木の大谷石等が見られる

○公会堂の石

城壁 角田石(角田の間知(ケンチ)石)
積上げ：浅間石
上段の間の庭にあるものが：野沢の甲(カブト)石、福島蕨野石
庭石
層のあるもの：紀州石
層のないもの：姫川の石
手洗石：岡山の太川石
植えこんだものは下方石
灯ろう：大川石(三州みかげ)
橋：稲井石(仙台石)
石碑
上段：岡山の竜王みかげ
中段：岐阜の桜みかげ
下段：ぎふさくら
植えこんだもの：上輪石



地石でかためた古い石垣(住吉町付近)

大切な石の役目

— えんとつから土台まで —

御野立のみかげ石

間瀬石は水に弱いので、エガワのふちがためのなかに一つ、二つと残っているものがあっても、くずれかけて土とまじりあいそうになっていきます。田町のエガワのふち石はこれでしたが、コンクリがためになおされたのは三十年くらい前だったと思います。

水に強い中山石は旭町のエガワのふちにたくさん残っているように、たいいていのところで見ることができません。八坂神社の垣もこれですが、ずいぶんかけてい

ます。塩けのある風には特に弱いのです。ていどのちがいはありますが、どの石もそうなのです。お墓などで片がわだけざらっぽくなって、その字が読みにくくなっているのを見たことがあるでしょう。御野立の入口右よりに「明治天皇御野立……」とみかげ石の高い柱がたっています。これも風を受けるがわは、手のひらがひっかかるようなザラザラで、ほんたいがわはスベスベです。ここの海を

みわたせる場所にある大場へんろさんの句碑も、塩風を正面から受けることになので、ちょっと気にかかります。

六丁目の「石蔵」は荒浜の牧口さんが中山石で蔵を

たてられたところですが、この石がしめりけをよぶため



上条の坊山石でつくられた石井神社の灯ろう

柏崎の石について

(西巻達一郎著「石」)

間瀬石

西蒲原郡間瀬村の産出、軟質灰黒色、沸石のまじった凝灰岩、耐火力が強いので、かまどに使われたものもある。この石が世間に出てからの歴史は大体二百年。長船一隻に長さ三尺の凝石を約百本を積む

中山石

中頸、黒川村上中山及び米山寺に石切場あり、軟質淡黄色あるいは淡緑色斜長石英粗面岩にぞくする凝灰岩。この石は火にあうとはねてしまうが、水に強く、昔の井戸側はほとんどこ

青石

野沢石—福島県野沢町付近の産
荻野石—福島県郷村荻野付近の石、西巻しょう油店の煙突はこれを使ったもの

佐久石

長野県南佐久郡の小海線

に後にくずして、二宮さんの裏がわの土台石にし、へいだけ残したものです。くわかさんや本町パチンコのところもこの石のへいでした。

▽……

佐渡からも運ぶ

古くからきょう土で使われた佐渡の石について、ぎぎょ堂さんが教えて下さいました。真野(まの)のれき岩や砂岩で、百二十年くらい前のザラザラした墓石はこれです。昔、佐渡で金をとるために、くだいた石をゴロゴロひいた石うすが庭石にたくさん使われています。これは相川のリュウモン岩で、小舟ではこんできたものだそうですから、早くから佐渡といききがあつたことがわかります。間瀬石は底の浅い石せんもん

の長船といわれるものについで、十から十五そう位が一かたまりになってはこんできましたし、中山石は一人のりの小舟が半日位で持っています。そして陸あげは港町のはまでです。県下でもめずらしい石の間屋さんもできます。ヤマモさん、なや町の宮田さん、駅通りのせり田さんです。

▽……

福島県から青石

汽車がおるようになってからの人気者は福島県の青石です。ひところは青石を使うことでは県下で一、二番といわれたこともあるほどです。初めてたくさん使ったのは西巻しょう油屋さんの高いえんとつです。長野県の佐久石は柏小の石のさくや羽森神社に見られます。みかげ石も多く使わ

れるようになりました。柏崎神社の石だたみも初めは中山石でしたが、荷車のわだちのあとになりくぼんでしまつて、桑よさんが今のようになつてかえられたようにおぼえています。

▽……

笠島から屋根石

お宮に入つたら石でござんだこま犬、しし、とうろくに目をとめて下さい。つくだ人の名もほりつけてあります。石ざいくにすぐれた人を知ることができましよう。多く地石にちょうこくしたもので、写真のとうろくは上条の坊山石としては最後のものだろうといわれています。なや町の小林さんが石井神社にあげたもので、大正十年とほつてあります。西光寺山に、もと二十さたぐぐらの石地

蔵がいくつもありませんが、これも地石でした。あげわの石は墓石としてすぐれていましたし、笠島から舟ではこんだ玉石は屋根石に使われました。家をたてる時、土台になるところにつきこんだ石は鯖石川のものが多かったそうです。やぐらを組んで、大きな丸太をたくさんのなわでゆわえ、その一本一本を手つだいにきた近所の人や親しい人が持つて「ヨイヤ」でいっせいに丸太をひきあげ「チョンダイ」でなわをゆるめる。丸太がドスンとおちて石をつきこむ。子どもたちはこれを見るのが楽しみでした。目に見えないところで地石が私たちを力強く受けとめているようです。

沿いの石切場、柏崎では建築用材として上品なものとしてとされている

御影石

尾の道付近の石、石井神社入口の大形の桑山茂右工門とうろくがこれ。帆船の船底に積みこんで、船の安定をとりながら運んできた、陸あげする時笠石を海中に落として翌年またとりよせたものだという

大正十二年頃の石匠

雲 和堂	野 田 村
霜田二広	上条宮ノ窪
栗林三二	西中通春日
小林群鳳(三代目)	
小川由太郎(藤原由広)	悪田
小竹市九郎	諏訪 町
神林西松(円広)	
小泉彦吉(秀広)	本町八丁目
相沢藤次郎(正守)	鴨川町
	住 吉 町

土に育つもの

古見野の砂原

—早くからまかれていた種子—

▽……

桑とねむの木

本町通り、ひきぎ町、桃山町、やまと町、すわ町と道を見て、駅と線路を見ましよう。りけんの工場中心にするあたり、ときわ高や比角小学校、二中のあたりがわかります。

五十年ほど前に飛行機がとんできて、こうした写真をとるとどんな景色がうつると思いますか。右がわ羽森（はもり）神社の手前は桑畑です。まだ比角駅はで

きていませんが、そくりょうする人の姿が見えるかもしれません。その右手前は古見野（こみの）女学校の

ある、オクラ山のあたりですが、ここにはいくつかの石油工場がならんでいるのがわかるでしょう。左下のすみにも、大きな工場のやねに「平野（ひらの）製油所」という字があるかもしれません。ここは諏訪（すわ）町、そのころは市川新田です。ときわ高のあたりはネムの木がはびこっており、砂原がたくさん見えて

ところどころに松林のかたまりがあります。ことにだんご山の松林はみごとで、あたりはグミやネムの木がしげつています。いまもはつとりさんのお家をグミ山さんとよびます。りけんのあたりは大きな砂山です。

そして、左よりやまと町の近くは桑畑がたくさん見えます。

昔は浜とよんで、だいぶぶんは砂原か畑だったので。見取（みとり）畑といったさうですから、ずい分おおざっぱな話です。かいこんはしてみたものの、手がたりなくなっても、もらいてがなく、やっとたのみこんで家へ帰ったら、カサを忘れてきたことに気がついたが、とりにいかれないのです。「さっきもらった

新田は、いらぬいよ」といわれたらたいへんですから。それを「カサおき新田」といったこの話のようです。

▽……

白川のらくおう

ずっと昔、白川のらくおうという殿様が田にハサ木用のタモギを植えることをすめられた時に、蚕（かいこ）をかうためと土地の

さかいをくべつするために桑を植えることもすめられたのです。ネムの木も土地をこやすために植えさせたとのことです。古見野とよばれたこの砂原に、土地からものをうみだす種が早くからまかれていたことになります。砂地で水の便が悪いので、たくさんのだめ池がありました。今は

三二

○越後鉄道（柏崎史誌下巻）大正元年十一月十日、石地比角間汽車開通式
大正二年五月十八日、越後鉄道全通式全線五十哩を二期にわけ、新潟吉田間及び別山柏崎間約三十哩を第一期線工事として明治四十四年九月末、その両端より工事着手、翌年八月十五日、第一期線竣工

○養蚕町（比角村誌）

明治六年前川伝一郎、野原を桑畑にかいこん、養蚕町をひらく
明治十二年頃、数十軒の長屋ができ、養蚕に従事する人多し、その名残り現存す

○団子山の果樹園

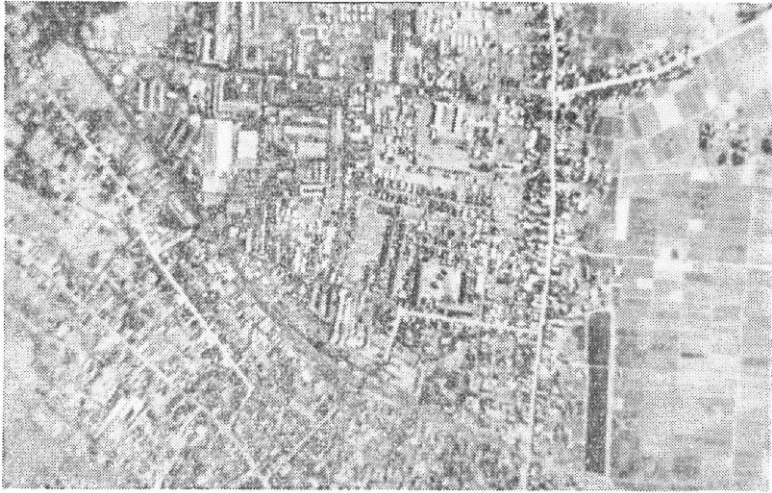
明治二十二年、新田畑の阿部和兵衛、砂丘をかいこんして梨を植える
明治二十七年桃を植栽して成功、近隣これにならって、果樹栽培おこる
明治四十三年、県指定模範果樹園、約十町歩

ほとんど残っていません。ときわ高の小路で、道のかどに残っていたものはうめられて畑になり、いまは家がたっています。さいごまで残っていたのは二中の校門前なのですが、これは生徒の労力奉仕でりっぱなやしぎにかかりました。

▽……

こがいの町の長屋

八十五、六年前になると、やまと町のあたりの野原に前川さんが桑畑をひろげました。そして数十けんの長屋ができて、蚕をかう人がたくさんになりました。まゆからきぬ糸をとる仕事までやります。いまでもここを養蚕(こがい)町と呼ぶ人もあります。やがてりけんができて、柏崎の新しい工業区をつくりますが、この



空から見た比角

りがすすむのも、幅をひろげる人々の努力のあとといふことができましよう。だんご山の兵衛さんの苦勞など、先生からお聞きできたら楽しいことでしょう。

ちょうど七十年前になります。ナシを植えられたのは、イバラやヨシヤブのある、やっかいもののダンゴ山にくわをいれられたのです。五年後にモモをうえて成功、名所になりました。山いっばいモモの花でした。

戦争(せんそう)でやめになりましたが、今はやりなおしの苦心をされています。そのさいしょのイチゴを天皇(てんのう)さんにさしあげました。ドヤのご主人のしょうがいの思い出になるでしょう。

ことは後で書きましよう。ゆびのようにわかれた砂丘、砂丘と砂丘の間の砂地それがこのようにまちづく

明治四十四年、果樹栽培者十三名、園内売店三軒、大正四年、桃七町歩、梨三町歩、通路柵の葡萄はカタウバ、アジロンダック、ナイヤガラ、昭和に入り、ドヤ園にて桃、葡萄、苺を賞味する人が多くなる。昭和十八年、日本油機の工場敷地となつて果樹園廃止、大規模な整地工事行なわれる。

戦後市営住宅地を除いた残存部にドヤ園経営復活

○石黒敬七「比角の想い出」(昭二八・越後タイムス)

小学校の東、女学校へ入るかに「春川の池」があり、農業学校(現二中校地)をでたかに「新兵衛さんの池」があった。昔はこの辺一帯が芦のしげみであつたらしく、僕らの子どもの頃は、まだ大分芦藪の沼が残っていた。(二、おかの上のまち参照)

初めは四軒から

—比角の発展のようす—

四ツ屋といわれる

四七〇年位前に、ここから浜とよんでいたところに新田ができ、家が四けんたちました。比角村誌によりますと、前川伝一郎、高橋作兵衛、長野助右衛門、(油屋)前川多兵衛の四けんであらうかと書いてあります。四ツ屋といわれるわけなのでしょう。いつの間にか四ツ谷にかかりました。初めは浜の砂丘のふもと、田づくりに便利のよいところにかたてたものでしょう。だんだん浜がきり開かれて方々からうつり住む人が多くなります。こちらが

子村で本村が親村です。

初めは子村も親村と同じように、田づくり、畑づくりが仕事でした。浜のグミ山や古見野がだんだん開けるにつれて、子村四ツ谷の仕事がかわってきます。九十年程前の記録を見ますと農が三三人で、その家族一四四人、工が六八人で、家族二四八人、商は一七七人で、家族六八四人となっています。この頃、親村は八けんで農がお仕事ですから商店の多い子村になっていくことがわかります。

だんだんふえる

三十五年前になると子村

の仕事は工が百のうち一五、商が百のうち二七になつて、銀行や役所などにつとめたり、よそへはたらきにでたりする家が百のうち五二です。子村が住宅地(じゅうたくち)の特色もつけ加えてきたわけです。昭和十四年になると工が百のうち二〇、商が百のうち二七ですから、三つめの特色として、会社や工場が多くなったことを示しています。こうなると家のふえ方もかっぱつです。大正から昭和にかけて、十五年間にかしわざきは三八六けんふえましたが、この子村のふえた分は三九九けんです。

子村が早くからあきないの村の第一の特色を見せたのは、縮あきないに力を入れたことからです。四ツ谷の本通りを歩いてごらん下さい。縮屋さんだった家が

親村の本村は大正に入つて一けんふえて、今は九けんです。一番、古いお家のご主人にお聞きしますと、廿代前位まではわかるが、それから先はわからないというお話ですから、ずい分昔からの村だったのでしょう。だから古い土地の名も残っていました。本村がクネガラミ、北がわの田んぼが千刈、西がわにメダシ、南に宮田、ハタナオン、東に朝戸ヒラキ、海ノ田などです。海ノ田はひきぎ町の西がわです。この東がわあたりがハナミズで、もと長浜の人たちはこと比角の東はじインデンに住んでいたものだということです。本村の家はたいいて同じ

ずい分古い本村

○比角村四ツ谷発祥

柏崎史誌 上巻

・延徳二年 比角村宇古見野に阿三家の家が立並び

四ツ家という。今大別して本村(ほんむら)、四ツ家、養蚕町の三つとな

す。本村当今人家僅に八戸あるのみ。四ツ谷延徳

年間より人家並ぶ。初め

は四戸なり。其後年々増

殖して今は上四ツ谷、下

四ツ谷、挽木町(低き町)

と称す。地は昔時の古見

野くねがらみ等なり。

比角村誌

・延徳年間 四ツ家、四ツ

屋(前川伝一郎、高橋作

兵衛、長野助右衛門「油

屋」、前川多兵衛)

・明治八年 四ツ谷、古見

野の字名はじめて使わる

・正徳五年 家一〇二軒、

人六〇七人(男三〇六、

女三〇一)

・文政六年 家二九六軒

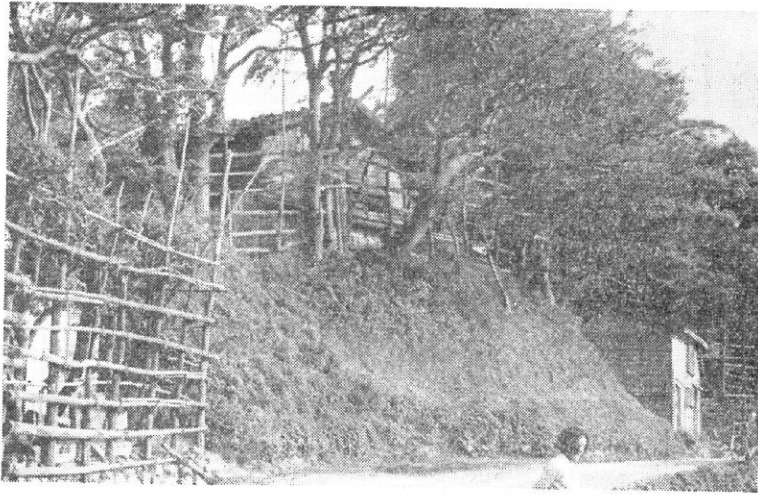
(農三八、難波棟五〇)

人一八五一人(男九五〇

女九〇一)

作りで、家の北と西のりょうがわにどてをきずいて、

タモギを一行に植えていませ。ケヤキもタモギの外が



比 角 の 本 村

わに一本おきくらしいに植えてあります。こずえの細枝は北西の卓越風にもなげられてるので、一よりにその方向にまがっていません。田の中の親村では、この風を防ぐための役目を、この木に引き受けてもらうのでしよう。またハサの役目もする木です。さよう土では日での時間が短いので、イネをほすには風の力を利用しますから、風を受けやすい位置（いち）にハサを用意します。

▽……

くらしのくふう

タモギは大雨が降ると、水あがりのする水田地帯（ちたい）の作業路や用水に沿うた路に植えられている、越後（えちご）の特別の風景ですが、これはタモギが湿地（しっち）につよ

いからです。家のまわりのタモギやケヤキは枝をひろげていますが、田のくろにあるタモギは高さ七呎位で頭をきり、そこから小枝をボサボサと出させ、下の小枝は全部とりさって、できるだけ田に日かげを作るのをふせぎ、十一だんか十二だんのハサを作るに便利ないようにしてあります。

家もげんかんから門にむかって右がわに部屋があつて（右すまい）、左がわに作業しやすい広間やきゆう舎が、おも屋につながつて家の一部分になるような工夫がしてあります。

いからです。家のまわりのタモギやケヤキは枝をひろげていますが、田のくろにあるタモギは高さ七呎位で頭をきり、そこから小枝をボサボサと出させ、下の小枝は全部とりさって、できるだけ田に日かげを作るのをふせぎ、十一だんか十二だんのハサを作るに便利ないようにしてあります。

家もげんかんから門にむかって右がわに部屋があつて（右すまい）、左がわに作業しやすい広間やきゆう舎が、おも屋につながつて家の一部分になるような工夫がしてあります。

- ・明治五年 官員一人、徴兵一人、僧三人、同家族一人、同弟子二人、支那学一人、同家族男二人、支那学修業旅出一人、洋学修業旅出一人、医術一人、同家族男三人、女三人、尼二人、同弟子二人
- 農男二九、女三、同家族男五九、女八五
- 工男六八、同家族男九一、女一五七
- 商男一七一、女六、同家族男二五八、女四二六
- 雜業男一四〇、女五五、同家族男一六四、女三二八
- 旅出稼男五六、女二〇
- 行先地不詳男五人
- 寄留者
- 戸数八、人員一三（男九女四）
- 工男三、同家族男三、女二
- 商男一、同家族女一
- 雜男二、女一

まず道ができる

一町に発展する順序

▽……

吉浦通りと呼ぶ

比角七区の表通りと裏通りをつなぐこの広い道は吉浦通りと呼ぶ方がわかりが早いのです。この写真で見ると家々がならんでいます

が、以前はむぎ畑か砂のあれ地でした。近くは桑やねむの木、松林、ぐみ林、だったといわれています。吉浦さんがこのあたりを買い取られたのが昭和の初め頃でした。吉浦さんはまず道を作られました。この写真の大通りをせ骨にして、横に道を作りました。五十

間（約九十坪）ごとに道をきったのだそうです。ですから二本目の横道は百間（約百八十坪）目になるわけです。百間そとのぞう木林とか、百間そとの牛乳屋さんとかのことばが最近まで残っていたそうです。

▽……

むくげ咲く細道

むぎ畑、なたね畑、豆畑、ぞう木林やネムの木、松の林のところに、きまり正しい細道ができたわけです。むくげ（モクゲ）とかモクデシとか土地の人はよびます）の垣ができていたそ



現在の吉浦通り

二六

○長町・谷町・川町

（柏崎史誌 上巻）

貞享元年

代官岡上治郎兵衛の手代長谷川新五左衛門はかつての浪人仲間松田権左衛門・四ツ谷の丸田、柏崎市川等と共に橋場町以西の島畑砂山地を開墾し、家屋を建て長谷川三町と称す。

更に橋詰町に架せし橋を川下に移し大橋を架す。四ツ谷丸田氏工事を監督す。

安政町鑑には

長町・谷町・川町、幅三間、長さ六十間、戸数四十軒、町の鎮守として牛頭天王社を建立云々。

甲子楼文庫によると

谷町は幅三間、長さ四十間、戸数三十三軒
川町は幅三間、長さ三十間、戸数二十六軒

○港橋経費

（昭六、柏崎日報）

入金部

一般寄付 一、三一五円

よう。

だれいうとなく「吉浦通り」とよばれるようになったのには、わけがあったわけです。花の垣をもった区かくされた土地、これからどんどん家が立ちならびました。新しい道ができるところは発展するといわれています。昔からの道、新しくできた道、きょう土ではたくさん見ることができません。地図を持って道さがしをして見るのも面白いと思います。

よしやぶを開く

古い話ですが本町一丁目も、もとはヨシのしげったあれ地でした。今のようない道になるしじができたのは、二百七十年程前のこと

です。そのころ代官手代に

長谷川新五左衛門という方がおられて、ヨシのやぶをかいたくしたのです。新田（しんでん）です。長谷川の名をとって長町・谷町・川町とよびました。そして中浜につながる大橋ができて本かい道になりました。これが今の本町一丁目です。道ができてまちができる、昔のよい例です。

大橋のたもとに木戸ができて柏崎の入口になりました。木戸はえんま堂のところにもあって、とびら、かんなし、さくがあったそうです。明治の火事で焼けましたが、三十年位前までは柱だけ残っていました。このあたりを「木戸の内」ともよんだのです。大橋も今はモダンなコン

クリート橋ですが、私の子ども

のころは木の橋で、橋板のすきまや、穴からつり糸をさげているようすをよく見ました。やがて土を盛った橋になり、次に今のようになり、次に今のようになり、やなぎ橋からあら町に入る橋も、もとは大がけごぶく店の横からかかっていましたが、今はそのあともわからなくなりました。

あとのわからなくなった橋で、もう一つ、してはほしいものがあります。夏、裏浜からいそぎたいで、番神さんへいくことがあるでしょう。そんな時、いつもじゃまになるのが鵜川です。目の前にむこう岸をみながらグルッと還まわり、橋を渡って、また浜へおりなければなりません。

川口近くに橋があったらなあ、と思うでしょう。

実は、その橋が前にはあったのです。それも若い人たちの手でつくられた橋です。港町の青年団（せいねんだん）がなんとかして、ここに橋をつくらうとけいかくしました。まず、お金をあつめることが大しごとです。一日のしごとがすむと、毎日のように手わけをして、きふのお願いにまわります。こうして、りっぱな「港橋」の渡りそめが、昭和六年九月十三日にできました。今のブルー下の道につながって、たくさんの人々によろこばれました。

町費補助

三〇〇円

出金の部

- 請負費 一、〇〇〇円
- 土地買取費 二五〇円
- 祭（地鎮祭） 一五〇円
- 開通式 二七〇円
- 創立費 三〇〇円
- 雑費 五〇円
- 計 一、六一五円

○比角駅前通り

大正三・一一（柏日）
柏崎町会「市川新田（諏訪町二）より越鉄比角停車場に通ずる町有里道新設に関する土地買取」について協議。

大正四・一一（柏日）
比角停車場から新花町に通ずるまっすくの道ができて、両側に新建築が増加、二、三年後には町並が接続するだろう。

駅通りも田んぼ

—かがみのむろのおもかげ—

▽……

幅ひろげるまち

これは市役所土木課の写真を若月先生がネガにして下さったものですが、このなかに物を作る工場や会社が十七、役所や事務所が二十見えるはずで、りっぱな町なみですが、昭和の初めころは駅通りと広小路の間は田んぼでした。

▽……

大部分が田んぼ

古い地図を見ますと、この写真に見える大部分は田んぼになっています。百二十四、五年前にいくたよろず先生が、今のぎんざ堂の裏あたりにおられた時「かがみのむろのおもかげ」という本を書いておられます。歌を書きつけられたもので加納(かのう)さんがたいてつにいられます。部屋の戸をあけると、目の前の田んぼが一面のかがみのように見える。それで「かがみのむろ」とおし

やったのでしょう。砂丘のかげの低い田んぼ、しょっちゅう水がっぱいで「かがみがおき」ともよばれました。私が子どものころは、長雨のあとや雪消えのころは、大きな池のように光って見えました。この田んぼは砂丘の下、つまり本町に近い方ははず田でした。今の電気会社のあたりも、子どもたちがはすの実をとりに行ったところでした。柏崎のレンコンは品がよく、おいしいこと、日本一のひょうばんを持っていると聞かされたものです。

▽……

砂山を田んぼへ

三十七年前に、子どもたちをびっくりさせる大工事

が始まりました。商業高校の裏が大きな砂山でしたが、これを田んぼにしきつめようというのです。トロッコのレールが今の柏崎病院のかどをまがり、柏高の通りにでて本町をつつきり、光円寺の坂をくだり、それからがみごとでした。光円寺の庭から田んぼへは高いやぐらです。ねずみどろへ向う広い道のあたりは、一またぎのやぐらの坂です。すごい音をたててトロッコが走ります。こうしてうめたてたところが、今の市庁舎(しちようしゃ)を中心にするみたいです。その砂山にあつたいたよろず先生の墓(はか)はこの時、今のところに移されましたし、せいひょう会社のあるところのように、山

○生田萬塾を開く

(柏崎史誌 上巻)

天保七年、上州館林の住生田萬が柏崎樋口英哲の招請により柏崎に来住、山田小路に桜園塾を開いた。

柏崎神社神職樋口英哲、篤胤門下に於て生田萬と親交あり

初樋口氏の親戚宿屋丁宇屋市兵衛方に宿る。後下町下山田茂八郎方の長屋に三年間の居住願を出し許可さる。

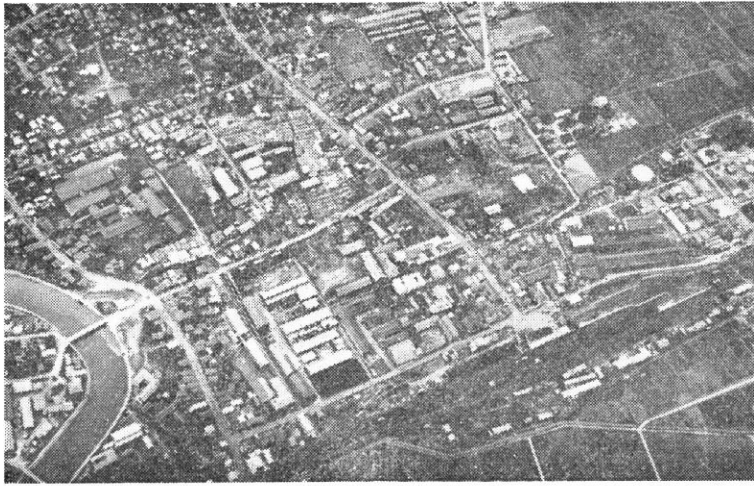
○鏡町埋立地

・柏崎日報(昭二八・三)九代町長二宮伝右衛門氏大正十一年就任、この年埋立行なわる。

・二宮翁「明窓録」

町長在任当時、日石が同社所有の駅通り鉄管置場(現東映劇場付近)と荒町の土地を長岡に売ることができましたので、これを確保するため柏崎土地会社を設立しました。

当時砂丘地として高低の



柏崎駅を中心として

は平地になりました。田んぼに砂山が一つ、そして地になったところ、商業高

学校の校庭(こうてい)のまわりは砂の丘つづきで畑でした。畑のむこうに、また高い砂山があります。生徒は「二〇三高地(こうち)」とよびました。おひる休みになると、この高地にこしをおろして、詩集(ししゅう)をひらく生徒もあります。子どもたちが「お山の大将」を遊ぶ、おとくいの場所です。冬はスキー場になります。この二〇三高地も栄(さかえ)町方面の地ならし工事で、すがたをけしていきました。やせた馬からふとった馬になる大仕事です。

▼……

水に困った田町

田んぼの上の土地ですから水は悪い。砂丘のかげは

水には昔からこまりました。田町では細い道をさかいにして、水のよいところと悪いところがあつたものです。柏崎神社の入口の井戸まで、大八車で水をくみにいったり、やかんを持って水くみに毎日かよう姿がみられました。

ガス会社のあたりからねずみ、どうのの田んぼのこうちせいは、五十年前に青年村長すの崎さんを中心にできあがっていました。上水道、ガス事業も、ふとったまちにすることもになります。柏崎駅も

労がありました。初めは、びわ島小学校のあたりと考えられたのが、田んぼをつぶしては困るという反対があつて、今のところになつたださうです。

はなはだしつかつた栄町方面の土地開発のため鏡町方面の低地帯を埋立てて両方を平坦化しました。

○鏡ガ沖耕地整理(比角村誌)

明治四十四年十一月、比角村で刈羽郡最初の耕地整理を開始、翌四十五年五月完成
 田地約九十町歩、一反歩入費約十円、経費およそ一万円
 組合長 洲崎義郎、副丸田尚一郎
 評議員 服部甚右衛門、三井田六兵衛、三井田重太郎
 工務主任 服部保之丞
 技師 竹田進、技手鈴木駒次郎

○比角の蓮根
 (大正四年の柏日から)
 明治四十四年から耕作がはじまり、柏崎の裏道一帯蓮田となる。開花時に甲子楼と上州屋が蓮見亭をだす。
 施肥一反歩八円、一坪平均一貫匁の収穫、価格一坪分米価の三倍

川の大工事進む

—むかしから苦労した水—

こわいもの四つ

昔からきょう土に、こわいものが四つありました。家をうすめてしまいそうな砂、田んぼをいっぺんに泥(どろ)の海にしてしまう大水、それに火事と波です。ほんとはもう一つ、風があります。これは長い間のくらしで、しぜんのうちに工夫されているようすを見ることができます。

この間の大水あがりには新聞で読んだり、写真でみたり、先生からお聞きして、たいへんなできごとなのにびっくりしたでしょう。こ

れからがなおいへんなのです。みんながほんきに考え、たすけあわなければならぬ時でしょう。

昭和十九年と二十年にも大水あがりがありました。駅通りの本間洋服屋さんのあたりから舟に乗らなければならぬほどです。泥の海の中のまちです。ことにひどかったのが、砂丘のふもとのひくいところにあるまち、川のまがりくねったところ、それに支流(えだ)の

川)が流れこむあたりでした。この時の一日がかりで降った雨の量と、この間の七月十一日に山近くで降った一晩の雨と同じくらいで

城のとりで鶯川



柏農校付近の改修工事

○川の工事

(柏崎史誌 上巻)

寛文五年 鶯川及び鱒石川両川尻の移動により、えんま堂東の土手、橋場町端れの土手等が改修工事され、最寄の町内から人足その他資材を供出した。

一、そだ三十一荷 えんま町新田東の土手四十二間の所くね木に遣う。

一、六尺木二十四本 右同

町

一、人足 二十二人 右同

一、そだ木九荷 橋場町はずれ土手九間半の所くね木に遣う。

一、六尺木十二本 右同

一、人足十四人 右同

・新潟日報(昭三二・六)

護岸工事

古町セキから川口まで九千四百尺、総額五億九千五百五十万円。

二十五年着手、三十二年度までに千四百四十尺、一

す。ひどい降り方は十一日です。人々の努力をいっぺんに水におし流してしまつたわけです。それなのに水のあがり方は前ほどでなかつたのはどうしてでしょう。

昔から川の工事

▽……

昭和二十五年から川をなおす仕事が始まりました。初めの八年間に計画の九分の一ができました。大きな支流が流れ入る上条古町（ふるまち）に一千万円のセキができ、そこから川口まで九千四百メートルの写真で見ると、川で守るためにグルッと輪のようにまわしたものだそうですが、こういうまがり方をした場所が二十九もあります。この流れみちを短くし、水がドンと流れますから川幅をひろげ、岸をかためます。この工事がすすむにつれて

さば石川もこの仕事ですんでいません。昭和二十二年から、藤井堰（ふじいせき）から川口までの工事が始められました。九千三百メートルです。川のはばは、二ばいから三ばいにひろげ、大きくまがりくねつたところは、新しく川みちをつくり、まがり目の首と首をつなぎます。それが十六カ所もあり、七百メートルあるところがあります。十二年かかって、ようやく五分の二ができました。全部できあがると、柏崎全部の家にテレビと電気せんたく機を一台ずつ、あげられるほどの経費（けいひ）になります。

す。みんなの安全を守るために、こんなにくさんのお金がかげられます。三十六年前に五年がかりで二十万人の人が働いておよそ六千メートルの工事をしたこともあります。鶴川では六十二年前から三回も大工事をしています。ずっと昔にも工事をしたきろくがあります。百年前の大水のことも書いてあります。三、四十年前はちよつと降つても、にごつた水がうずをまいて、みのを着た人たちが波でふさがれた川口をくわでさらうこともありました。

▽……

きれいだつた鶴川

昔は鳥町のあたりは池のようになつていたそうだし、「島のやくし」とよば

れる寺もありました。ぎぎや堂さんの古い地図を見せたいと、港町にも鶴川の水が残っていたことがわかります。おびのようなひくい所が柏崎神社の裏までつづいているところです。昔の鶴川のあとです。遠い昔から人々が川と取組んできた苦勞をわかりたいと思います。

昔はせんどうさんが飲み水にくむためにこの川へ舟を乗り入れたそうだし、山田さんのお話では茶の湯に使うために、鶴川の水を京都まで運んだものだそうです。きれいな水だったのですね。

億四千二百万円ができた。
・ 鮭石川改修事務
藤井せきから川口まで九千三百四十一メートル。川中は平井地区五十五メートル、上原地区七十メートル、川口八十八メートル
一日八十メートルの雨量に耐えるようにする。
総工費 十一億二千二百万円
改修済（三十三年度現在）
三千七百三十一メートル、事業費 二億八千万円
改修による効果
氾濫から守られる耕地 一千二百八町歩、戸数七百
増収 米三千石
新耕地 二百四十三町歩

偉かつた若い奉行

— 青山瀬兵衛の働き —

若い奉行の仕事

三百三十年ほど前のことです。まだ三十才にもならない若いさむらいが刈羽郡奉行(ぶぎょう)として、陣屋(じんや)にこられました。青山瀬兵衛(せへえ)という方です。

いつもシメジメと水のよどんでいる鏡ガ沖の田、雨が降るとすぐ水あがりのする鵜(う)川、それに取りこんで苦労し、たえているかしわざきの人々のようす、水がないために、すこしの田をだいにしている

人々のまずしき。そのなげきがこの若い奉行の心をうちました。

きょう土の人たちと、苦しみをともにする青山さんの仕事をはじめました。海への砂丘に防風林(ぼうふうりん)を作ったり、赤田にため池を作り、上条の古町(ふるまち)せきも作りました。そして、大きな仕事をのこして下さいました。

▽……

大きなせき作る

平井に鱒(さば)石川のりっぱなせきができていますが、青山さんはここに大

きなせきを作ることを考えました。それまでは千石ほど下流に、「草せき」とよばれるものがありました。砂やどろだけの川ですから「せき」をつくるのは骨がおれます。そこで川ぞこに

くいをうち、岸に土俵(どひょう)をたくさんおきます。上流の岸には根こそぎの木がはこばれています。雨が降って川水がふえると

ころがしておいた木が流されて、下の方のくいにひっかかる。そこへ土俵をどんだんげこんで水をせきとめる。これが「草せき」でした。

こんどは川が大きくまがりくねる川上に、もうけることにしました。そだ木と材木を組みあわせてしきなつ、きょう土にすばらしい

○青山瀬兵衛
(柏崎日報・掘桃坂「郷土史余録」)
(昭和二五、越後タイムス・西巻達一郎稿)
高田二六万石越後中将松平越後守の家臣で、寛永のはじめ扇町陣屋詰となつた郡奉行に、細井甚五右衛門、湯浅市兵衛につづいて青山瀬兵衛の名あり

瀬兵衛の水利土木事業
柏崎海辺の砂よけ山、鏡ガ沖の湛水除き、鵜川尻の改修、上条古町堰の設定、北条鳥越橋、赤田町方北方の溜池、飯塚と

井ノ岡の村道、信濃川分水、藤井堰、東江用水、小千谷新道、平井切通し植林、佐藤ガ池沢水、軽井川溜池

○柏崎史誌上巻

・草堰

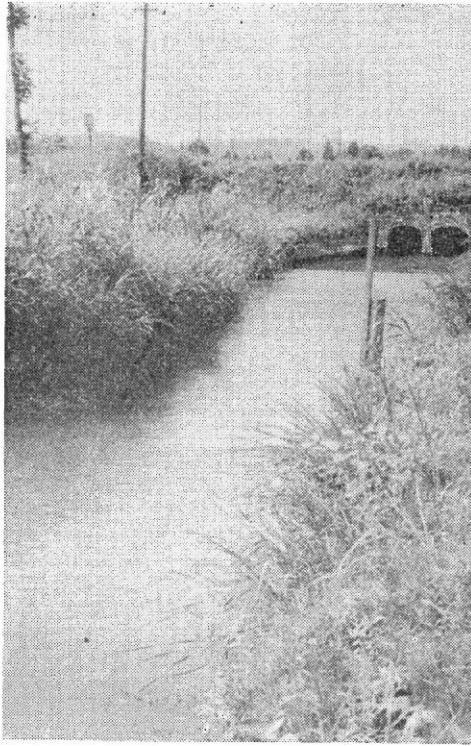
文祿四年、上杉景勝の家

おくりものをすることになりました。

▽……

用水でよい田に

それはこの写真で見ると、東江（ひがしえ）用水です。この用水も「よろいぜき」と同時に仕事をはじめられ



東江用水取入れ口

ました。二、四〇〇坪ほりわって水を通すこの工事も十年かかりました。北鱈石の川東方面の水田は、この水が流れていくようになって

でもこの用水のめぐみを受けている人たちは「野休み日」にして、青山さんをしてぶ日にしていきます。

▽……

古い西江の用水

それはこの写真で見ると、東江（ひがしえ）用水です。この用水も「よろいぜき」と同時に仕事をはじめられ

東江のとりに入り口からちよっと下に西江のとりに入

口があります。西江用水は田尻、北半田方面から北鱈石の川西全体に水を送っています。そのひろさは東江の分の三倍近いでしょう。西江用水の一部は駅通りをつききって流れています。大部分は青山さん以前にできていたものらしいのです。水をあたためて下さった、昔の人たちの力は大きいものでした。

言いおとしましたが、鵜川の川しりを中浜の下をわって、三ツ石におとす工事も青山さんがしました。この話は数年前に「鵜川橋二七〇年」というだけで山田さんが柏日にお書きになりました。お家の人に聞いてごらん下さい。

臣直江山城守兼統、藤井村地内地之口関野に堰を設け、掟を定む。

・鵜川尻切替

正保元年、柏崎天王山

（現八坂神社のところ）

の下で川をせきとめ、新

川をほって中浜山下砂

浜を切り拓いて、三ツ石

へ流す。その後、寛文九

年、延宝元年、元禄三

年、同十二年と新川を修

復したが思わしからず。

・藤井堰

正保元年着工、承応三年

完成。

あれ地を新田に

―苦勞した宮川四郎兵衛―

新田町をひらく

きょう土のはばをひろげなかみをのらせるしことに用事業があつたように新しく土地をきりひろく仕事も、三百年くらい前から百五十年前くらいまでの間に目立ってさかんでした。

草やぶやあれ地をきりひらいて、住みよい土地にしたところを新田とよびます。本町六丁目というところ市の中心街(がい)ですが三百五十年くらい前はあれ地でした。高桑さんがきりひらいて住んだのがはじまりだそうで、その名をとつ

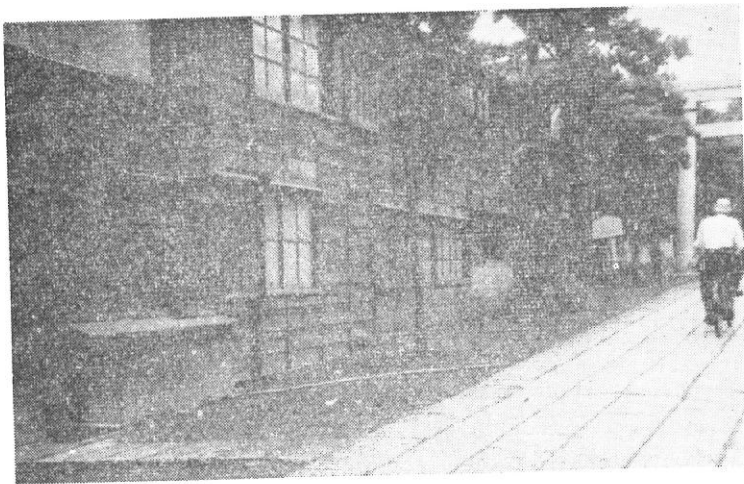
て新助町とよびました。百年前ころでも北がわに二十四けん、南がわは四けんの家があつたと書いてあります。西北の風を背にするところから、南がわはすくなくかつたのでしょう。

エンマさんの竹

やぶ

すこしおくられて市川か七さんが新田町をひらきます。これが今の本町七丁目。今でも六十近い人たちの思い出はなしに、エンマさんの竹やぶにもぐりこんで竹をきってきたもんだ、

という子どものころのおぼ(すわ)町二丁目あたりに人えがあるそうです。諏訪が住むようになったのが二



宮川やしきのあと

○宮川四郎兵衛

(柏崎史誌 上巻)

(甲子楼氏民生訓育資料)

・四郎兵衛、本名を宮川言胤という。

・青山瀨兵衛の事績に深く

感ずるところあり、風土

氣候の学問から水利測量

の術を研究、各地を巡歴

視察して農事の開拓に

深い造詣を有するにいた

る。

・半生三十四年間、刈羽郡

を始め、三島、魚沼、蒲

原、岩船の數郡にわたり

良田を得ること四万余石

新開の村落五十二カ村の

多きに達した。

・元禄十三年

上糸口郷原新田、野田村

熊谷原を開拓。

・元文三年

四郎兵衛、徳望厚く、宮

川新田開拓と聞くや、小

作人たらんと移住してく

るもの続々としてあらわ

百四十年くらい前で、諏訪新田町とよび、諏訪町二、三丁目あたりはそれから八十年くらいおかれて、市川新田町とよびました。

新田をひらく仕事では、たくさんの人たちが名をのこしてはいますが、宮川四郎兵衛さんの名は、青山瀬兵衛さんの名とともに忘れてはならない方です。

△……

鵜川の宮川新田

鵜川行きのバスでいきますと、しゅう点に近く、熊谷（くまだに）という停留（ていりゆう）所があります。ここでおりて左の道へ入ります。くろひめ山へのぼるにはこの道をいくのですが、すぐ一つの部落（ぶらく）に入ります。「宮川新田」です。もとは山の谷で、お米など作れそうもな

いとこでした。四郎兵衛さんが良い田になるように土地をきりひらく仕事をはじめたのが、二百六十年ほど前でした。人々はその名を忘れないようにしようと話しあって、そこに「宮川新田」と名をつけたもので

す。

▽……

国中にひびく

この写真は宮川さんのお家のあったところですよ。

「宮川やしき」と呼んでいますが、今のくわよさん、大橋くすり屋さん、池田おいしやさんのあたりまでで真の方は柏崎神社のさかいまであったそうです。二人のお子さんも四郎兵衛さんと同じように、土木のうでまえにすぐれています。大きなむずかしい工事にはお父さんを助けて、うでを

ふるったといわれています。

四郎兵衛さんは刈羽郡たけでなく、遠くの工事もひき受け、新田をひらく苦労をしました。新しくきりひらいた部落は五十二カ村といわれます。また金沢の方まで仕事にいった、三十二カ村のかいはつをされています。

親子三人でいばらやよしやぶをひらき、いく山もふみこえて図面をつくり、あれ地を良い田に、休みのないしごとをされ、その名は国中にひびきました。新築田（しばた）の殿様のたのみで、紫雲寺瀉（しうんじがた）のうめたてと用水つくりをした話是有名です。この時は四十八カ村の良い田ができました。宮川新田のかいたくがはじまると聞くと、近くの村の人がうつつてきた、とい

われています。たくさんの人たちから、したわっていたのです。くびき方面からボウフウをあつめてきて、浜に植えたのも四郎兵衛さんです。こまっている人たちがこれをほりとして、富山（とやま）方面へ売ることができるようにしたのです。時には、浜でみつけるボウフウにも、二百七十年の心がひそんでいます。

今のような機械や道具のつとのない時代です。肉をつけ、なかみをいっばいにしようとする、きょう土の人たちのたくましさをおぼえておいて下さい。

れ、幕府評定所の詮議するところとなり、田地五百町歩をもって功績を表される。

・宝永三年
長男将矩、次男儀右衛門越前松平家に召されて三十二カ村田地石高一万七千石開発。

・元文三年
次男儀右衛門、新築田の藩主溝口出雲守の命をうけ、紫雲寺瀉の埋立、灌漑用水開鑿。四十八カ村竿入一万八千五百石の良田開拓。

・越後瑞軒の名高く、紀州方面にも越後瑞軒翁の石碑ありという。
・柏崎初代町長宮川榎樹氏は宮川家五代の当主。

砂を肥えた土に

—惜しかった荒浜の農園—

▽……

砂をいかすこと

水をいかすことがきょう土のくらしをすすめていくように砂をいかすこともまた、きょう土の長い間のしゆくだいでもありました。

昭和三十四年八月二十日付の柏崎日報で品田さんが三十年間、荒砂ととりくんで青山農園をききうてきた苦勞をこまかく知らせてくださいました。たいせつなお話です。ぜひ読んでください。

きい。

る草原にバラックをたて、ランプの光をたよりに仕事の手定を考へ、雑草とあついでい砂に力をそそぎ始めたのが、品田さんの十九才の七月でした。まわりの人には「バカじゃないか」といわれ、友だちのあざ笑いを受けて苦しい仕事がつづけられました。「モモが三千キログラム、ブドウ二千二百キログラム、カボチャ三千キログラム、サツマイモが六千キログラム……」と品田さんの仕事のみのりを、荒浜の子どもたちが社会科の学習で話しあっていました。

みのりの見事さよりも、砂をいかすことが苦しいことながら、どんなにたいせつであるかを知っておきたいものです。

▽……

仲井さんの苦勞

昭和十年のことです。松並(まつなみ)町のはじ、今の花火工場のあたりに松の根をほり起して、農場をつくるしごとが始まりました。そのころ、このへんは松林で家はなく、林は荒浜(あらはま)の方までつづいていました。

松林のなかの畑づくり、ちよつと天氣がつづく砂ぼこりがたち、あつくやける砂地ですから、なみたくていことではありませぬ。シンガポールで、ゴム園のしごとをしていられた

仲井さんが、きょう土にのこす、さいごのしごとに取りくまれたのです。「この砂っ原に農園をつくらうた……」と、だれも本気にしませんが、仲井さんは数年前からじっけんをつづけていました。フランスから取りよせた牧草(ほくそう)の種をまいて、芽のかたや育ち方をしらべたり、地温と気温の差やシオをふくんだ海の風のふせぎ方など、いろいろのしらべをすすめていました。ヘルメットにマドロスパイプ、ひげのこい仲井さんが、林の中をしらべていられたすがたをよくみかけました。

大農場をつくる考えで、この写真の事務所(じむしょ)を作り、「荒浜農園」のかんばんをたて、ひとりこつこつとしごとをすすめた。昭和十四年から校長をおやめになられた、

三六

○荒浜農園

仲井氏 当初荒浜本村から荒浜新田の間の砂浜を全部買取、半分を村へ寄付、今、本村に近く防風林工事をしていいる一帯がそれ。

昭和十六年春、北日本農園に仲井用地を一部ゆずる。この年秋、仲井氏病に倒れ、農園は北日本と合併して、第二農場となる。

今も松並町よりに見られるアカシヤなみきは仲井氏が最初の鋸を入れた時植えたもの。

○北日本農園

(吉田吉造「一生とところどころ」)

北日本農事株式会社を設立、製菓に必要な脂肪製品を作ることに、近接町村を一元とした生産都市的活動を夢に描いた。高浜にも分場をつくり、

渡辺先生が協力されます。

▽……

大がかりな農園

昭和十六年、吉田吉造さんが荒浜中学校あたりを中心に「北日本農場」をはじめられました。いくつもの砂丘をならして、三千坪の農場ができました。「荒浜、高浜、石地をつないで酪農地帯(らくのうちたい)」として、それに柏崎をつないで、物をうみだす町をつくりたい」という「村作りの夢(ゆめ)」をふみだされたのです。

海がわには高さ二メートル程のへいが五五〇がつづき、乳をとる牛が七五頭、この中には県下一の牛もいます。にわとり一千羽、そしてえさにするサツマイモやカボ

チャがたくさんつくられています。

▽……

大きな夢を持って



も と 荒 浜 農 園 の 事 務 所

吉田さんはこうして荒砂をこえた土地にし、乳牛も一千頭にするお考えでした。戦争がはげしくなって飼料(しりょう)を買い入れることがむずかしくなりました。くやしいことですが農園はつづけることができます。吉田さんは昭和二十九年になくなられましたが「一生とどこどころ」という本で、このことを「つくづく残念に思われてならない」といっておられます。「生きているということとは大きな夢を持つことだ」ともつけ加えていられます。

川口農場、品田農場とも大きな夢をゆずぶっておられます。

乳牛三〇頭をおいた。

一〇、小機帆船二隻作り出雲崎の漁師を招き、海岸漁業の再建も考える。

戦争がはげしくなって、遂に資本金三〇〇万円の柏崎飛行機工業株式会社となる。

○川口農場

昭和十一年枇杷島から移り、川口海岸地帯十町歩の開発に着手。

川に沿って八町歩の水田試作等の苦心をなめ、今日にいたる。市民の野菜の三分の一近くをこのへんから出す。

○品田農園

果樹栽培を主として新分野を開こうとしている。

根をはる

おくら山の歴史

—扇のかなめかしわざき—

▽……

古い根上りの松

この写真の松はずいぶん古いものだということに気づくでしょう。柏崎こうとうじっせん女学校のうら庭です。校長先生のお話によりますと、戦争の時、石油をはる機械を、南へ送る荷づくり板にされるところだったそうです。学校では「根あがりの松」とよんで、遠い昔をみなさんでしのでいられます。

三十年くらい前は、まだ砂の丘のなごりをみせていました。丘の上にこの松が

ならんでいました。「おくら山」とよんで、やはりはじめたスキーの練習場です。この松のならば方からも、昔のやしきのあとということがわかります。実は、この砂山は二列ならんでいました。井比おいしやさんの側の裏にも、松のならんだ山がありました。こちらの松は戦争の時、板になってしまつて今は見られません。

▽……

おくらが三カ所

この砂山と砂山の間に米



柏崎高等実践女学校裏の根上りの松

を入れるくらがありません。近くの村々からねんぐ（どのさまが取立てたぜいきんのようなもの）の米が

○柏崎の陣屋

（柏崎史誌上巻）
（甲子楼文庫）

- ・ 扇町陣屋 寛永元年、松平仙千代君領主となり、扇町に陣屋をおく。東西二十間、南北十六間五尺一寸、細井甚五右衛門奉行たり。元禄年中、稲葉丹後守の時まで此役所を陣屋とす。
- ・ 島町陣屋 元禄十六年戸田能登守の時、陣屋を島町に移す。奉行矢中多七郎の角で、そこに平屋やしき家四軒一軒は領主より建て三軒は郷中より建てられた。
- ・ 大久保陣屋 寛保元年松平越中守此辺を領し（本城白河）、同二年大久保村高台に陣屋を建築す。東西百間、南北五十間。
- ・ 大役所 この絵鞆庁、越後領刈羽、三島、魚沼、蒲原四郡を幹す。
- ・ 刈羽役所 刈羽郡領五万三千石支配。
- ・ 御領役所 幕領地を預り支配。

はこびこまれる「おくら」です。こういう「おくら」は今の郡病院のところにも砂山を背にしてありましたし、西光寺(さいこうじ)の下の、社宅(しゃたく)のならんでいるところにもありました。三方所です。大きいくらがたっていたとみえて、郡病院のところにあつたくらのやしきは二つにわかれて、一つは東西約五四尺、南北五四尺、もう一つは東西八六尺位に南北三八尺位とあります。そして倉番の家が三げん、陣屋の官舎が数けんたつていと書かれています。

▽……

柏崎県があつた

きょう土は江戸時代に、十一家のとのさまが代わる代わるおさめましたが、とのさまの代官(だいかん)

が来て役所のしごとをしたところが陣屋です。陣屋の場所もたびたび変わりました。わかっているので一番古いところが今の消防署のあるところ、次が鳥町、香積寺(こうじゃくじ)のすじむかいで小路のかど、そして最後が有名な大久保陣屋となります。九十年程前に柏崎県の県庁(けんちやう)のおかれたところで

刈羽郡長になった人もあり代議士(だいきし)になつた人も三人あります。石油王の内藤(ないとう)さんも、この時の生徒です。県下の中心はかしわざきの大久保にあつたのです。

▽……

たくましさを

この柏崎県庁の出張所(しゅつちやうじよ)が長岡におかれたこともありま

陣屋は刈羽、さんとう、うおぬま、かんばらの四郡をおさめました。その大部分のねんぐ米がこの三つのくらにあつめられました。集めた米は舟につみこむために、くらはその便利

柏崎県立の学校があつたのも、このころです。陣屋のやしきのなかに開いた学校で、小千谷(おぢや)、長岡、川浦村に分校をもっています。職員二四、生徒二〇〇、新潟、高田、佐渡(さど)からきている生徒もあ

みに使われた道につけられたので、今でも比角から諏訪町をつきつて、さいばん所前の広場へ出る道にこの名が残っています。くらに運び入れる道は「くら小

路」で、荒町から西光寺の方へでる小路を、そうよぶ人もあります。

佐渡からの金のとまったくらも柏崎保育所のあたりにあつたそうです。その使

い水を流すする場所が「ご金ぞうの泥はき場」といわれて、柏崎神社の裏、この間うめたてられた、どぶだまりのところだつたといわれています。

たくましさをもっていたきょう土が、土地のじょうけんをいかして、ひろい地域の中心になつていたことを知りますが、どんな形にかわつていくのでしょう。

○牢舎(番屋)

(甲子楼文庫)

島町陣屋まで下町の北浦(今の浄願寺付近) 柏崎日報社横の小路に牢小路の名あり。大久保陣屋の時、今の公会堂付近に九尺四方、六尺四方の二棟をたてる。公会堂西側の道は牢小路とよばれた。

○柏崎県立学校

(甲子楼文庫)

学鑑金田清風、教員首座青柳博愛、皇学教師三、漢学教師七、算術一、句読師三、英語一、舎長田中謙吉會計四、その他二。

○通用米札

(甲子楼大洲村誌稿)

天保元年陣屋御蔵役所より通用米札一斗、六斗、一升、五合等の数種を發行せり。

鵜川町が本街道

—数百頭の馬市も開く—

「ぼう町の小路

▽……

公会堂の前がわから水道橋へまっすぐにつながる小路(こうじ)です。ここに子どもたちにかみでらとよばれて親しまれた浄興寺(じょうこうじ)があります。この寺を昔の人が鵜川御坊(ごぼう)とよんだことから、この小路の名がつけられました。私が子どもの頃はなまって「ごご町」といわれたりしました。

昔はここが本街道(かいどう)です。中浜から大久保に出て、鵜川の「ごおろぎ橋」を渡ってごぼう町を

あがり、右にまがるとにぎやかなはたご町になる、この一本道が旅人のたいせつな道でした。「ごおろぎ橋」は今も水道橋のあたりか、もうちょっと川上の方らしいのですが、前に話しましたように長町・谷町・川町ができて、大橋がかかるまではたび人のいきぎしたところでした。

▽……

宿場として出発

たび人がわらしをぬいたり、一ぶくしたり、馬をのりかえたりする「はたご町」は相崎の一ばんにぎやかなところでした。いまの本町

二丁目ですが、そのころは扇(おおぎ)町、大町の二つをあわせてそうよびました。ずい分昔からたび人の立ちよる宿場(しゆくば)です。きょう土は旅行者を相手の宿場町として出発しました。

二百年程前のことを書いたものに、はたごや(旅館)十七けん、りょうり屋、茶屋、遊び場二十二けんとあります。また今のプールと公会堂下をむすぶあたりから浜へかけて、数百頭の馬市が開かれたそうです。八坂神社の前から「ごぼう町」

のかどまでが長町ですが、ここにならんでいりょうり屋で馬を売った元気で、お金を使い過ぎてしまう馬方さんがあつたりして、長町は「馬すて場」などといわれたりします。遠くや近くの村からうつりすむ人が多くなつてきます。宿駅

(しゆくえき)としてはんじょうしたのです。たくさんのお金をかけて本を作られたはたご屋の主人もありません。大天屋の市川さんが横山にあった西光寺を、今の所にうつしたお話を勝田さんが書いていられます。

ずい分費用がかかったものでしょう。昔はテンヤとよばれるのは今のデパートのような店です。大天屋は本町三丁目、中町というところに大きな旅館とデパートを開いていたそうですが、後にほっかい道へうつられました。

近い話になりますが、五十年ほど前の地図を小熊さんから見せていただきましたら、今の浜の天屋や駅前の天京、岩戸屋、番神のほくめい館などがはたご町にありました。駅通りの小竹天ずい堂さんもごぼう町のかどのイカリヤさんです。

四〇

柏崎日報、忘庵筆「こんじやく柏崎」

○長井郁翁

・元禄十六年「俳諧柏崎」全二冊

・宝永二年「柏崎八景」全一冊

いづれも京都で自費出版
本陣長井の主人 小町へ
入る小路の向い側の小路
(いろはや小路—長井小路)から西側数軒分

○市川笠腕

・正徳五年 「小太郎」全二冊 「柏崎四十八題」と別名のあるもの京都で自費出版

大天屋市川の主人 もと一二三屋、現在帝石の寮の西隣、間口十数間分
甲子楼文庫

○共栄座 明治十五年新設

明治一七、九、一三 星

亭演説会

〃四三、三、二八 生田の旗風興行

まちの「らく

長町に共栄座（きょうえいざ）というジューブタイもありました。これは後に柏崎座になり、文化劇場になります。

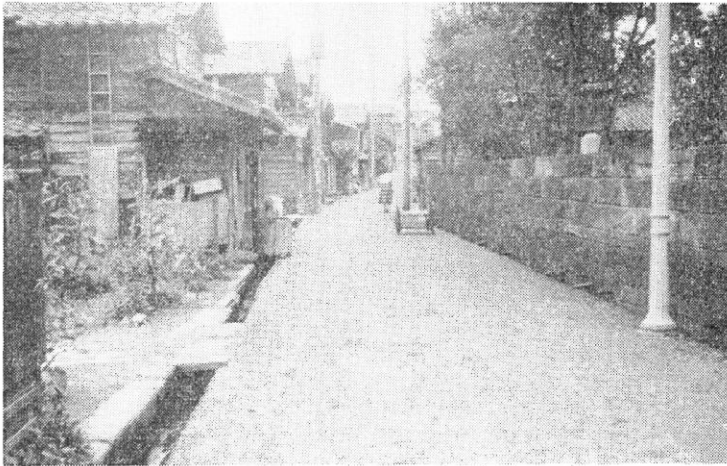
ごぼう町のイカリヤさんと、ほんたいがわのかどが源助（げんすけ）そばや、そのとなりが菓子子の佐野屋、そのとなりです。お寺でも見られないような、りっぱな木を使ったもので、シバイをかけて町の人たちを楽しませてくれました。客のげたは大きなたらいの水であらって、ぼんぞこのついた、ふるしきでついでくれます。なかは土間のますせき。ゴザがしいてあります。時には赤ゲツトがしかれていて、すわたり、あぐらをかいたりし

てシバイ見物です。

これが火事で焼け、たてなおし工事中に大風でつぶれ、またたてなおしたのが柏崎座で、今の文化劇場になります。

柏盛座ができたのは柏崎座より一年早く、四十八年前になります。映画が主で子どもたちは活動写真とよびます。トーキーではありません。清水ラジオ屋のお父さんがラッパを吹くと「さかまく流れに、教え子をもとめる松本くんどうの命は、あわれ風前のももしび：」吉原シンロウべんしの声で、画面にすいつけられます。正月ヤブ入りは満員で、ブタイの上のべんしの前にすわって、フトコロにあたためておいた、モチを食べながら見たりします。

宿駅で盛んになりはじめたきょう土ですが、やがて



旅行者相手だけでは困る時がきます。

今 の 鶴 川 町

〃四四、五、下旬 市川
団三郎興行

〃四四、一一、一三 桐
油屋火事で焼失

〇柏崎座 大正二年落成

大正二、八 片岡仁左衛
門興行 吉井村墓参

〇柏盛座 明治四十五年建
設、金六一座を招いて開
業

忘庵「古柏集」

〇丁字屋 代々問屋で大町
に住し、高札所となり、
重要町務にたずさわる。

〇宿賃 明治二十年前後の
話、翌日の握飯つき一泊
十二銭、仕出し刺身並二
銭五厘、上が五銭、当時
の米価一俵一円四十銭、
酒一升十一銭。

柏崎の町の交通

—馬車からバスまで—

▽……

キガミをニシガミ

「天神さん」をかざる時
シデ（切りさげ）を作りながら父が小千谷のキガミや小国紙、松代紙の話をしてくれたいことがありました。天神さまの前にそなえてある、私たちが木の版の上でパレンを使って、一枚一枚すったキガミをとじた通帳（かよいちょう）や、何日も夜なべをして作った大福帳や当座帳（とうざちょう）などをさして「これは信州キガミで、昔は西紙といったもんだ」と聞かしてくれました。ニシガミというの

はかしわざきの人だけのよ
び方だそうで、関西（かん
さい、京都や大阪方面）か
ら持ってきて、近在や長岡

方面へ売りさばいたキガミ
のよび名です。西の方から
仕入れてきて、東の方へ売
りひろげたからでしょう。
このことは古柏集に書かれ
ています。

地蔵さんと道標

昔はかしわざきは関西方

面へのいききが盛んで、北
陸街道（ほくりくかいどう）
は中浜の坂をくだって大橋
を渡り、橋づめ木戸を通っ
て坂をのぼり、右へおれる
とはたご町、道のまん中に
大きな石の地蔵さんが二つ
ならんでいます。一つは東
を向いて、もう一つは南を
向いて、今の公会堂の前あ



柏崎図書館にある折れた道標

四二

○道標は二基あった
・嘉永四年十月 柏崎新田
町千原清風堂（現ほてい
や呉服店）前 正面左奥
州通新瀉長岡道 右側右
三国通小千谷十日町道
左側右東京西京道

・嘉永四年八月 比角挽木
町かど 「右三国通小千
谷十日町街道」
「嘉永四年歳次辛亥秋八
月穀旦洲崎義種建之」

○道標建立者加藤のばばさ
ん（「越後の婦人」）
天保の頃、異彩を放った
婦人、木綿の道服に浅黄
の脚絆、妻折笠で鉦鼓を
たたいて托鉢。浄財すべ
て慈善にそそぐ。

嘉永四年の新田町角の道
標、生田萬の菩提を弔う
ため、埋葬地（当時は商
業高校裏の砂山）に石地
蔵をたてる。
婚姻媒介人として世話す
るもの幾百組になるかを
知らず云々。

○人力車（志庵著「古柏集」）
明治四五年、エンマ前の

たりだそうです。明治天皇がこの北陸街道をお通りになるといので、地藏さんは椀屋（今のあざみ貸本屋さん）のへいの中にかたづけられ、あとで南を向いていた地藏さんは、公会堂のわきのところとうつされて今のネマリ地藏、東を向いていたものは、小町のかどにうつされてタチ地藏です。郵便局の先祖さんのような丁字屋（ちようじ屋）も今の文化劇場へおりの火防小路の東角にあります。

町なかの街道をさらに歩くと今の本町五丁目、鈴木洋品店さんのあたりに一里塚がたっています。そばに井戸があつて、きれいな、つめたい水が旅人を喜ばせてくれます。その頃はこの付近に市兵衛（いちべえ）さんの家がただ一けんです。やがてえんま堂前の木戸を過ぎますと道が二つに

わかれます。今のほてい屋さんのところに道標（どうひょう）がたっています。竹やぶ、草むらを背にして雨風にさらされて文字もはげおちているところがあります。百年程前に女の方が旅人の便をはかるためにたてたということですが、それから三十五年ほどたつてその子供に加藤よ市さんという方が、中山石で新しくたてなおされました。高さ二尺位だったとおぼえています。石にほられた字は「左の道をいけば新瀉、長岡へ、右の道は三国通りで小千谷へ」という意味のもので、これは町がアスファルトの工事をする時、道をひろげることになり、図書館のあき地にうつしました。工事の時、二つにおれたものですから、写真で見るとおりです。

八十一年前ころから人力車がまちで見られるようになります。それから三十年後に安田と柏崎の間を乗合馬車が走ります。馬がカツカツと走ってひっぱるバスです。車が鉄輪ですから、ガラと大きな音をたてます。安田から西の入へ走る馬車はわりあい長くつづきました。黒くぬった箱がただったと思います。

乗合馬車が走る

と、目黒さんが買われて自動車屋さんを始められます。あとでこの二台を大塚さんと、目黒さんが買われて自動車屋さんを始められます。

この自動車が今はグンとふえています。昭和二十一年は七九台、二十六年には一九四台、二十七年になると二五〇台、二十八年には四〇〇台というふえ方です。昭和二十八年のしらべですが本町六丁目の一日の交通量は、人が六千二百人、自転車六千五百台、荷車二百四十台、自動車六百二十台、トラック五百五十台です。歩く人より車の数が多くなってきました。バスが赤くぬった大きな車で「これは便利なもんだノウ」と人気者になったのは昭和三年の六月。タクシーの遠山さんが始めたもので喜ばれました。

上州屋が東京から買入れ実物宣伝のため 俳人樵路を乗せ、挽木町角から鶴川の橋詰まで主人善太郎自らひき歩いた。

○乗合馬車（柏崎史誌下巻）
明治四十二年柏崎安田間
安田南齋石間開始
明治四十三年柏崎椎谷間開始

○タクシー（比角資料）
大正十三年国会選挙の時
民政石黒大次郎、政友松村武一郎、政友本党丸田尚一郎の三巴戦、この時丸田氏東京からタクシー二台と運転手を借りて来らる。この運転手の一人が本町二丁目の大塚氏。

○遠山バス（柏日資料）
遠山自動車店権利を得て
二宮伝右衛門、西川藤助
後援にて資本金一万五千元で市街自動車会社設立

○貸自転車屋
明治三十六年中越新聞記事
相当繁昌しているが
二、三年前は乗れる人は
二、三人。

黒山のような見物人です。

その頃の柏崎港

— にぎやかだった船の出入り —

▽……

大きなニシン舟

子どもの頃、泳ぎにいく

と、よく天屋の下に大きな船が入っていました。すこ

し沖にイカリをおろした舟と岸との間を、てんま船がいったりきたりして荷をはこびます。「ワイ、にしん舟だぞう」の声で、子どもたちは沖の舟まで泳いでいきます。北海道（ほっかいどう）から積んできたニシンを半分ちぎるか一本ながじりながら、泳ぎながらかかります。「きんのな舟が入ってサ、佐渡牛をおろしたんだ。きつついど、海

ン中をあるいておかへあがつてくるンでヤ。ほんのだがノウ」学校でなかまにこんなふうにからかわれても目をまんまろくします。

▽……

舟問屋の大倉庫

四十六年前のきろくを見ますと、天屋下（そのころの柏崎港）に出入りした船は汽船六七せき、帆船（はんせん）二六せき、和船九〇せきとあります。この頃

県外へ送りだされたものは石油が横綱で米が大関、きぬ織物が関脇、縮が小結、幕内に十品ならんで、全部のお金高がそのころのかん

じょうで一六三万円。この十分の七近くを船がはこんでくれました。北海道、大阪、かご島とかしわざきの舟のいかないところはあります。帰りにほりょうや大豆かす、織物、さとう、しお、ブリキかん、雑貨（ざつか）などを積んできます。この写真は浜の天屋さんの前がわ、道をはさんで長いへいの中ですが、品川船問屋さんが使った大倉庫のあったところです。港町の桑山さんのげんかんには、今も昔の船問屋だった時のかんばんが三枚さがっています。

▽……

なや町のよび名

こうした船の運送を回船業（かいせんぎょう）といふのですが、ずっと昔からさかんでした。二九〇年前

のもとかしわざきは家が七四七けんありましたが、このうち一四四けんは回船のしごとにつながるものです。船に積みおろしする荷を入れる倉庫のあるところですから納屋（なや）町とよびました。今の港町です、船問屋は三げん。それから百年もたちますと問屋は八けんになります。昔は小舟時代で、次郎吉さんなどは朝くらいうちにこぎ出して、佐渡にむかいます。夕方おそく帰ってきて、積んできた豆やエゴを問屋（とんや）にわたします。それがてんま時代になり、千石船となります。

天屋の山で親方が見はりにでています。沖に船が見えると、その帆かげではんだんしてホラ具を吹いたり大きな声でとなりますと、なや町のオカカたちがでてきます。バタをかついでハ

四四

○四十六年前の記録は大正二年旧柏崎のもの（三四郎、葉月著「柏崎」による）

・管外移出 十六品目

一、六三〇、八七〇円
移入 七十品目

七四八、九九二円
・出入船舶

汽船六七隻

四八、七五〇ト
帆船二六隻

三、一〇〇ト
和船九〇隻

計一八三隻
一〇、六二〇ト

六二、四七〇ト
○ハヤミチ

（柏崎常民文化同好会「海村生活資料」）

「港町（売子）が帳面などをいれて腰にまいている袋

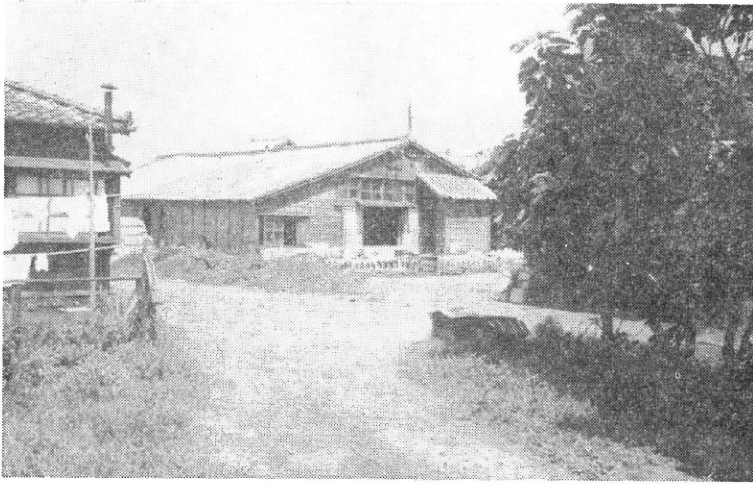
○回船問屋の看板
港町桑山茂氏宅玄関入口

「各国廻船問屋」
「港町運漕株式会社」

「桑山廻漕店」
○船舶しらべ

（回船問屋古記録）
寛永一四年

二〇〇石積まで柏崎一三



昔の回船倉庫のあつたところ

ヤミチを腰にまき、長いひものついたきんちやくがブクあとから砂の上に残るげ

たのあとが面白い。四角の中に、まるいマンジュウが四つ。桐のコロにワラオをつけた四ツ目げたです。浜の人のくらしのくふうが、こんなところにもにじみでています。荷あげが始まります。

たこ島そうめんやぬり物なら能登(のと)で積んだのでしよう。ゴザ表やスゲがさは富山、紙、そばは直江津で積んだ長野のものでしよう。福島の材木は海になげ落して、ひっぱりあげます。

田先生がしらべられました。にしんあみや米を積んで北海道やからふとまでいき、そこでさけ、にしん、こんぶを積み、ぐるっとまわって品川、大阪、尾道で売りさばいて、塩、反物、菓菓子などを積んで瀬戸内を通って日本海にで、途中も大あきないをして帰る、日本一周です。大きな船を十二、三世き持っていられたということ。この牧口さんも初めは人にやとわれる船頭さんでした。

ちつとやそつとのことではへこたれない、むしろはねかえしていくきもの太さときびんさが、きょう土の気風でした。

荒浜の牧口さん

百四十年位前です。荒浜の牧口さんがへさきに立って、すごい風雪のなかでも船をすすめました。名のひびいた牧口の氷破船(さいわりせん)です。これは多

宮川六、椎谷四
柏崎浦浜六二そう
内漁船一四、刺網船三、
小網船八、小浦送り船二、
回船一九、伝馬一六
文化四年

船間屋

間瀬仁助、中村表右衛門
宮川猶右衛門、岩下金五
右衛門、森口茂平、金子
九兵衛、奈良屋松村、星
野藤兵衛
慶応三年

回船五(三七石積から二
二〇石積)

小回船五〇

他国より入船数七〇
入荷売捌代 一五
米五千俵、種粕四百俵、
酒二斗入四百樽
この売捌代 七千兩
入荷売捌代 三万兩
(荒浜村誌)

牧口家の持船

愛染丸、栄徳丸、賢徳丸
明悦丸、稲荷丸、亀通丸
興徳丸、昌平丸、第二賢
徳丸等十二、三隻

いのちのうた

ちぢみの町柏崎

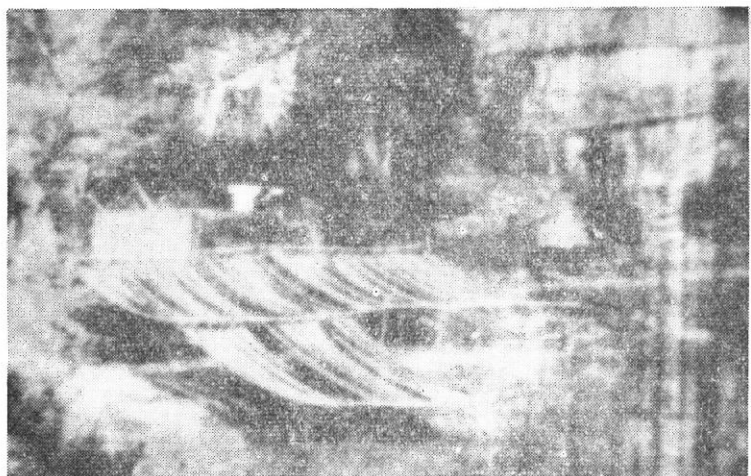
— 京都や大阪の御所まわり —

ちぢみが盛んに

二百五十年前に、もとかしわざぎの家の数は九一九けんになっていました。お寺の数が三九、その寺門前が一六五けん、町家（まぢや）七一五けんです。この町家に使われているげなん二〇〇人、げじょ一四九人となっています。北の国の宿駅としてのはんじょうぶりもそうぞうされます。そのかげに、きょう土の

くらしをささえる方法を考えねばならぬじょうがふくれてきました。新田のはいはつもそのあらわれですが、前から始められていた縮（ちぢみ）のあきないが盛んになってきました。これは宿駅について、きょう土に第二の時代を作ります。縮は麻糸（あさいと）で織（お）った布で、農家の冬うちの副業（ふくぎょう）がこの手織りでした。上条口やさば石口、小国でも縮を織りましたが、雪の深い

小千谷や十日町の方面が本場です。これを買ってきてあきないにできます。高級品ですから、このあきないは



さ ら し 場 (大正四年)

○町家調

（刈羽郡旧蹟志上巻）

・正徳元年

- 一、家数合九百十九軒 内町家七百十五軒 寺三十九カ寺 内十七カ寺 地中門前家百六十五軒
- 一、人数合五千五百人 内男二千八百四人 女二千六百九十六人 外に人数三百四十九人 下男二百人 下女百四十九人

○縮生産額と行商人調

（柏崎史誌上巻）

- ・元禄六年 三万反八十八人
- ・明和元年 四万反百人
- ・寛政六年 六万一千反百二十三人

（佐藤元重 「北陸」によるとこの頃の越後縮産額二十万反とあるから柏崎商人がその三割を扱ったことになる）

- ・享和元年 六万五六千反百五十人

○御所まわり行商先

かたんではないのですが、まちをあけてこの仕事に取りくむようになりました。

始めのうちは京都や大阪

の方へでかけました。「御所まわり」です。舟に荷をつんで四国、九州までおとくいさんを作ります。げんかんであきないをするのでなく、ざしきに通って縮をみてもらいます。ですから縮屋さんは床の間の字が読め、えがわかり、庭の作り方などにも目がこえていなければなりません。

一日に何げんもまわるというわけにはいきません。泊りをかさね、何度もかよって縮をひろげ、半日おしやべりしたのに、あきないにならぬこともあります。百五、六十年前からグンと

盛んになります。二百けんちかい人たちが「御所まわり」です。

▽……

さらし場のあと

十日町や小千谷で仕入れ

て、あきないにでるまでがたいへんな手間がかかります。九とおくりくらいでしゅうか。それぞれせんもんの職人ができます。さらし場のあとが多いのですが、丸田さんで使ったさらし場は二中ボブラ並木のあたり、丸田薬店のうら、ときわ高

の前池や比角校、吉浦通りの付近にもありました。こんや、さんも多い、まちないていの家が縮屋さんの仕事につながりを持ちました。縮を長くのばし、幅を

だすには、いく室もぶっとおして仕事ができる便利がいりようでした。表から裏までガンギの家です。

▽……

古着市もさかん

縮あきないの帰りには、古着やビンツケ油、モトユイなどの小間物を仕入れてきて売ります。舟いっばいの古着をもって来たときもありました。それでえんま堂木戸の内には古着屋さんが多かったです。後に縮あ

きないがだめになった時、そのまま小間物屋さんになったお家もあります。あきれるほど手まのかかるしょうばいで、たくさんの人のくらしもたてねばならず、縮やさんではできるだ

け出る金をすくなく、入金を多くする工夫がいりようだったのです。組をつかって、道中の宿賃、人足や馬の賃、船賃などをとりきめておいたりもします。

「食わなくなるからせっぱつまった気持で始めたもんだ」と花田屋さんが言われますように、何とかきり抜けようとすまきょう土の人たちの苦勞です。ここにまた、もんだいがひそんでいました。

(柏崎史誌上巻)
越中、加賀、越前、丹後若狭、近江、京都、大阪出雲、中国、飛騨、美濃尾張、長崎

○婦り荷の小間物仕入れ
(江戸行定飛脚石塚久造
道中手帳)(抄記)

袋物 本石町四丁目 伊勢屋
利八 金米糖 鉄鉋町横町
横田屋伝造 絵紙 小伝馬
町三 近江屋園吉 シャボ
ン 馬喰町三 伊能喜一郎
宝丹 下谷池ノ端 守田治平
小間物目鏡橋通塩町 大和
屋小平 写真と薬 本町通
二 小西六右衛門
吉田正太郎氏談

婦り荷で柏崎へ入った品物は、関西ものが圧倒的に多かった。最近まで大阪ものが多く入っているのも、この故だろう。

江戸商人との苦しい戦い

—江戸ゆきの将軍まわり—

▽……

江戸の商人と争う

「御所まわり」のちぢみ屋さんが船や馬に荷をつんで、京都から九州方面まで

かけあるいている時、「將軍まわり」のちぢみ屋さん

も江戸のあきないにいっしょうけんめいでした。ところがこの江戸あきないに大

事件（じけん）がおきてしまいました。江戸の十組間

屋との間のもめぐとです。十組間屋というのは江戸の

大きな間屋さんが、たくさんあつまってつくっている

組で、毎年きまったお金を將軍におさめて、間屋あき

ないのかんさつをもらって

いるのです。その天下の大間屋をあいてにして、ザイゴの小商人が奉行所（ぶぎょうしょ）さいばんであらそう事件です。

▽……

口銭をおさめる

百四十五年前のことで

す。「ちぢみ屋がたくさん

でてきておとくいをとって

しまうのでこまる。ちぢみ

売りをやめさせてほしい」と

と十組間屋が奉行所へうっ

たえてでました。そしてち

たんについていくら、ときめた口銭を十組にはらう」ことにしておさまりました。この時の人数は百十五人で、柏崎かんけいは二十人です。それから十五年後に「おとくいへゼンマイをみやげにもつてくるのはこまる」と、またさいばんです。

▽……

口銭をこまかす

そのよく年になると「約

束した人数よりもよけいの

人が売りにきている」とう

ったえられます。ちぢみあ

きないの人はぐんぐんふえ

ていたのです。百十五人を

古組としますと新組です。

をはらって、あきないをつづけることにしました。ところが次の年「もぐりのお前たちは一代かぎりをやめること。つたない人足は一人でもつれてきてはいけなし」といわれてびっくり。古組よりも高い口銭をおさめていたのにとんでもない話です。しらべてみると十組世話人がこまかしていてさらに古組となれあい

▽……

16年目に大事件

うまい汁をすおうとするこ

んたんがわかりました。そ

こで柏崎の甚七、春日の啓

吉が新組の代表になって十

組間屋をうったえました。

三カ月かかったさいばんに二人はねばり通して、これからは古組と同じように縮あきないができることになりました。啓吉は春日の外

○將軍まわり行商先

（柏崎史誌上巻）

江戸、武州、信州、羽州

下野、上総、下総、羽前

羽後、陸前、磐城

○十組間屋との訴訟（丸田

源兵衛、縮拒障一件控）

・文化十一年（以後縮商一

・五人ととりきめたが、

事件が起きた時、行商を

終って帰郷していた者も

あったので、新組事件が

起こることになる。

小千谷組 一三人

十日町組 一八人

堀之内組 一三人

頸城組 四四人

（信州組を含む）

柏崎組 二七人

・天保五年 持っていった

ゼンマイ十貫匁について

銀一分の口銭を乾物間屋

におさめること。

・天保六年 新人組の謝罪

・天保七年 新組古組の差別をなくする。

柏崎組 七五人

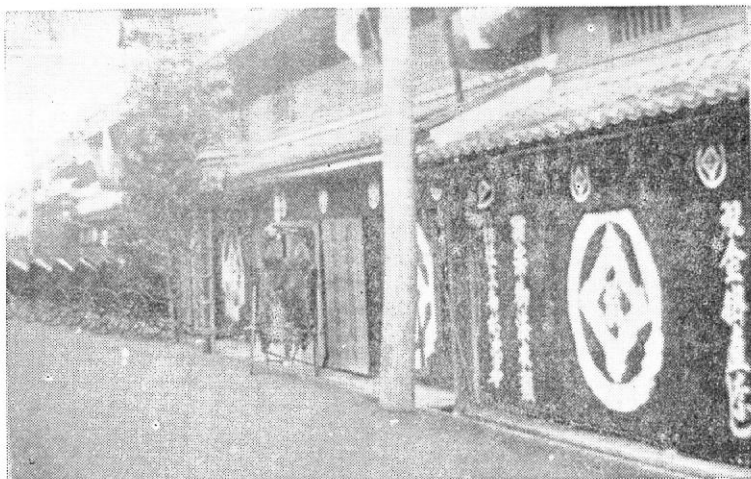
小千谷組 三四人

山さんで、大島甚七は一丁目の大島さんでしょう。よく年もまためめます。年中行事みたいです。けれどもこれから十六年目のものが火花をちらす大事件です。「どうしてもちぢみ売りをやめさせる」というさいはんになったのです。今の白木屋、大丸、三越、松坂屋という大商人をあいてにしてこんどは新道(しんどう)の金子亀七さんが代表になつてふんとうします。「四月も雪にうずまるほそぼそとしたくらしのために、女の手わざがうんだ縮を二百年らい、こうしてあきないにきている。それにちぢみぎい金を殿様におさめ、十組問屋には口銭もおさめてきた。今さらやめさせられるわけがない」と二年がかりの苦しいあらそいでした。不利な条件にはなりませんが、亀七のかつやくで

縮売りはつづけられることになりました。

▽……

しんけんな商人



五十年前の江戸の問屋一今の松坂屋一

四十年近いあらそいで、だんだん十組におされてきましたが、いなか商人といわれながらも、一步もひかぬあきない振りを示していました。しんけんなあきないです。花田屋さんのお話のように、縮仕入れの時からもう、ゆだんがありません。六十年前ころ、五郎松さんという縮のみわけのうまい人がいました。写真の松坂屋さんは毎年五郎松さんをたよりにして、縮の仕入れにやってきたものだからです。縮屋さんにこの目ができるのです。そして、この目はいつも旅にむいていました。土地でのあきないでなく「御所まわり」「將軍まわり」だったからです。きょう土の気風はここからも、うまれてきたといふことができましよう。

- 十日町組 二一人
- 堀之内組 一二人
- 頸城組 五三人
- (信州組を含む)
- 天保八年 定宿十五人の謝罪
- ・嘉永七年 地元領主への投銀(税)元禄年間から一カ年二兩十組問屋への口銭、文化度より一反三十匁として銀四分五厘。
- ・安政元年 送り荷の反数改め。
- 明治初期柏崎行商人(通商講則人名及び駅駅定宿簿)
- 東京組 四一人
- 同仕入組二四、飛脚三人
- 誠義組 五六人
- 布商組 三七人
- 精叢組 一四人
- 隆産組 二六人
- 栄産組 九人

手先で作った郷土

—まがったことをきらう職人—

手の仕事ちぢみ

かしわざきを作ったといわれる縮あきないは手の仕事の代表です。縮布は農家の女の人の冬うちの手織りです。三十き織るに九百二十度手をうごかすそうです。道具の「いざりばた」も自分たちでつくります。何度もさらします。あいを食わせるといった、そめる仕事も、こん屋さんの職人の手です。大引きといって、うんと伸ばし幅をだします。さずみあてはこまかいきずまでしらべます。そ

れからシケ取り、ピンセツ

トでケバをつまみシケトリ
ばさみで一いきります。そ
れからタタミ、これがまた
万力(まんりき)を使って、
むずかしい。すべて職人の
丹念な手の仕事です。
私が赤ちゃんの頃、くび
きや魚沼へ一万五千本、信
州へ一万本送られたという
筆や東京・大阪へ送られた
桐下駄(きりげた)六万足
なども、きょう土の職人の
手が作りだしたものです。



ローソクを作っている昔の写真

五〇

○縮織の手間

(鈴木牧之著「北越雪譜」)
僅かに一尺あまりを織る
にも九百二十度手を動か
す。ここを以て一端を二
丈七尺としても二万四千
四百八十四度手をはたら
かせざれば端をなさず。
是は其の風をいうのみ。

(ちぢみはくじら三丈が
定尺)績はじむるより織
おろし晒しあげて端にな
すまでの苦心労働おもい
はかるべし。

○笹あめ

(忘庵著「古栢集」)

昔 栢崎付近、農家で各
戸で飴を炊いて甘味料と
し、笹にはさんで年頭そ
の他手土産にしたもの。

○大久保の焼物

(柏崎史誌下巻)

場所淡島さんの裏側

明治十一年頃から小さな

瀬戸物工場あり。

明治二十九年神林倉蔵煉

瓦製造工場をたてる「毎
日戦場の如し」明治三十

△……

ひとつひとつ

この写真はローソクを作っているところです。みなさんがいつも見る西洋ローソクではありません。ハゼの実からとったロウを、練（ね）りあげて作る和ローソク（日本ローソク）です。こうして一本一本手で作ります。小さいものから大きいものまで、目方がぎまっていますのですが、こうしてロウをねってはかわかし、ぬってはかわかして作っても、なれた職人の手にかかると目方はピタリです。ぬりながら手で形をととのえていきます。ですから形を見るだけで、どこの家で作ったものかわかります。

げた屋さんの屋根や裏に

▽……

大部分が職人に

かしわざきのカジ屋さんはたいてい、はたご町の近藤カジ屋さんの弟子だということですが、重いハンマーをふりながら、こまかい手のわざを作りあげていました。昭和十四年に枇杷島についてしらべたことがあります。工業の仕事をしている家は、これより三十年前は、全部の十分の一がすこしかける程だったのに、五分の一になっています。うちわけを見ますと、半分は職工で、あとは大ぶぶんカジ屋です。おひやくしよの道具を作ったり、なおしたりする仕事です。農業の家が全体の十分の三ありましたが、農業につながった仕事がこの地区には多

いものまで、目方がぎまっているのですが、こうしてロウをねってはかわかし、ぬってはかわかして作っても、なれた職人の手にかかると目方はピタリです。ぬりながら手で形をととのえていきます。ですから形を見るだけで、どこの家で作ったものかわかります。この地区には多

いのでしょう。

▽……

わざをすすめる

いろいろの職人が多いですが、自分の使うものを自分で作る、という手の仕事はきょう土では大切な時があつたのです。海の水をて塩をつくって、くらしをたてる人たちもありません。この大きな鍋（なべ）をかしてくる家が「なべ屋さん」と勝田さんのお話にありました。今の原酒屋さんを「なべや」というわけだそうです。手の仕事はすぐれた物をつくりだすわざをすすめます。いいかげんなつくり方をきらいます。まがったことのきらいな職人かたぎがきょう土にしみこみます。

った仕事がこの地区には多

一年西川陶助大久保焼をはじめ。陶器に白化粧土をかけた呉須で絵を施した染付風のもの。

明治四十年瓦工場がたつ。早くから北惣、永井天神を作る。たいていの家で正月これを飾る。

○大久保の鋳物

（葉月、三四郎著「柏崎」）

応仁の頃、河内の鋳工が鯨波の大河内へ移り、戦国の時分大久保に腰を据えたのが創め、この始祖から分岐したものが歌代小原、原等の諸家。

○柏崎の漆器

（葉月、三四郎著「柏崎」）

元禄六年六月、三島神社本殿修復についての記録で塗師のあったことがわかる。

葉翁公が農家の敷地内に毎戸漆樹を植えさせたので漆液の産出をみた。

荒浜の網づくり

—日本水産界で有名—

▽……
米蔵(よねぞう)さんただ一人です。米蔵さんにお聞きした話をしましょう。

水さかずきの別れ

日本水産界(すいさんかい)に名のしれわたった、きょう土はえぬぎの手の仕事があります。荒浜の網(あみ)つくりです。古い本を見ますと、二百八十年ほどの歴史(れきし)をもっていて、八十年前のころ、一年間につくられた網は目方にして十二万七千五百貫(かん)とありますから、八千俵の米の重さです。大がたのトラック百台ならべないとつみきれませぬ。この仕事をげんざい伝えている人は、荒浜の渡辺

この網は縮布と同じように麻糸(あさいと)でつくったニンシ網で、全部北海道へもっていきます。早くから千石船でのいききはありましたが、七十年前あたりから汽船が荒浜にくるようになり、北海道からのほし魚や魚肥(ぎょひ)をおろして、他の品物といっしょに網をつみこむようになりました。それ以前は出雲(いずも)崎(さき)か新潟(にいがた)まで歩いて船にのるか、りゅう神(かみ)さんまいりをして、秋田(あきた)から船にのるかします。水さかずきで家を、村は

すれまで見送ります。子どもたちもかけよつてきます。この時「いってくるで。みんな元気でな」と手にゼニをにぎらせてくれます。これが「さらば銭」です。

荒浜の網が一番

▽……

北海道のニンシ漁(りゅう)はたいしたもの、ニンシのむれの中にかいをさしこんでも、たおれもせず、そのまま動いていくというのです。ひと漁するのと、三わくが普通なので、一億円の仕事になり、札(さつ)ははかりではかかって、かんじょうするということです。

このニンシ漁は荒浜の網でなければできなかつたのです。わく網をおこす時には六万貫からのニンシが入って、

てくるので、ひとところでも破けたらおしまいです。三日も四日も、この時をねずでまっていたのですから、網をしずめたり、破いたりしては船頭の恥です。この強さをもっているのが荒浜の網です。日本の網つくりのはじまりは、ほかに銭屋五兵衛の生まれた石川県金石(かないわ)、愛知県形ノ原(かたのはら)があります。金引(かなびき)麻(あ)というニンシ網せんもんは荒浜だけのものです、北海道を一手にひきうけます。

▽……

注文通りピタリ

水に使うものは越後のもの以外にないと、いわれる網をつくりだした荒浜の手は「引き」の強さだけではないのです。十五ヶ

○荒浜の魚網

(柏崎史誌上巻)

延宝元年

荒浜村牧口庄三郎が手船に魚網を搭載して北海道松前へ航行し販路を開拓した。

(刈羽郡案内)

原料は麻を用ゆ、方言は金引葎という。

明治十年産出高十万六千二百貫

販売高 三十万三千四百

円

明治十二年産出高 十二

万七千五百貫

販売高 三十八万六千三

百貫

明治十五年

産出高 十万五千八百貫

販売高 三十五万五千

円

にしん網十五万五千

円

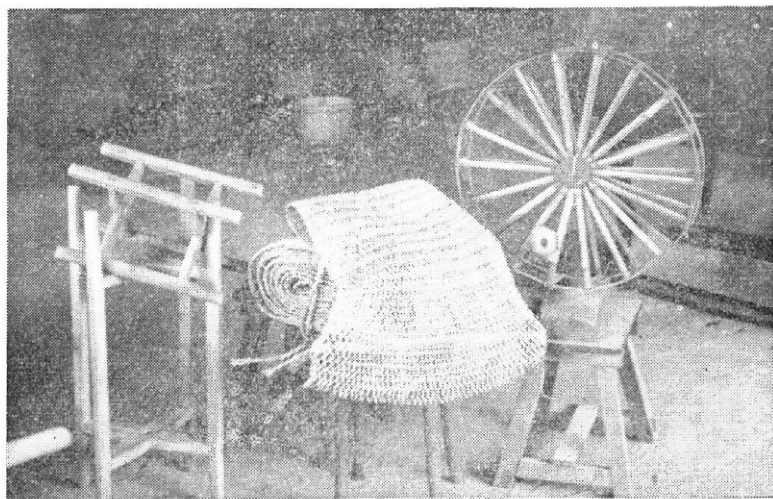
鮭網 十五万五千

円

さし網 四万五千

に、十一の網目をつくれるのはここよりほかにはない。それで、九^ツでも手早くつくる。十九^ツの網の糸、長さを注文通り、ピタリと目をそろえてつくったので、全国どこにもない。うでまえた、びっくりさせた話があります。富山の薬売りが、ふる帳面をほぐしてはった。しょうじに「大ヒゲ小ヒゲ耳ダレ目ダレオモテニ少々シミアリ」という字があるのをみて、人相書（にんそうがき）と思っただけで「全国をまわるし、なかまもあるから、この人をさがしてやろうか」といいだしたということです。ところがこれは人相書ではないのです。つくった網のひひょうをメモしたもので、ヒゲは麻糸です。からケバのこと、耳ダレは網の両はしの、横糸のむすび耳がだっている（たるん

だり、びっこになったり）ぞろい、シミアリはシミがこと、目ダレは網の目がふついている。ということな



網つくり道具とできあがった網のたんもの

のだそうです。

▽……

村中で網つくり

麻を仕入れてきて、できあがるまで十五とおりほどの仕事になります。悪田、いかづち、おぐろす、黒川、よしい、花田、大新田、刈羽の方まで仕事がまわったものだそうで、荒浜ではほとんど総がかりです。こうしてつくりあげるのが網のきじ、いわば網のたんものです。子どもでも学校へいくまでに、幾かけかのおうみ（つなぎ）をするのが、習慣になっていたということです。

○原料麻の購入先

信濃川沿岸

長岡、栃尾、蔵王、川西、黒糸、中条、中の島

信州、上州、会津、岩手
○主として送りだした方面
福山、江差、神威以南、小樽以南、稚内、北見、樺太湾内、樺太西海岸

米蔵さんの網工場

— 開拓へ努力の歴史 —

▽…:

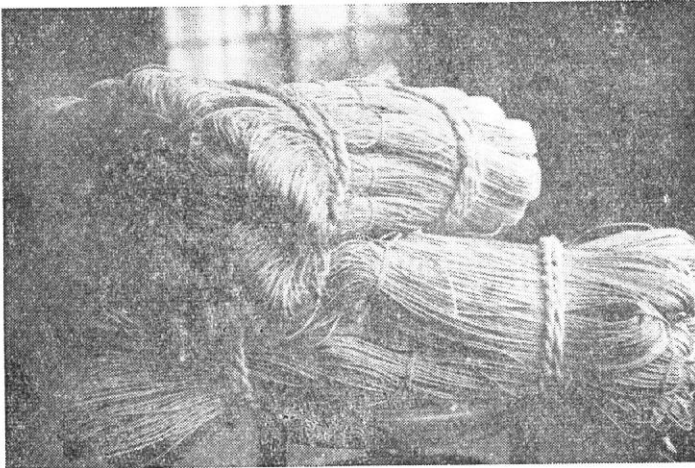
二千人からの副業

荒浜を柱にした網づくりは、近くの村二千人からの人たちの副業で、しかも昔からつづけられて、名をあげた仕事ですからしんけんなものでした。家じゅうでできる作業で、五人家族なら百五十日でやれるもの。これが米十俵分くらいのも、はたらきちゃんをいただける仕事になります。親もとの渡辺米蔵さんの仕事場では四、五十人の人たちがつめかけます。

馬にのせ、船につんで材料の麻(あさ)をはこんで

くると、先ずカシラトリ、かしらとりノコギリで麻の根もとをきりとります。それから麻イラミ、厚い、うすい、やわらかい、こわいのでつくる品物をきめるためです。よりわけたらカケダシ、ヌラシはすぐりだした麻を塩水でぬらす、これはしなやかになることと、次の作業を始めてもかわきすぎないからです。サキでさいてウム、糸にしていくのです。長い糸にしますから麻をつぎたしてはウムのですが、つぎめがふくれがちですから、ナカツギでむら

をなくするようにします。ツムギ、つむいでとる、小わくにウツシ、前頁の糸車



ウ ム で 長 い 糸 に す る

が回りだします。小わく三つの糸をアワセて、けばとりのコキ、それから前頁に

あるような大わくにまきとるのがワクカケ、ハズシでタグリ、いよいよ目カケと

○刈羽郡の魚網

(中越新聞明治三六、一)

明治三五年度の刈羽郡魚網の製出高は三四年に比し六割、北海道不漁のためなりという。

産額左の如し

高浜町鯨網 二、一三〇貫
石地町鯨網 四、六一六貫

荒浜村鯨網 一五、〇〇〇貫
六七、〇〇〇貫

同 鮭網 一七、〇〇〇貫
一三、〇〇〇貫

同 鱒網 一四、〇〇〇貫
八、〇〇〇貫

計 一五〇、一六〇貫
四八、二〇〇貫

九二、八七六貫

網商人 九三人
職工 男 二四〇人
女 二七五人

スキで目ざす網の形ができ
てきます。ノシてタタミで
送りだしの用意にかかるま
でになります。ゴムあみの
ようにバネのある網になり
ます。ふつう一たんの網
で、三十ほどどの長さで
す。これが三十五人でまで
できます。これをカラミ糸
で幾はばもつないでニシン
網にしたてる、十二たんか
ら十四たん使つて一わくの
ニシン網ができるというこ
とです。

▽……

昔は月夜に作業

この作業は十月から始ま
るのが普通です。麻を塩水
でぬらすのですから夏です
と、一日でむれてしまつて
色が青くなり、九月でも黒
ずみ、十月ころならきれいに
仕上がり、強いものにな
るのだそうです。ですから

夏仕事をしなければならぬ
時は、昔は月夜にしたもの
だという話です。米蔵さん
が三十年前におさめた網
を、北海道で見られたとい
うことですから、つくる時
の心くばりと、使う人の手
入れとで、荒浜の網のいの
ちを長くしたのでしょう。
一月の終わころまでに北
海道へ送れば、ニシン漁に
まにあうので、それまでの
つくり賃(ちん)は高く、春
仕事からは安くなります。
ですから秋から冬にかけ
て、うんと忙しくなり、荒
れ時をめぐけて北海道へむ
かうことになります。不便
な昔であつただけに、荒浜
の人たちの、きもの太さを
思わずにはおられません。

▽……

くじけぬ愛郷心

早くから荒浜の人たちは

北海道にわたりました。き
びしいくらしたえて、土
地をきりひらく勇氣と努力
をもつていました。なみな
みならぬかくごがなければ
できない仕事です。船主に
なった人もあり、石炭山を
もつた人もあります。さし
網の方法をもちこんだのも
荒浜の人たちです。しばの
げん七さんが漂流(ひょう
りゅう)して、この北地に
つき、さけ網の方法を教え
たといふことです。すすん
でくじけぬ心がきょう土に
ひそんでいたのです。
荒浜の網は、麻を福島、
しなの川にそつた地方や長
野県などからとりよせま
す。青麻はぜつたいに使
いません。からむし(麻)の
質によつて使いみちがかわ
ります。つり糸にするのも
あれば、アバという網を浮
かせる道具をしばつたり、
笠島のだんご石(後に荒浜

では土たんごをやいたそう
ですが)をしばつてシズミ
にしたり、能生(のう)谷
ではすげ笠をつくる時の糸
にし、ぎふ県のやなぎこう
りをあむ糸、長野のたたみ
糸、ほうかん堂の筆のもと
じめ、とちぎのげたのはな
おのしんなわ、えちごの縮
といろいろになります。ニ
シン網は引くことにつよい
特長を持つて「金引きお」
とよばれるほどの麻でし
た。

米蔵さんの網工場は歴史
をうつつして、きょう土の心
を物語っています。

○刈羽郡の副業

(柏崎日報大正四、一)

小国の製紙、荒浜の製網
等何れも著名であるが、
大正三年中の産額

製紙	四、八六一締
製網	一七、三〇七円
製細工	六、〇〇〇反
縮布	二二、一三一円
木炭	一、三〇九円
鶏卵	二一四反
竹籠	八三六円
	八四、五〇〇貫
	八、九三〇円
	六三、三二〇コ
	一、四五九円
	一、一〇〇円

尾花祭りの行事

— ひっこしてきた柏崎神社 —

8月27日の尾花祭

かしわざきの気風をもうすこしさぐってから、次へ話をすすめましょう。

山田良平さんの「さいじ記」に尾花祭の話がありま
す。私も子どものころは、
この八月二十七日がたのし
みでした。朝早くビシャモ
ンサンのけいだいの尾花を
もらいにいって、長い葉や
そのさやははぎとって、き
りそろえて家の人の数より
一人分よけいに、ハシを作
るのが私の仕事でした。春

つけたシオイワシを、この
ハシでかめから取りだしま
す。これからはいつでもシ
オイワシがたべられるので
す。赤飯を神だなにそなえ
てから朝のご飯です。まっ
さおなハシで赤飯をつつく

のがうれしくてなりませ
ん。ときには赤飯をつまも
うとすると、尾花のハシが
クニヤリとまがって食べら
れません。そんな時はお寺
のけいだいへ飛びだして行
って、根もとの太いところ
からきって作りなおしま
す。こんどは太すぎて、よ
くはさまれない。それでも

たのしいでした。おひるも

晩も、このハシで食べたい
のですが「朝はんだけのも
んだ」ととりあげられて、
たばねて紙につつま、中浜
へ使いにいく時、鶺鴒の大
橋の上から川になげこみま
した。「きょうは諏訪さん
の日で神さんに約束したん
だから一度だけ、これで食
べるんだヨ」父にそう聞か
されたものです。「このハ
シでご飯を食べると、山へ
いって、ススキのハシを作
ってべんとう食べてもあた
らない」という人もありま
した。

川中島の一騎打

いつたえられた話とい
うのはこうです。四百年位
前のこと、上杉けんしんが
川中島の一騎打(いっきう

ち)の時「もし勝つことが
できたら、お祭日の八月二
十七日には青壹(カヤ)の
ほのハシで朝飯一度食べさ
せて、いつまでもご恩を忘
れません」と諏訪さんに祈
ったのだそうです。この時
のけんしん方の選手は、か
しわざきの長谷川よござえ
もんで、みごとに勝ちまし
た。

柏崎神社に合併

比角にあった諏訪さん
が、かしわざきにうつた
のはこの時だといわれま
す。比角本村の近く、雀(す
ずめ)森に鏡(かがみ)日
吉神社があります。これが
諏訪さんのあとを残すため
に、たてられたお宮だとい
うことです。ここに諏訪さ

○柏崎史誌

延暦十二年七月、坂上田
村麿、三島の郡司高志連
に命じ、日隅の県に大己
尊(大國主命)、建南方
命二柱を勧請し、日隅宮
と称す。

(享保町鑑)

日隅宮字花水にあり、祭
神大國主尊及び建南方命
を合祀す。故に日隅宮と
稱し、其地を須々美杜と
呼ぶ。

当所日隅の宮を建てて村
名を日隅村という。後世
比角と仮字す。

(小林存著「県内地名新
考」)

柏崎市比角(ヒスミ)は
至み田と解すべきである
う。

(甲子楼文庫)

其後、柏崎須賀町に移す
元和七年、社殿を須賀町
より少し北に当る浦町に
建築、諏訪社の古池諏訪
小路の西角にありしが、
今は人家ありて知る人も
なし。更に文政年間焼失
後現地(柏崎神社)に移
す。

柏崎ひとつば



旭町から柏崎日報社へ抜けるけんどんや小路

んがまつられたのは、千百六十年程前と書いてあります。初めは日隅宮（ヒスミノミヤ）と呼ばれました。まつつてある神様がアマツ日隅といわれたオオクニヌシノミコトと、諏訪さんと呼ばれるタケミナカタノミ

コトの二柱だからです。オオクニヌシノミコトはイナバの白兎の話でみなさんのオトモダチ、この神様の二番目のお子さんがタケミナカタノミコトです。そしてこの場所を須々美杜（スス

この写真はケンドンヤ小路ですが、これが諏訪小路とよばれたもので、旭町に諏訪さんがうつったので、はじめ須賀町にうつり三百三十年程前に下浦町にうつります。ヒトツッパ火事というのが

ありました。今のサカナバあたりから火がでて、七百四十一けんを焼く大火事です。下浦町の諏訪さんも焼きました。それで火のきけんのないところへ、ということ、その頃は砂山だった今のところに、ひっこしとなったのです。砂原ではふさわしくないと、南下（のうげ）からきていたげんが大小の松を植えました。あの枝をひろげた大きな松がそれです。やがて田町の神明さんや、南町のごんげん様をはじめ、いくつかのお宮をこの柏崎神社に一つにしました。しんこうは根強いものですが、よく思いきって一つにしたものです。

文政七年四月廿一日西永寺下喜六方から出火、七百四十一戸焼失。
家五六〇、土蔵六二、小屋七四、社四、寺一六、堂六、門三。
この時、須賀町にあった諏訪社も焼失した。
柏崎町内神社合併
明治三年二月廿八日
柏崎神社へ合併
神明宮 丹保（田町）
諏訪神社 多聞新地（田町）
熊野神社 南片町（南町）
諏訪神社 権現小路）
諏訪神社 エンマ町（七丁目）
諏訪神社 諏訪新田（諏訪町）
八坂神社へ合併
諏訪神社 小町
稲荷神社 扇町（二丁目）
稲荷神社 長町（二丁目）
○桜提灯のはじまり
明治九、三、九山田八十八郎 各戸異様の提灯では失費不少と願いでたところ、同三、一二県令永山盛輝より不苦候事と許可あり

三日講のゆらい

— 大久保のようはい所 —

▽……

ごくらく寺と陣屋

神社の話になると、きょう土にはちょっとかわったお宮があります。昔のきょう土の気風を語ってくれるものです。

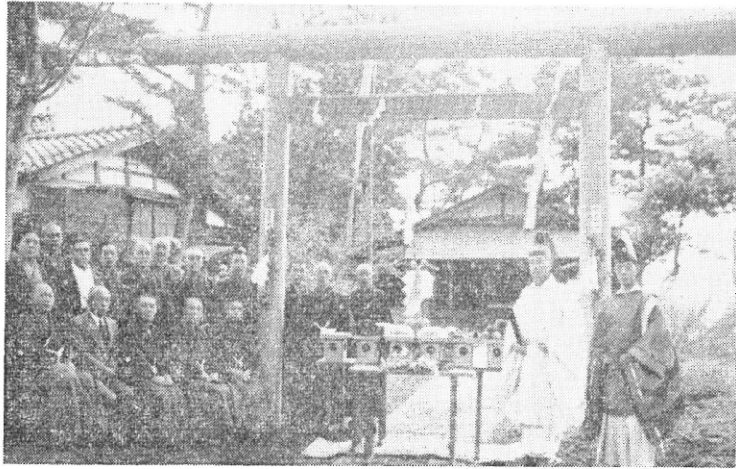
ごくらく寺大門を入っていくと、右がわが陣屋のあった高台、左がわが西光寺山になります。この高台はもとは一つの山になっていました。この大門の道は、坂道をのぼって西光寺山の中腹とおり、急な坂をくだって、ごくらく寺の山門をくぐるようになっていたわけ。六十三年前

に初めて鉄道線路がここにできたのですが、その時、山すそを切りさげて線路みちができましたから、大門の山みちもほりわって、今のようになりました。

この右がわの高いところに、小さなお宮があります。このへんいったいが、二百年前からの大久保の陣屋のあとです。お宮の東がわに陣屋の役所があり、九十年前に陣屋がなくなった時、柏崎県の県庁がおかれま

しろの低いところは長屋がならんでいます。これだけの半分でしかありません。

お話ししても、陣屋のきぼ



三十年前の大久保ようはい所

五八

○大久保遙拝所碑面

皇太神宮遙拝所

從四位勲三等永山盛輝

書

明治二十一年戊子十月建

之

取 締 二宮伝右衛門

副取締 歌代 吉松

社 長 小林勝次郎

社長補佐 大掛 喜作

世話人

師 柏崎 松浦吉五郎、中村

甚藏

大洲村 原伝左衛門、石

塚久造

比角 石黒久助、小林卯

八郎

周旋人

大洲村 小林市右衛門、

石塚国太郎、今井平太郎

品田吉右衛門、原七右衛

門

柏崎 小林儀助、小林孝

太郎 松浦太助、市川岡

吉、速水重五郎、沢田安

之丞

比角 石黒治作、根立栄

作

神風講組中

大がかりなものだったことがわかります。

▽……

ようはい所を作る

七十一年前のことです。

かしわざきが町になる一年前ですが、中浜や大久保、かしわざき、比角、しもじゆく、南さば石などの六十名ちかい人たちが、信仰（しんこう）を一つにして石ひをたてました。それがこの遙拝所（ようはいじよ）です。このへんの人たちがジンプさんとよぶのは信仰で作った組を講（こう）といいます。その講の名前です。この講の会長は柏崎厚信社（こうしんしゃ）（間もなく、柏崎銀行になり、今の四銀支店になり、九代目の町長二宮さんのお父さんです。副会長は大洲

の村長歌代吉松さんでした。

▽……

月の三日に集まる

この頃の日本は、ちょうど今の私たちが、生まれかわった国づくをしているように、一皮ぬいだ国づくりに、いきいきとしていた時で、きょう土にみなぎって

いた気風の、一つのあらわれを、この遙拝所に見ることができましよう。今はかたむきかけてつかい棒をしている社殿ですが、きょう土のねんりんを示すものです。石ひにきざまれた世話人は、大部分が縮屋さんと大久保のいもの屋さんです。世話人の一人の私の父方の祖父は、荒町の江戸飛脚（ひきやく）ですが、道中でも字のべんきょうをしたものだそう、ポケット

用の辞書が何さつもあります。県令（今の県知事）の永山もりてるさんと歌のやりとりもしていますが、これがきょう土のふんい気でした。月の三日にはいつも集まって話しあいます。お宮のそばの小林さんがよく世話をされました。この写真は三十年ほど前のものです。

▽……

諏訪町神宮さん

諏訪町のジングウさんも

八十五、六年前に、砂原のやぶをせりりして「新田の遙拝所」と山むろや西の入、たじまの人たちに呼ばれるものができたのが始まりです。たいていの家で正月になると、神社から受けてきたお札を神だなに入れますが、その大麻（たいま）を配布する新潟県の本部にな

って、佐渡までその仕事ひろがり、新田（諏訪町）や小国、南鱒石、松代の方からも信仰する人たちが集まって、盛んなおまつりがつづいてきました。私の母方の曾祖父で西谷の当山健治（たけはる）が三十代でここにきて、神宮のオジイさんとして子どもたちに親しまれました。オジイさんの子どもも京都の平安神宮や仙台（せんだい）の大神宮の宮司（ぐうじ）をしました。

かしわざきにとけこんだ信仰に「天神さん」がありました。これは数年前に山田良平さんが、柏崎日報にくわしく書いていられます。私も毎年一月二十五日には父につれられて、比角の「ケンリヨボさん」（見隆坊）へお参りにいきました。

大洲村四、下宿一、柏崎七、比角八、山室四、村講中、石曾根一、上州高崎一
石工 高橋仁良治
男 藤 作
二男 藤次郎
三男 藤太郎

○神風講

明治九年 講長小林勝治郎、松浦国平、松浦吉五郎、松浦多助、今井平太郎、安藤甚左衛門、石塚久藏
内務省より許可番号
第一千一百番神風講神宮
教会
明治十一年 陣屋鎮国宮跡に本殿を作り、伊勢より御霊を受け、遙拝所となる。
明治二十一年 本文の建碑

柏崎の名物火事

—町の発展をさまたげる—

町の七〇%が灰

勝田さんの本に「百年ばかり前に発行された、各地の名物を書いた本に『柏崎の名物は火事』と書かれている」とあります。たいへんな名物です。二百年前のミツヤ火事で四五二戸焼けそれから五十年後にはヒトツバ火事で七四一戸が焼けたのですから、そのころの

かしわざきの十分の七くらいが灰になってしまいました。そしてまた十七年後に二一戸、さらに九年後に三四八戸がもえてしまう、というように大きな火事がつづきました。「火事が名

物」ということばのなかに、ころんでは、立ちあがらねばならぬかしわざきのせつない願いがひそんでいます。

かしわざきの卓越風（たぐえつふう）は西北の風で、て吹く風）は西北の風で、まちならびかたと同じです。まちの上をまっすぐにひとなぜする風ですから、西の方に火がでると、ひとなめにされるきけんがあるわけです。

同じ風向と町並

明治十三年八月のミヤ火事は今の公会堂わきから出火して三丁目万平堂のあた

りまで十五、六時間もえつづけ、なや町は五、六けん残すだけです。八四八戸焼けました。

それから十年後のオオクボヤ火事はタカラパンの前がわのフロ屋から火が出て四ツ谷あたりまで五四〇戸そして明治三十年四月のヒノヤ火事で一、二三〇戸を焼きます。火元は今の本町

二丁目赤昌食品店のところに日野屋があつて、その裏の方にあつた日野屋とイサミヤの共同小屋だったそうです。公会堂の岩山中段の間（ま）と呼ぶたてものがあります。そこに都陽軒という三階だての家があり、これが飛び火でもえあがります。えんえんともえながらグラッグラツとゆれ火のこをドツと飛ばして扇町へたおれました。飛び火飛び火で大きくなって、とうとう四ツ谷の丸田さんあ

たりまで焼けてしまいました。一面の焼野原です。内山さんのお話を読みますと、はたご町あたりは、毎日がえんま市のようににぎわっていたところで、それだけに火事のごんざつはたいへんで浜へにげ、何々屋と書いてたりしたものだそうです。

80年に10回出る

こういう大火が次々と起きて、ミヤ火事から先年の宮川大火まで十回を数えることができます。八十年間に三、七三七戸を煙にしたことになりました。長岡よりすすんでいたかしわざきが立ちおくれたのは、火事のためだという人もあります。まちを二倍、三倍にする力を灰にしてしまったか

○八十年間十回の大火

（柏崎史誌下巻）

・酔屋火事

明治一三、八、八

・大久保火事

明治二〇、三、二七

・日野屋火事

明治三〇、四、三

・挽木町火事

明治三四、四、二五

・荒浜新田大火

明治三一、五、一五

・下宿上の山大火

明治三五、一、一九

・荒浜村大火

明治四二、四、九

・広小路チンゴ大工の火事

明治四四、三、二七

・桐油屋火事

明治四四、一、一三

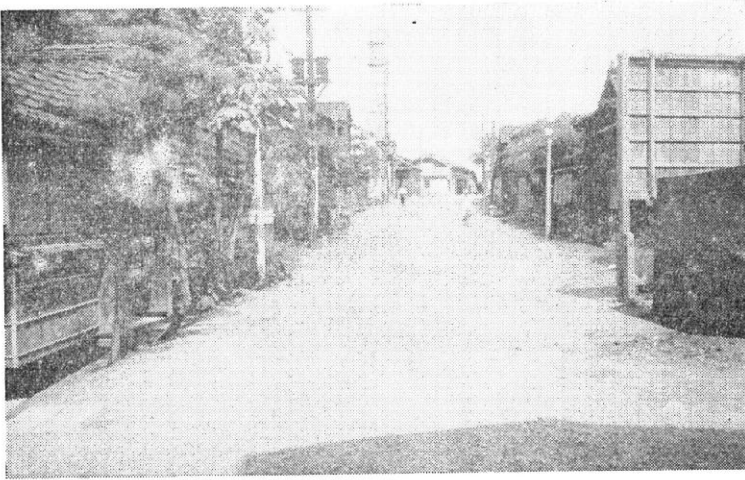
六二三戸

らです。

▽……

火を防ぐ広い道

この写真の道は火を防ぐために作った広い小路です。本町交番の下と元の局のわきにあります。かしざしきは砂原へうつって新花町ができます。土ぞう、石ぐらの家も多くあります。また組をつくってアタムジンもはじまります。この間このムジンで作ったアタン屋根をなおす工事をしましたら、屋根うらの両はじから、姉の使ったカラカサが一本ずつ出てきました。何かのおまじないなのでしょう。町内ごとの用水池も作られます。火のこわいことを一番よく知っているはずですが、昨年は火事が三十四ありました。この損害は柏崎中の全部の家で



本町二丁目交番下の火をふせぐための小路（こうじ）

一、六〇〇円を一度にすてたと同じくらいになります。かしわざきがいくさで焼

かれそうになった時があります。明治三年ですが、この時、大洲の小熊六郎さんと今の信用金庫のところにやしきのあった、星野藤兵衛（とうべい）さんが骨をおられて、いくさの場所になることを防いで下さいました。藤兵衛さんはかしわざきの歴史をかざる人です。人のためにたくさんのお金をなげだし、名誉欲（めいよよく）はなく、考えの深い、若い藤兵衛さんの一生は、わたくしたちにたくさんのお金を教えてくれます。今の三中の新校地は星野さんゆかりの土地御殿山です。みなさんの手で藤兵衛さんのおしごとをしらべてもらなさい。

・宮川大火

昭和三二、四、一四
一一四戸

○柏崎の火災統計

（消防署資料）

昭和二十年より三十三年
までの累計

火災発生数 三一五件
損害額 二〇二、四七九、八一五円

○火防線工事

（柏崎日報大正四、一〇）
港町では火防線道路を開くことにし、柏崎郵便局傍より不動院横の海浜に通ずる道路をとりひろげることにした。工事予算が千二百円に上り、関係家屋十一戸から種々申出があるため町営工事たらしめんと交渉をはじめた。

高忠さんの偉業

—底に流るゝあきんどだましい—

高忠さんの庭

本町二丁目に白く、美しいすがたを見ている公会堂は、二十年程前にできました。中浜の内山さんが重役の清水組が、この工事に二年あまりかかったものです。これは高橋忠平さんのころさしをついで、奥さんのサワ子さんが、このけい費全部とご自分のやしきや庭をそっくり「公会堂をたてるように」と市にきふされたからです。いつもぎおんの祭になると、庭の門をあけて「自由にお入り下さい」とあんないしてあります。子どもたちは親しみをこめて、「高忠さんの庭」とよびました。それが今はかしわざきの庭になっ

て、人々にやすらぎをあたえてくれます。この写真はその記念にたてられた銅像です。戦争で供出しなければならなかったので、今はこの台石に銅板のリリーフがはめこんであります。

▽……

からだひとつで

かしわざきに、こんなりっぱなおみやげを下さった高忠さんの一生は、広小路で縮屋さんをしておられたお父さんのもとをはなれて、ひとり立ちをしなければならぬ苦勞から始まります。

銅像の台石にきざまれた、丸田さんの文の中に「小さい時からあいざわ先生の塾（じゅく）で勉強し

た」とありますが、高忠さんがもてでした。荷車ひいたのくらしは、からだ一つで笠島や米山町へあきない



公会堂庭にあつた高忠さんご夫妻の銅像

六二

- 公会堂（金子清吉著「市になつた柏崎」）
- ・昭和八年五月 西巻進四郎町長を招き、私邸、庭園に一万円を添えて寄付、プール建設費五千元も同時に寄付
- ・同年六月七日 高橋忠平氏逝去
- ・昭和十二年七月 サワ子刀自、公会堂建設費として十七万円を寄付
- ・内山熊八郎氏の好意的寄与も加わり、清水組が二年余を費して建設、工費二十万円、用地千二百坪
- ・室数十二、食堂、会議室、読書室、日本間、図書室、浴場等あり、階上講堂は五〇〇人収容
- ・昭和十四年一月開設 利用状況二百十五回、使用室数三百六十室
- ・昭和十五年十月までの分百八十回、三百室
- ・元柏園の命名は芳沢謙吉
- 高橋忠平氏（昭和二十六年越後タイムス忘庵筆

にいたり、卵買いまでしたものだそうです。

▽……

十年の苦しみ

六十年前にシャンハイに渡り、タイワンへいき、そこで呉服あきないを始めましたが、四年でホンコンへうつります。その頃奥さんは何日も「水をのんでくらは、そうぞうできない十年の苦しみでした。こんなときでも仕入れに借りたお金は、けっしていいかげんにしない。「借りたものは約束の日までにかならず返す」高忠さんが一生まげなかつた主義の一つです。

明治三十八年シンガポールであきないを始めます。私など生まれにくいころです。もとでを借りて仕入れる苦勞もたいへんです。こ

いではありません。それが呉服や衣類の越後屋とよばれて、外人の信用をあつめる店にまで、きずきあげられました。タイワン銀行がお金を借りにくる程に盛んになります。

▽……

ゴム園の仕事

いいかげんな気持で、デッカイ仕事をしにくる人たちもあって、せつなくなる和高忠さんに助けを求めます。よくめんどうをみてあげたものだそうです。そのため高忠さん自身が苦しくなることもあったとか聞いています。佐渡位の大きさで、林のしげった島が高忠さんのものになったのも「人にめいわくをかけた」という主義から生まれたものです。広いゴム園の仕事にも手をのばされました。ここでトラを生けどりにしたこともあり、ゴクラク鳥

の姿も見ることもできたそうです。このゴム園が、かしわざきの公会堂やプールになったと思つてよいかもしれません。

▽……

二度しくじるな

紙きれ、ひもきれもそなえつけの箱にひろわせておく、破けた包紙もこの紙ぎれをはれば、完全な一枚になるという教えです。その反面、公共の仕事にはどんなきふをされました。サワ子さんの分だけでも柏工高をたてる時のきふや大口を数えると三十けん以上になります。

店の人たちはいつも「どっちがいいか」と考えさせ「同じ方法で二度しくじるな」と教えられたそうです。

スポーツマンが食べ物に注意したり、体をたいせつにし、生活のきまりがよい

のに感心されて、店の人たちにも運動をすすめます。野球、陸上競技、水泳としごとのあいまの練習です。日本人クラブで時々、大会があります。外人もたくさん見物にきて、はなやかな高忠チーム、ピンチです。ファーストを守る若主人が「平気々々」と声をかければ、小林捕手は投手とサインで作戦、その時「しっかりやれー」と大きな声が入りてきました。ヒョイとみるとダンナの応援、声もでかいが山高帽に紋(もん)つきはかまですから、びつくり、とたんに元気がでたという話があります。

「おれはあきんどだから、あきんどの道をやりぬくのだ」と口ぐせにしておられた高忠さんの「あきんどだましい」は、きょう土の底を流れて、わきでる清水と見ることができません。

「柏崎を舞台の役者」
明治二十九年 二十六才
七百元を懐中にして渡支
上海より更に台湾に渡
る。四年間呉服商いをし
ていたが、香港にわたる。
明治三十八年シンガポールへ。呉服行商で打開をはかる。

明治四十年八月越後屋開
店 英人「君の店は領事館より清潔だ」と驚く。
大正五年頃から順調 マ
レーに五百エーカー(約二百町歩)のゴム園も経営。スマトラの島を手に入れたのは、融資してやった木材会社が破産して、止むなくその管理を引受けたもの、この島は後にオランダ政庁へ寄付、ために日本の軍部に一時にらまれる。
昭和八年 六十四才で歿す。

胸の底を流れるもの

昔の人々の勉強

—塾や寺小屋が盛ん—

▽……

名家と先生

高忠さんがあいざわ塾で勉強したことをちょっと書きましたが、古いかしわざきは塾での勉強が盛んでした。これは前にお話した第一の時代や第二の時代に織りこんで考えられることです。江戸や京都から先生を迎えてきたり、こちらから中央へ勉強にいった方が、帰ってきて先生になったりで、いくつかの塾が開かれました。いつか中通小学校

の子どもさんが、昔の曾地の人か、かしわざきの塾へかよった話をしらべていました。

れました。無窮先生の部屋は高でんさんのくらのあたりだったそうで、たくさんの人たちが出入りされま

をとって福蔵院(子どもたちはフクゴインとよんでいました)の前に出、それから左へおれて、光円寺の裏の方へつづぎます。そのまん中あたり、この写真の

山田小路をすこしさがると、銀座堂と田尻屋の間、横小路に入ります。これは土手下の道で、田尻屋がわがひくく、いつもジメジメと水のにじんでいるようなところだったそうです。ここに生田萬(よろず)先生がおられた話の前に書きました。力のあるきびしい声で質問されたり、大きな目でにらまれると、いっぺんにこわくなってしまったという話が残っています。

とくに原松洲(しょうしゅう)先生の塾がありました。田町神明さんの東どなりです。田んぼの先生とよばれて、きょう士のリーダー格の人たちがたくさんあつまっています。書も画もりっぱなものを残されています。三代にわたって田んぼの先生です。そしてその間の先生のくらしむきは、下山田さんでめんどうをみられました。本町五丁目の市

▽……

原松洲先生の塾

この小路はいろはやの裏

役所から柏崎神社の大門かどまでとどこにあつた分家の山甚(やまじん)さんでも、先生のお世話をよく

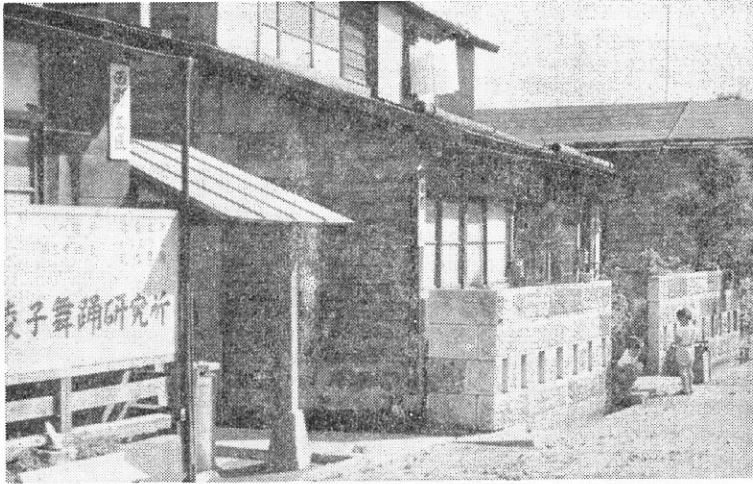
○原松洲(葉月、三四郎著「柏崎」) 江戸の人をはじめ伊達氏に仕える山田家のたつての望みにより亀田鵬斎が原氏を紹介来柏の斡旋をされた母と共に来柏子弟を教育する詩文の学が盛ん
・修斎 朝川善庵、巻菱湖に学び昌平校に入り、父の後をつぐ。
・大路 昌平校に学び、柏崎県立学校の教授となり、後父祖の業をつぐ。
○柏崎の文人(柏崎日報、忘庵筆「柏崎人物誌」)(越後タイムス、忘庵筆「在昔の目那衆」同「柏崎を舞台の役者」)・山田家(下山田)大堅(詩、歌、画) 治堅(歌、歌) 美堅(歌、画) 成堅(歌、歌) 鏡古(書、画)・山甚家(分庁舎から柏崎神社大門東角まで) 仲敬(歌、書、画) 静里(書、画) 半仙、重興(いずれも書、画)・西卷家(現位置) 子元(漢学) 永一郎(漢学)・新しや西卷家(平野歯科から柏崎印刷のところで) 敬孫、敬技(共

されました。百二、三十年前のこの辺は勉強する人たちでにぎわったわけです。

▽……

子どもは寺小屋

子どもたちもふくめて、手習い勉強をする寺小屋もあります。比角のごま堂に筆塚（ふでづか）が二つならんでいます。山崎新兵衛（しんべえ）先生と近くの原小路のししょう船田伊泉（いせん）先生をしたって、門人がたてたものです。草紙（そうし）がまっくろになっても、かわいた上に、またすみで書くという習字のけいこですから、筆もたくさん使います。めくらの学者ほき一先生は、日に四本使ったといわれて



田んほの先生松洲塾のあつたところ（田町）

いますが、古筆がかごにはいもあつたという先生もあるそうです。

▽……

ホウビにダンゴ

勝田さんが五つの時かよった寺小屋は、小町ののぼり口のかどにあった沢田先生のところだそうですが、草紙のかわりにブリキ板をつかって、ぞうきんでふきとってはけいこします。初めの日にまだ手本がないので、だんごばかり書きながら、先生に見ていただいたら「よくできたからホウビをやろう」と勝田さんのひたいにだんごを一つ、グルット書いて下さいました。大切にして家へ帰り、ホウビをもらったうれしさで、消すのがおしかったという事です。

に漢詩）・上の市川家（丸山内科のところ）梅客（詩）行貞（歌）行雄（歌）・下の市川家（中惣刃物店と隣）天休（詩）日休（詩）・小熊家（石井神社東角から丸山内科まで）茂朝（歌）茂雄（歌）茂樹（歌）・星野家（信用金庫のところ）愛子（歌）輝直（歌）輝文（歌）今井竜門（詩）・植木家（駅通りと西福寺の間）椒園（詩）無窮（詩）井上宗存（詩）・丸田家 桜亭（漢学）桜隠（漢学）紹桜（詩）

○北越の文柄柏崎によりて握らる
（葉月、三四郎著「柏崎」）
文久二、八 戸田徳波会主となつて妙行寺に書画展覧会を開く。江戸、高田、地藏堂、新瀉、松ノ山、小須戸、小千谷、石地、岡野町、平井、中田築地、南条、加茂、長岡中条、六日町、三条、新発田等から一流人士二九名参集

生徒わずか三十三人

—初めてできた小学校—

寺小屋から小学校

寺小屋からやがて小学校
ができるようになります。

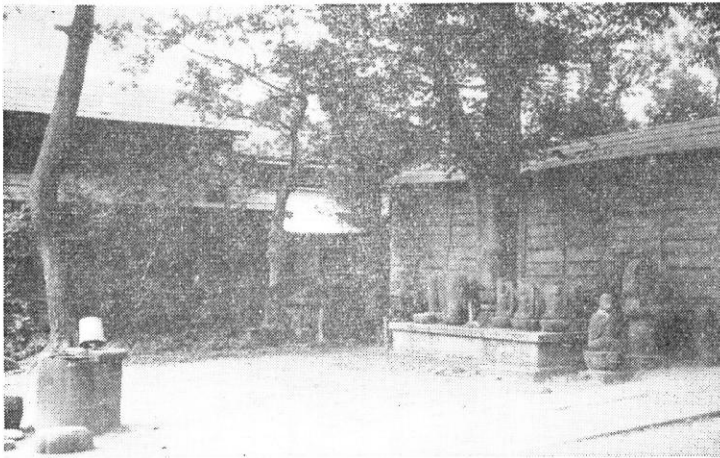
昭和二十八年に八十年の祝
いをした柏小校は、もとの
町会所のなかで生徒三三名
ではじまりました。次の年
にせまいので旭町の開光寺
(もんこうじ)にうつりま
す。この時の生徒九〇名。
二年目に諏訪新田校を合併

(がっぺい)して、取りひ
ろげ工事をした町会所へも
どります。ここではじめて
柏崎校となります。三一九
人。それまでは第四中学区
公立第五番小学高畑校で、

ひといきではいわれませ
ん。明治天皇がおいでにな
られ、今のところに本式の
校舎ができたのがそれから
二年後です。小町に分校が
あった年もありました。扇
町に分教場ができた年もあ
ります。この先生は学校
の上級生がかけたのだそ
うです。教科書を使うよう
になったのは、小学校が始
まってから十二年目です。
この時生徒は四三四名にな
りました。

一月一元五十銭

小学校四年を卒業すると



一ばんはじめに比角小学校のあつたところ…四ツ谷観音境内

高等科に入るようになった
のが、今から七十三年前に
なりす。高等小学校とい
って、刈羽郡でただ一つの

六六

○星野鶴水

原松洲と共に漢学塾の双
璧、学風は孔孟仁義の経
学、星野藤兵衛家から出
て長浜に居住

・詠婦堂主

鏡里(二代)父のあとを
つぐ

介堂(鏡里長男)壺簪学
舎と名づく

海南(鏡里三男)螢雪舎

比角小校長

信四郎(鏡里四男)比角
小校長

耕平(海南養子)比角小
小校長

柏小校長

○柏崎小学校誕生

・明治六年十月創立

高畑校(町会所内)

(第四中学区公立第五小
学高畑校)

教師原道太郎(大路)

第一分校小町校

第二分校徳原校

諏訪新田校(諏訪新田宮
屋敷)

(第四中学区公立第六番
小学諏訪新田校)

教師星野孝太郎(介堂)

ものです。その頃は柏崎も刈羽郡のなかに入っていました。初めの時は生徒一〇二名、翌年二二一名と書かれています。郡に一つしかない高等小学ですから、この生徒になると町にとまっていなければなりません。親類のない人のために学校に寄宿舎(きしゅくしゃ)をつくりまします。一カ月一円五十銭だったそうです。この頃の生徒のたのしみの一つに、体操のえんしゅう会というのがあります。にぎりめしを包んだふるしきを肩からなめにかつぎ、わらじをはいて遠くの村まで行軍します。そこでオー、二と体操をして見せて帰ってくる行事です。

▽……

親しまれた井戸

比角では星野藤兵衛さん

の家もちの星野でい水先生が、早くから長浜で塾を開いて有名でした。代々塾を開いておられましたが、小学校を作ることになった時、三代目かい堂先生の塾、こうしん舎を地蔵堂のけいだいにうつして学校にしました。地蔵堂は四ツ谷観音(おいらん観音とよぶ人もあります)のあるところですから、この写真で見るとうに今は太いけやきにかまされて、子どもたちの遊び場になっています。コンクリートの井戸がその頃の井戸で、八十五年前の子どもたちにずいぶん分親しまれたものでしょう。

五年後にごま堂の前にうつり、校舎も十八畳の六畳となりまします。それから二十三年目に今のところ、縮のさらし場のまん中に校舎ができました。八畳の三十一畳です。九畳の二十九畳の

運動場も初めてできました。今から五十七年前のことです。この校舎は赤いベングラをぬって、その頃としてはハイカラな姿です。

▽……

ベングラ学校

前庭に植えこんだ松やかし、桜、梅などの緑の色をおして、赤色の校舎がくっきり見えるのですから、比角のベングラ学校とよばれて有名になりました。やがて裏校舎もできましたが、それは校庭のまん中にある松の木の線のところでしたから、裏のときわ高校

さん、今井さんなどが活躍して優勝し、初めての全国展覧会では、小熊さんの図画、遠山さんの工作、片山さんのそめ物など十一点が入賞、西巻さんの図画はけんじょう品になりました。三十年も前の話です。比角校のはじまりにゆかりの星野家から、この校長先生になれた方が三人もありません。忠三郎先生、信四郎先生、こう平先生です。こう平先生は後に柏小の校長先生になられます。

- 第一分校比角校
- 第二分校比角新田校
- 明治九年
両校を合併して第四中学区公立第五番小学柏崎校
- 第一附属諏訪新田校
- 第二附属比角校
- 明治十五年六月
比角校、柏崎校より分離
- 第二番小学比角校
- 中越新聞より
明治三六、三、二九
柏崎尋常小学校証書授与式
生徒数七三四名、卒業生男七七、女九一 進級生一、二、三年合計男二六一、女二六二 落第生男二〇、女二三
明治三六、二、一一
柏崎高等小学校組合会
一昨日本年度予算について会議せしが、予算五、二二六円のうち俸給一〇〇円、教員旅費二八円二六銭削除、教室新築費二、六五八円は翌年廻しとなしたり。

三角だるまと馬の子鈴

—おもちゃのうつり変わり—

▽……

日本一のおもちゃ

これを見るが早い。「そんつあん、だれでも知ってラア」という子どもがいました。三角だるまがそれほどに、かしわざきの子どもたちにおぼえられているということはうれしいことです。もともと、このだるまさんは、きょう土の子どもの相手に生まれたものから。きょう土のおもちゃの話は岩下さんにお聞きするのが一番です。岩下さんは六十年近くも、昔の子どもが親しんだおもちゃをさがし

▽……

「つのんぎょう」

青海川に「そうめいぎょう」という西巻さんが疲れをなおされるバンガローがありました。そこでよく少年団のリーダーが一夜、語りあったものです。かがり火をかこんで、岩下さんからお聞きした話を思い出します。三角だるまはかしわざきの子どもたちのお気に入りです。「つのんぎょう」とよばれたそうです。

明治の子どもたちは、これをぶつつけあって遊びます。ふつうのだるまよりも重心がひくくなる作り方になっていきますから、グッと起きあがるので、この遊びがよい面白く、はやったものでしょう。市川新田（今の諏訪町二丁目）で種屋さんをしていたシナノ屋さ

▽……

どろくさくとも

写真の左から三番目のだるまは五、六年前に復活して売出されたもので、間もなく姿を見せなくなりまし

た。その次は二、三年前に出たもので、皆さんがよく見かけるものです。よくくらべてごらん下さい。子どもが遊んだ「つのんぎょう」と、大人が楽しむ「三角だるま」のちがいがありません。みなさんは、これどう遊ぶ気にはならないでしょう。けれども、ゼンマイしかけもセルロイドもしらない昔の子どもと、それよりもっと、面白いおもちゃを

○三角だるま

（山田良平著「柏崎歳時記」）

明治時代市川新田（諏訪町）で種物屋をしていた信濃屋で、はじめて作りだした。

信濃屋は、仕事の余暇に上州豊岡の叔父さんの所へだるま作りの手伝いにゆき、帰柏後、単純で作りやすいものとして考案流行した。

その頃の警察署長が、この彩色に使った絵具が有害だと、科料に処したので、憤慨した信濃屋は製品を裏浜へ棄てて、以来作らなくなった。

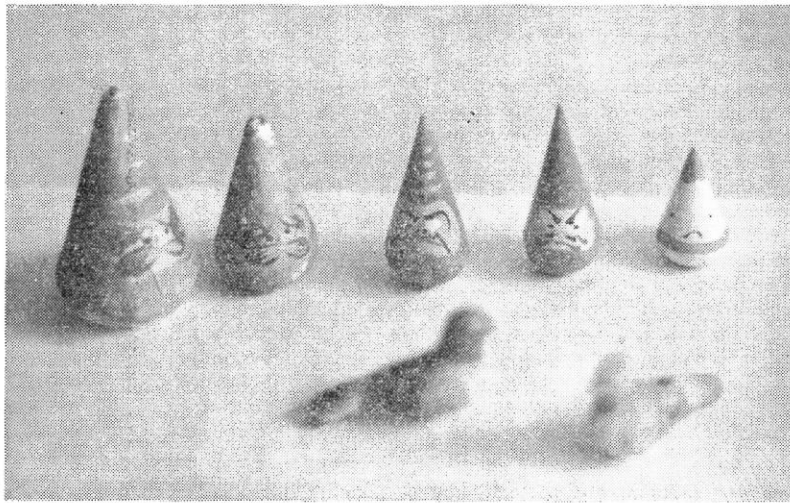
（武井武雄著「日本郷土玩具」）

柏崎の三角だるまは、柏崎生粋のものの廃絶後、恐らく今町ものが誤伝されたものであろう。

（今町の三角だるまを

じつにしているみなさんと、同じ心のかようなものはないで

しょうか。どろくさいハリコの子も、ピカピカのエナ



三角だるまとハトぶえ

メルの子も、みんな、かざりけのないことが大すぎでだいにするものを心のくりにふくらませます。生き生きと、生きのいいタマシイが流れつづいていきます。

一番うしろにあるのは水原山口の三角だるまです。二年前に復活したもので、昔のものとそっくりです。

▽……

「馬の子鈴」の音

この鳩笛も、大久保で作られたかしわざきの土人形です。こういう鳩笛はどこへ行っても見られません。ふところから金バチや三枚ばり、五枚ばりのバッチがでてきます。キガミで目バリまでしてあります。ワマワシで、まちをかけたまわる。竹馬でヒョッコ、ヒョッコあるく。ナゲマワシで

コマの「天下とり」をする。ヤジロベイ、凧を作つてとくことになる。みなさんと同じところで、とんだりねたりしていた昔の子どもたちです。

おもちゃではありませんが「馬の子鈴」というものが椎谷（しいや）にありました。殿様が考えたのだそうです。かねで作ったまゆがたで、長さは五センチ、ふくらめたところのさしわたしが三センチ位のもので、すんだよい音がします。これを子馬の首につけてやるのです。子馬をかわいがつてよい馬に育てようというしるしでした。子馬の首できれいな音をたてる「馬の子鈴」にも、きょう土の人の心がやどっていました。

柏崎の三角だるまといっている、という説に
対して)

製作者

刈羽郡柏崎町

信濃屋種屋

山田重太郎

柏崎の土人形は明治初期
廃絶したものを昭和五年
復興した由

製作者

刈羽郡柏崎町大久保

永井新太郎

昔の子らの遊び

—自分で考え道具も作る—

自分で作るてまり

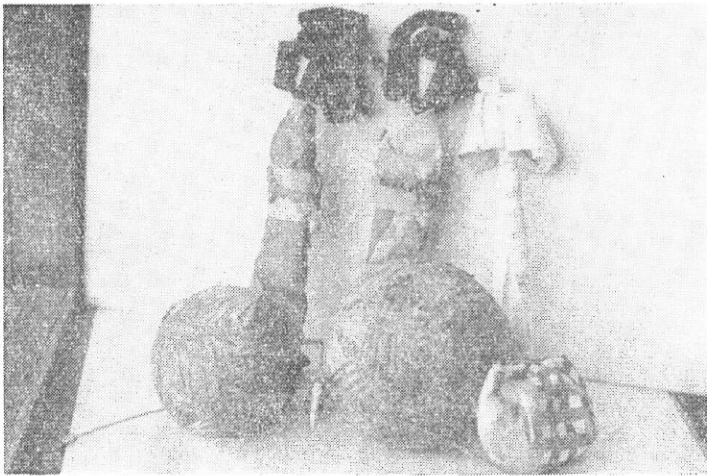
▽……
これが四、五十年前の女の子がつくった遊び道具です。灯心、ぜんまいの綿がシンです。糸を丹念にまきつけてまるくし、赤や緑、黄、青の糸で、麻の葉のまようかがつてあります。

これをすわってトントンとついたり、手にのせたりして「正月エーしょうじあげればマンザイか、つづみの音やらうたの声、二月エー」のテマリうたにあわせ「ここは柏崎、ほそい小路は広小路、朝日のさすのはリュウウシ、お

庭をはいけんつかまつるつかまつる」でこうたいしたり「はっ崎かき崎柏崎、下へさがればいずも崎、新潟お山のがっせんは、じんばおりじんばおり、おししがでたでた、オヤお山のがっせんだ」はずみをつけて遊びます。

ポポサンゴッコ

▽……
ふるちようめんを、フ（ほ）グシた生紙（きがみ）でつくったのが、写真のようなポポサンです。手ぎわよくまげもつけてポポサンゴッコをします。ためておいた着物のきれはしで着せか



てまり、ほほさん、きんちやく

え遊びや、お客さんごっこにもなります。浜砂でナンゴをつくると「一番はじめは一の宮、二また日光（にっこう）ちゅうぜん寺」と遊んだりします。これが

○てまりうた

（葉月、三四郎著「柏崎」）

正月エー障子明ければ万才か 鼓の音やらうたの声

二月エー人形詣りの墓詣り 今日日は彼岸のお中日

三月エー桜夜こそお雛様飾って見るのは内裏様

四月エー死んでまた来るお釈迦様 竹の小柄杓でお茶

あがれ

五月エーこんこん絞りの前掛を 正月締めようととつ

といた

六月エーろくに田の草採らないで お米がないとてお

腹立ち

七月エー質屋のお倉は混雑だ 質を出すやら入れるやら

八月エー八幡さまのお祭は 笛や太鼓でにぎやかだ

（蜂にさされて泣いて来たおばさん葉はないかいな）

九月エー草の中から菊一本 通る子供衆の眼にあたる

十月エー重箱さげてどこへ行きやる 今日日は恵比寿講

のお使いだ

この頃はやった「ほととぎす」をうたにしたのだから面白い。竹をわって切りそろえ、よくけずってタケワリ遊びもします。布でつくったふくろにいれてる女の子をよくみたものです。

子守りがてらに

晴れた日はお墓のあるところなどでマゴトです。ほんとは子守りなのです。

木の葉っぱがおさらやちゃわんで、松葉や墓石のコケがごちそう、イヌタデは赤マンマ、ツユクサの花はネリモノ。かけざらや半かけちやわんがあればものもちです。子守りは女の子の役目みたいになっていました。ツグラにはいった赤ちやんのそばでアヤトリもします。夕方になると背中の子をあやしなから「ネンネ

ンヤアネンンヤア、この子がねったら何やろは、あずきのマンマにととかけて、かわいや川に流されて、にくや荷なわにしぼられて」とか「のさんいくつ、十三、七つ、まだ少しは若いか…」とうたいます。

えんま市が近くなると、

子守りがてらに田んぼのあぜで、もち草つみをしませ。花もようの前かけのしをブイオビにはさむと、

ふくろのようになるので、その中へまるくふくらむ程つみませ。母がとってきた笹をはさみでできりとする仕事もします。秋の大根あらいも手を赤くしてやりませ。あんで、つるすのは父がしますが、けずりおとした大根のあたまをみそにする「ダイコンワギリ」がたのしみでした。正月のコードンがすぎると、アラレきりや

カタモチきりをします。キノエさんの日に大黒さんをかざって、アラレをいってもらうのをたのしみにしながら、力をいれてきりませ。

楽しい正月遊び

正月の夜はじゅんぐりに近所の家へよって遊びませ。赤い丸ほんに、なんて

んの葉と、みを使ってつくった雪の毬をかざったりしてハリセンベをします。カルタは毎年おなじみの「犬もあるけば棒にあたる」です。百人一首のなかまに入ると、上の句でとれず「みかさの山に…」と下の句だけをしにらんでいるのです。ハネツキは雪が消えて春がくるとはじまりました。ときには、山からとってきたモクロジのみがハネになり

ます。すべなわをつないだナワトビにあきるとマルトビを始めます。クニトリで石をはじいている子もありません。

あしたは天気になるだろうかと気になると、げたをはねとばしてうらなったり、つばをエガワの水におとしてみたりします。パツとちればよろこんだものです。何しろメッパツになると、目の上にかぶせた水ひしゃくの底に、キユウをすえるマジナイをまじめにしたころです。口じりがただれると「カラスにキユウをすえられた」といわれました。もちをちぎってなげると、電信柱にとまっているカラスが、大きいくちばしでパクリと受けとってうれたころです。

此所は柏崎、細い小路は広小路、暫し歩けば道楽神、西は西方極楽寺、霞みて見ゆるは半田山、沖で稲刈る何稲だ、こんごするかべきよういずも、招く子供はお玉かい、線路通るは馬方へ、馬の手綱で日を送る、枇杷島森で鳥が鳴いても、堀藤橋は東山、新道中なら打ち越えて、一杯飲もうか二軒茶屋、旭のさすのは鶯雲寺、庭に拝見仕る仕る。

おつまが、とつつあんかんまいり、一年たっても未だ来やらん、二年たっても未だ来やらん、三年目に状が来た、誰に來いとどの状が来た、おつまに來いとどの状が来た、おつまは今年はやられない、来年十三になってから、紅つけて、かねつけて、だーんぼさんの長羽織仕立て着るときやよいけれど、質屋へやるとき、あいそがない、あいそがない。

みちをひらく

石油の町四十年

— 柏崎の第三の時代 —

元気がなくなる

第一の時代、第二の時代と、かしわざきは見事に発展してきました。全国に「越後屋さん」をうたわれた頃は、県下でも一、二をあらそう町でしたが、汽車が走り、機械で物を作るようになってきましたと、昔の元気を失いはじめます。こまかく気をつかい、ねばり強く、こまめに働く縮屋気風も、長い間、よそで作った品物をあつかっていたというところが、こうなるとい

▽……

です。それに何度も大火でたたかれました。きょう土の気風が別の形にかわりかけてきたようです。世の中の進むにつれて、おくれでいくということ、しんけんにかきたいことです。

▽……

石油出はじめ

運のいいことに、こうした時、石油ブームの波にのりました。第三の時代になります。荒浜が背にしている、砂山つぎの南側や宮川、いずも崎で石油が、どんどんとれはじめたのです。

この一たいを、西山油田（ゆでん）とよびますが三十キにわたって、そのあたりの地下に石油のくらがありました。昔はふつうの井戸をほるようにして石油をくみました。今でも二田にこの穴が草にうもれて残っています。米山町にもあるそうです。この井戸ではたくさんとするわけにはいきません。

昔は石油をクソウズ（草生水）といいました。井戸からくみとったものはカッ色で、モクモクと黒い油煙をだしてもえまます。きれいな石油にするくふうをしたのが、ミウホウジの西村さんです。百年程前のことです。オランダのランビキ法を利用しました。半田の阿部さんと二人で、じっけんを何度もくり返します。器具のない時です。鉄びんに石油をいれ、その上に底を

ぬいた一升とくりをふせたりしてやってみます。シウチエウをつくる方法でうまくいきました。そこで、半田にかまをきずいて始めました。二人は製油の元祖です。半田は日本の製油の発祥（はっしょう）の地といっいいいでしょう。

▽……

桃林もやぐら林

七〇年前のことです。石地の内藤さんが日本石油会社を作って、アメリカからとりよせられた機械で、いずも崎の海岸で第一号の井戸をほりました。これが石油をふきだして、たいへんなさわざきになりました。この一号の井戸のあとは、今もりっぱに保存されて公園になっていきます。石油やぐらがどんだん立ちました。やがて刈羽の桃林も、やぐ

○製油発祥の地

（柏崎史誌 上巻）

・嘉永年間郡内妙法寺旧家西村毅一、半田村の阿部新左衛門と謀り、半田村にて西蒲吉田村の蘭医喜齋から伝授されたランビキ蒸溜法により、苦心研究の結果製油法を発明。

・嘉永五年四月、半田村に釜を据え製油に着手。地をほってカマドとし、周囲にゴロ石をめぐらし三斗入の平釜をかけ、上に現在のコンデンサーにあたるものを据えた。新左衛門、硫酸洗滌の方法を聞き込み、柏崎の各薬店をさがすも、そのものを知らず。ようやく新着したので使いをやると、途中で漏れだしたので驚き、近着衣を焼いたので驚き、近着の家にビンを預け、逃げ帰ったという。

○イントル石油

（柏崎史誌 下巻）

・明治三十三年十一月スタンダード会社日米合弁の形でイントル、ナショナル、オイル、コンパニーを設立

ら林とかわかりました。刈羽から西山まで数えきれない程です。

この石油をタンク車やパイプで、かしわざきの製油所へ送ります。長いパイプが裏浜をおつていました。子どもたちはそれに耳をつけて、音がするといつて喜んだものです。製油所は盛んな時は四十三もできたそうです。

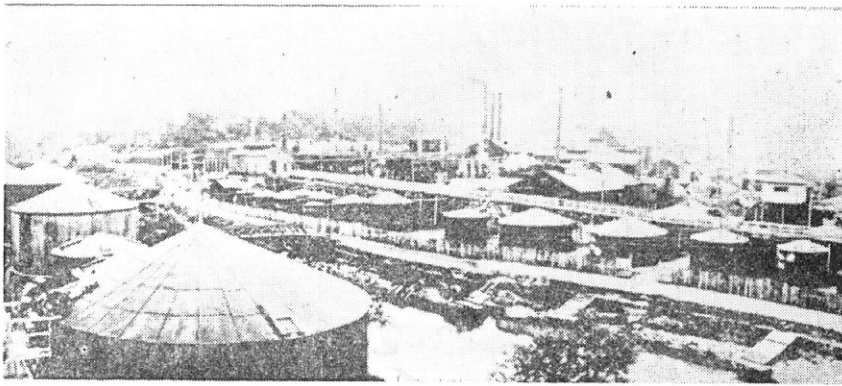
三丁目局横のはんたいがわ角に大成石油、日石(日本石油)は今の帯石のところです。今の駅のそば、日石のところは浅野石油、愛志石油、小倉石油とならんでいます。これはあとで宝田(ほうでん)石油になります。茂木石油が駅通り長浜石油のしもで、田んぼの上にくい打ちして製油所をたてる。比角おくら山のあたりにも幾つもならば、市川新田に平野石油と、たい

へんなにぎわいでした。新花町は、その頃はアメリカ系のイントル石油の、ひろい送油所で、まわりは大小の丘のならば砂浜です。

出すぎてもまら

石油はほりさえすれば、いいものではありませんから、会社の合併がはじまり、会社も北海道的に力をいれることになり、ここは、七年後に日石が買いとります。

この写真は日石の製油所です。西光寺の下の社たくのならんでいる所が、三十五、六年前にこのように石油タンクがならば、製油が盛んであったとは、ちょっとそうぞうできないでしょう。どのタンクもいっぱいになり、たきのようにこぼれだすので、パイプで送る



のを待ってくれとれんらくすると、どんどんふき出しているから、そんなことをすると、田んぼへ流れだして油の池ができそうできまるといふ返事が来たというのです。驚いた話です。井戸の深さも千尺、三千尺とあって、石油の町四十年の活気がつづきます。

柏崎送油所から直江津製油所まで二十余哩をパイプで送油。

・明治四十一年六月イントル、北海道に於ける事業を除いた他の一切を日石に売却。柏崎送油所のあとが空地になったので、柏崎町が日石よりゆずり受け、はたご町貸座敷を移転、新花町となったもの。

○日石本社及び製油所明治三十二年大洲、枇杷島の両村にまたがる鶺鴒川沿岸数万坪に建設。同年八月六日竣工十二周年祝賀会を開く。

・明治二十一年四月石地に創立。
・明治二十三年尼瀬地区第一号井大噴油。

○当時の新聞記事の一例
中越新聞 明治三六、一
柏崎町各製油所昨年十月から三カ月間の製出石油

石油 一、九、八八石
一五五、五〇八円六五
鉦油 一四、三二一石
一四七、〇八三円八〇
重油 二六、〇八一石
四二、〇七一円四〇
副産物 一四六円一七

砂山の裏と表

— 北と南のちがった姿 —

▽……

なつかしい思い出

ここは子どもたちのなつかしい思い出を残している山です。てまえば荒浜新田今の松並町の地域です。「すなやま見えた、なつかしのこきょう……」とうたしながら、新田の子どもが砂山の松林へでかけます。

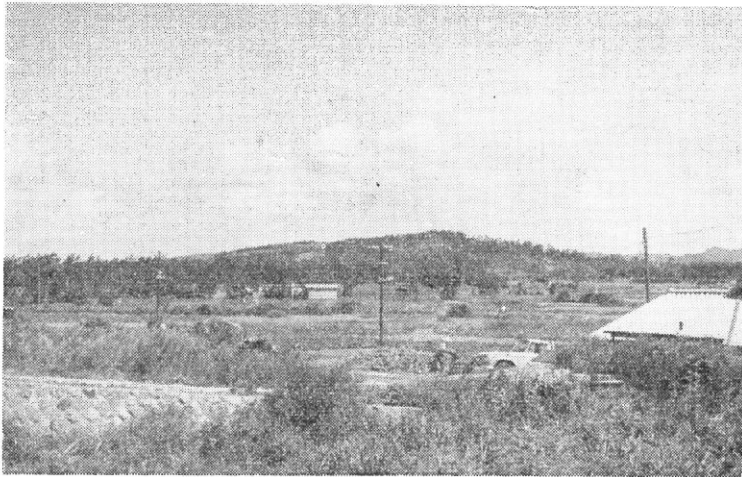
肩にしたビビラのさきにモンドシザルがしほりつけられていきます。松葉かきです。林の下に落ち散った松葉をかき集めて、ザルに山もり一ばい、かついで帰ります。新田の子どもはカニつりもしようず。木のぼりもうまければ、小鳥をよぶ

のもじようずでしたが、松葉かきも遊びと同じほどに見受けられました。ザル一ばいを一カキとって「おらナ、きんのな五カキしたど。ホウ、ほんだいや」仕事をじまんしあう程ですから、林はいつもビビラのあとが美しくついてきれいです。

▽……

年中楽しい砂山

シウロとりもします。ビビラをひきずって歩きます。わると、ビビラのさきにシウロがひっかかっています。新田の子どもはそのままパクリと口にいられてしまうこともあります。半田山



山 砂 の 出 思

のズボが終わるころに、この草むらでキタケやハツタケがとれます。砂山下の畑のうねを買って、いもほ

七四

○ 西山油田のガスと柏崎市営ガス

大正十五年六月

柏崎ガス株式会社設立

社長 二宮伝右衛門

専務 飯塚謙三

取締役 飯塚知信、野口善平、丸田尚一郎

監査役 根立松之助、原吉郎、内山熊八郎

昭和二十年

東京ガスに強制併合を強いられたので、僅か三

万円で市営に移管、市は配管工事に二十二万円を

追加計上して市営ガスとして発足。

ガス会計で昭和二十九年

度七百五十万円の利益をあげる。

年間四百万立方分の燃料

源を西山油田に依存

家庭用 五五割

工業用 三〇割

商店その他 一五割

西山油田が市へ供給できる能力に対して市の需要

りにきたまちの子どもたちもありました。砂山でころげまわって遊びつかれた頃、ほったサツマイモがゆであがります。大きな一本いもをフーフー吹きながらの味は、忘れられない思い出でしょう。

冬になるとスキー場です。比角の学校では一日ここでスキーを楽しむことが年中行事の一つだったことがあります。銀嶺(ぎんれい)クラブの田村さんは一日に一度は、ここのスロープですべらないと、ねむれなかつたということでした。上衣もシャツもぬぎすてて山スキーを楽しんでいられるのをよく見かけました。

▽……

ガスが吹き出る

砂山をこえて西中通の方へでてみましょう。砂山を

さかいにしてガラリーとよすががわかります。年中、松の緑だけの荒浜がわにくらべて、こちらは山のおなかに畑があり、水田がつづいていきます。石油やぐらが見えます。高町の油田です。三十五年前のことです。いきなり大きなひびきがあったりをゆすりました。「何だろうーみんなふしぎがりましたがわかりません。これが高町でガスのふきでた音だったのです。ぞろぞろ見物にかけます。驚いたものです。

すさまじい音をたててやぐらのてっぺんまでふきあがっています。白いしぶきをとばして、生きもののような柱です。いたるところに「火を使わないで下さい」「ただこをすわしないで下さい」「マッチをするとキケンです」という札がさがっています。ちよつとで

も火を使うと、あたり一面が火の海になるといので

す。高町の人たちは御飯をたくにも、砂山をこえて荒浜がわで御飯をたき、家へかついでくるさわぎです。連日、見物人がつぎま

した。このガスは一時パイプで山をこえ、荒浜の海の中にすてられます。大正十五年にガス会社が出来たのはこのガスを利用するためでした。家々にガスが引かれることになりました。ガスからガソリンもとれ、自動車用ボンベや家庭用ボンベにもつめられ、理研が柏崎にきたのも、このガスが利用できるからです。やぐらはどんどんたち、石油がたくさんとれ、高町油田で元気づいて四十年來、最高の成績をあげましたが、その昭和五年から、ぐんとさびれます。

▽……

桃林に臨時の駅

やぐらが林のようにたつ前は、桃の林が見事なところでした。砂山のふところ全部が桃畑です。四月も終わりに近づくと一面の桃の花でした。桃の花見が楽しい行事だったので。荒浜駅と刈羽駅のまん中あたりに臨時(りんじ)の桃山駅ができて、汽車からおりと桃林にかこまれた広場があり、赤白のまくをはった茶屋ができたりで大にぎわいでした。

この砂山の南がわはあたたく、今はたばこ畑も見えます。北がわの開発もここ二、三年急に進んでいきます。新しい郷土づくりによく目をとめましょう。

は八〇割の現状

・坑 井

現在までの数一四六七本
出油のなかつたもの一五九本

現在採油しているもの三

一〇本

・出油量

今日までの採油量

二、八五九、九一四キログラム

最盛期(大正二年から昭和五年)

年産十三万キログラム

現在日産一千キログラム

ガス産額を含めて二千万

円

高町油田開発当時

同油田年産十万キログラム

現在年産額、最盛期の十

分の一

刈羽節成キウリ

— 全国からひっぱりだこ —

色がよく病気に強い

刈羽が桃の名産地でならした時、全国に名を知られたキウリの名産地がありました。

私たちがいつもいたたいているキウリは、ほとんどが「刈羽節成（ふしなり）キウリ」と呼ばれるものです。これが全国ひょうばんのキウリで、つるの節ごとにキウリがなるので節なりです。その上わけて長く、色がよくて病気につよく、寒いところでもよくできる。これがその特長です。このキウリを作りだしたと

れたものとはちっとも気づかなかったのです。

与口さんの苦心

△……
ころが西中通地区です。ここから送りだされた種子は、最高の年で米俵一八〇俵分もあったそうで、一昨年でも農協（のうきょう）であつかった分が三〇俵分くらいということですから、商人があつかった分はこの倍位にはなつたでしょう。数十万円のお金になります。

△……
これに気がつき、よい種子を作つて全国にひろめようとなさつた方が、この石碑（せきひ）の与口（よぐち）虎三郎さんと重治さんの父子です。五十年ほど前になります。青年農友会をつくつたり、青年団長をしていた二十一才の重治さんは、よい種子を育てるために県の指定地（していち）になつて、その指導（しど）や援助（えんじょ）を受けたいと考へました。柏崎駅の田んぼがわにあつた刈羽郡農事試験所（のうじしけんじょ）の木田さんや、田尻の人で、県農事試験所長の山田さんがこれから力をかしてくださることにな

ります。指定地になりましたが「ものずきが」というだけで、誰も本気になつてくれません。青年なかま四、五名でこの仕事を始めるよりなかつたのです。ようやく、よりすぐつた種子を集めてみたら、米俵にして半俵くらい。ところが各地から初めてしつた、このキウリ種子のちゅうもんがどつと、おしかけてきました。二年目もおことわりにひめいをあげる程です。三年目には、なかが三十名になりましたので組合（くみあい）を作り、お父さんの虎三郎さんが組合長になつて、種子をとるキウリの作り方から、よい種子のえらび方などにしんけんに取りくみます。

二百名のなかま

○刈羽節成胡瓜

（榎原小学校資料）

明治四十四年 刈羽節成

胡瓜採種組合を組織

組合長 与口虎三郎

指導 与口 重治

組合員 三十名

この協力・指導者

県農事試験所長

山田 貞康技師

（田尻の人）

刈羽郡農事試験所長

木田 佳俊

山田氏、かつて大隈庭園

の園芸場に勤めていたこ

とあり、全国で紹介した

のが明治四十二年五月、

注文殺到。

組合組織後、会員二百名

を超え、耕作面積十四、

五町歩となる。

最高出荷は七十石、昭和

三十二年度農協扱十一石

商人扱いはこの倍位

数十万円の収入となる。

○春日騒動（柏崎史誌上巻）

旗本安藤氏十二カ村所領

春日、橋場、下原、上

原、原新田、正明寺、

後には二百名をこえる人たちがなまになりに、質を悪くしないように、今でも検査にごうかくした種子を送りだすようにしています。

こうして自分たちの手で、すぐれた作物を育てあげた、長い間ののら仕事をものがたるのが、この橋場の氏神さまのけい、だいにあ
る石碑です。

▽…… はげしいできごと

百三十五年前のことですが、この畑つくりでくらしをたてている人たちが、くわをすててわきあがったことがあります。春日（かすが）の陣屋に自分のふところだけをこやそうとする代官がいて、むりなねんぐの取りたて、きびしいおふれで苦しみました。「春日へ

はヨメヤムコはくれない」ということが残る程だったのです。とうとう、おしちぢめられた心がはげしく火をふいて、え物を手にしてぼう動をおこしました。そして陣屋の役人と話しあって、廿八カ条の願い書を江戸の奉行所へぶぎょうし

（よ）へおくりました。ところが奉行所は二十余人をつかまえて、ろうやに入れ、一年たってもだしてくれませんでした。病気になったり、それがもとで死ぬ人もでてきます。この時、平井のてんぐさんといわれた高野和七郎さんが、井田屋西巻さん

と相談して骨をおられたので、一同こきょうへ帰って、くることができ、高野さんが代官になっておさまりました。静かな畑つくりに見えるなかにも、こうしたはげしいできごとがあったのです。



与口さん父子の石碑（橋場大國主神社）

長崎、長崎新田、黒崎
新田、山本、田塚、平

井

文政六、四

百姓兵吉を先頭に起つ、
兵吉逮捕されたが、民心
の激昂をかって釈放。

二十八カ条の願書を江戸
寺社奉行への差出しをこ
ばまれて同六月暴動化
す。

柏崎陣屋からの加勢数十
人、悪田小路村はずれに
布陣して発砲、農民離散
両陣屋側首謀者を説得、
二十八カ条を江戸寺社奉
行へ差出す。

同八月出府を命じられる
が収穫期で難渋、出雲崎
代官によって逮捕され、
江戸獄舎につながる。
翌七年十一月終結。

八千頭の馬並ぶ

—春日 盛大だった馬市—
椎谷

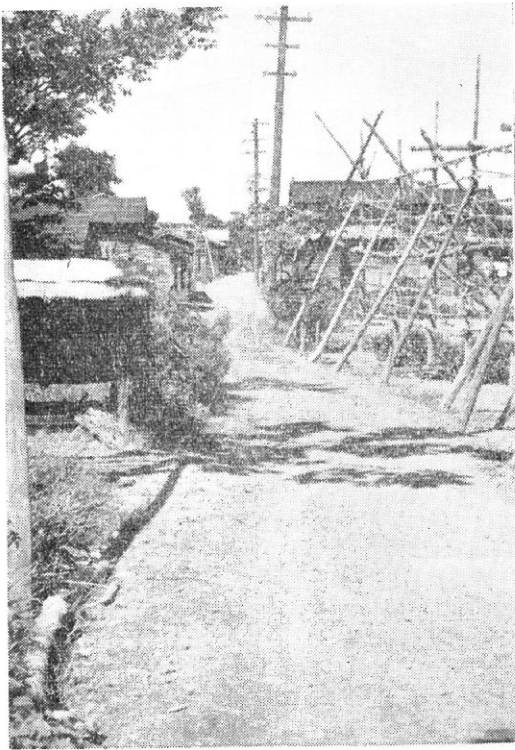
えんま市の初まり

春日の公会堂のそばから悪田へぬける小路を入っていくと、右がわに大きなケヤキが枝をひろげています。ここが陣屋のあとです。左がわ、松のならんでいる小高い丘が春日のおくら山。このあたりに早くから馬市がたちました。今の八坂町から浜へかけてひらかれた馬市は、三百年ほど前から下町（今の本町四、五丁目）にうつされ、百七十年くらい前からはえんま堂けいだいで開かれるようになりましたが、やがてこ

ともやめになって、春日に馬市がたつようになった、ときろくがあります。その頃がえんま市の初まりでした。もう。馬市がいつのまにか市場にかわって、冬物と夏物のいれかえに、いりようなきないが盛んにおこなわれるようになります。今ではえんま市はレクリエーションですが、もともとは、人々のくらしにかくこのできない、一年一度の市場だったのです。

馬市とはなしがい

春日の馬市はこうして早くから始まり、にぎやかにあります。七、八百頭の馬が集まり、買う人、売る人の声がいきまじり、見物人がざわめき、おくら山の松



春日の馬市のあつたところ

○高浜の海岸

(高浜小学校「高浜の姿」)

・椎谷公民館裏は

明治二十年頃汀まで六十

疔。大正十年頃二十五疔

・宮川農協裏

明治二十年頃汀まで四十

八疔。大正十年頃三十六

疔。いずれも現在は二疔

・学校下の海岸はかつては

運動会場だった。

・昭和二十五年頃宅地もろ

とも家が流される程にな

った。

・波ごろしのブロック。

一コ八疔、二十疔の二

種を昭和二十五年六〇コ

二十六年五〇コ、二十七

年七〇コ入れたが現在半

数以上が海面下に沈んで

いる。

○鯨波の放牧

(田村愛之助著「鯨波誌」)

延亨二年下条氏佐渡に渡

り同地の産牛多きを見て

此を船にて送らしむ。牛

を塔の原付近の草原に放

ち飼いにす。為に近郷は

勿論、遠く信州飛騨地方

林といったは大にぎわいで
す。小路の両がわに、むし
ろでかこった馬つなぎ場
が、ならんでいたのをおぼ
えています。この馬市もだ
んだんにさびれますが、昭
和十八年までつづきまし
た。

春日の馬市とならんで、
椎谷(しいや)の馬市が有
名でした。六月二十四日か
ら七月二日まで開かれる市
です。この頃になると、

五、六頭の馬を一行につな
いで、手ぬぐいで帽子ごと
はおかむりの馬方さんが、
幾組もまちを通りました。

馬のつかれを防ぐために、
たいいてい夜です。パカパカ
とひずめの音が、夜のまち
をしもの方へいくと「馬市
がきたな」と思ひ、かみの
方へいくと「馬市も終わっ
たね」と話しあいます。え
んまさんの前にほしの洋服
店がありますが、ここが以

前はギミさんとよんだ三階
だての茶屋で、この茶屋の
馬のわらじがとぶように売
れたものだそうです。

馬ではありませんが、佐
渡の牛を舟で鯨波の浜へあ
げ、はなしがいをしたこと
があります。ジョウシュウ
屋さんは塔の原で、ヨザイ
ミさんはゴシヨノ入りで、
二百年位前からはじめられ
て、五十年前ころまでつづ
きました。

長く続いた馬市

▽……
椎谷の馬市は三百三十年
くらいも前から始まったも
ので、まちのまん中あたり
のミト川の橋から、かんの
ん坂ののぼり口までの間
は、道の両がわに馬を入れ
るさくがつくつてありま
す。それで道の巾は一斗半
位になってしまふのだそう

です。見物にきた娘さん
が、きれいにゆった島田が
みを、馬にかまれたという
話がありますから、ぼんや
りしていられません。多い
年は七千八百頭の馬が集ま
ったというのですからたい
したものです。

廿八日正午までの五日間
はオンマ市でおすの馬で売
り買いで、それからあとの
五日間はメンマ市でめす馬
の市場になります。この
時、売れ残ったおす馬はミ
ト川よりの浜べの馬つなぎ
場へうつされて、駒(こま)

のつなばらといわれた下
り(さがり)市になります。

次第にさびれる

▽……
六十四、五年前に場所が
かわって、かんのん坂より
のあき地にうつります。そ
の頃でも四千頭から八千頭

の馬が集まり、五十年くら
い前になると、さらに浜べ
に馬小屋がずらりととならび
ます。道の方は見世物小屋
ができ、店やさんがならび
ます。それが年とともに砂
浜がなくなってきました。

それに汽車の便もよくなっ
てきますと、産地へじかに
買いにいかれずから、馬
市はさびれはじめます。東
北からはるばるやってきた
馬も、県内のものだけにな
り、千頭を上下する市場に
なりました。ほとんどが長

野原へ買われていったそう
ですが、昭和の初めころに
なると三百頭になり、春日
と同じく昭和十八年に幕を
とじました。今でも七月一
日の椎谷市に、この名残り
をとどめています。

より買いに集まる。

・元禄年間の「俳諧柏崎」

・夏草や牛の駝も波の音

・正徳年間「柏崎四十八題」

・塔の原群牛の題にて句多

し。

・明治の終わり頃までつづ

けられた上州屋塔之原松

林の草原(御野立、パレ

コート)の東方丘陵)与左

衛門(ヨザイミ)さん。

・御所の入にて、上の寺小

路(妙智寺)を入れて凡

一*奥へいった高台。

・当時発行された絵葉書に

伝馬より佐渡牛を鯨波海

岸に陸あげするものあ

り。

○春日の馬市

(柏崎日報 大正五年)

第一回 一〇一四、一六

四、一 八〇余頭

第二回 馬数 八〇余頭

五、六一五、一二

馬数 数百頭

第三回

六、二七一一、二

馬数 四三八頭

茨目(らいば)の花売り

—くらしのつながり—

昔の野菜や魚の市

三丁目の局前やさい市場が一日、四の日、七日、七の日に開かれていることは、みなさんもよく知っているでしょう。こういう市場が昔はどこどこにありました。川端(かわばた)町(今の鶴川町で川にそった所)は横道ともいって、やさいや魚の市場がたつた時代もあるそうです。アエのすんでいた頃の鶴川は、舟が入りしていたのですから、ここはかしわざきの市場の元祖(がんそ)でしょう。柳橋にも古い市場があった

手のひらの柏崎

かしわざきは手のひらをひろげたような形をしています。中浜鯨波口、上条(じょうじょう)口、鯖石(さばいし)口、中田口、春日悪田口の五本の指です。さつき(さつき)の市場が、どれも指のつけねにあたることに気がつくでしょう。かしわざき

の毎日のくらしにいろいろな物が、それぞれの指の先でつくられていました。宮川さんが、柏崎日報にお書きになった物売りのよび声は、そこから流れてきます。近頃も「ナットナットー」のなつ屋さんの声が聞えましたが、三、四十年前の流し売りは、「トーフイー」のとうふ屋さんをはじめ、ほとんどが大きな声でよびあるきました。「ぶき」とうー買(か)あ「わらび、ぜんまい買(か)いやア」とくるのは、もんでテゴをかついだ谷根(たんね)の女の人です。谷根からは炭が運送(うんそう)馬車で、よくはこぼれてきました。しもじゆく、中浜の人は「たいやひらめ、おけいやア」といってきます。「ほい、いりませんかアエ」というのは上条口の方です。そだ木をポイといっています。

したが、二軒近いものを四たばも五たばも横にかついでいました。のちにはみじかくきりそろえて、山のようにつんだ荷車をひいてくるようになりました。

物売りの呼び声

「にしんいらんかアエ」元氣な荒浜の女の人の声です。「いわしいらんかネ」とかどぐちをのぞいていきます。てんびん棒に魚の入ったざるを、二つも三つもかさねてつるしています。「きうりやなすはよかったかネエ」と荷車ひいてくるのが春日や橋場の女の人です。

○魚市場

(柏崎史誌 下巻)

元禄年中、矢口、市川等の有志、浦々の漁民にすすめて魚場をたてさせる。魚市に付随して野菜市もたつ。明治十七年十月

往来繁雑につき野沢の横、島町に通じる空地を市場としたが、相変わらずゴタゴタ市となる。

その後、魚せり場を広小路の西角にぎめる。

○恵比寿講市 十一月廿日 (葉月、三四郎著「柏崎」)

大正初期、一時的ではあるが広小路に連合の大売出しを開いた。

広小路柳橋は、年三回の市が数百年間続いて、柏崎の臨時市場として有名。

広小路の真光寺の夜市は夏分の常設市場となっていた時代もあった。

柳橋のはね出しは町の人が薪、炭、野菜を買うために上条口から売りにくる人を待たしたので事実上の市場となった。



まい朝見えた菫目の花やさん

たそうですが、まかごにいっぱいの花をせおってこられるのを長く見ました。やがて写真のようにうば車になり、最近はやカーを利用されます。菫目の花売りは二百年くらい前から始まったもので、田づくりのお

ぎないをする特別な工夫です。やしきまわりや、庭木

の下の小さなあき地でも、菊、百日草、おらんだ菊、だんご花などの小うねづくりをし、松やさかきは山からとってきます。

▽……

苦勞する花集め

尾花やおみなえしを、け

んのや河内(こうち)までとりにいくこともあるそうです。おぼんにそなえるはすの花は佐藤が池までとりにいきます。これはわかいしゆの仕事で、胸まで水につかりながら花をえらんだという事です。おぼんの花

市になると、八十けんのうち七十七けんが市店をだし

ました。これは三十年ほど前の話です。いちばん盛んだった時でしょう。ふだんは二十人くらいの人がまちにでます。村山先生におききすると、花市の日ほるす番の子どもが、翌日あきないにでるぼん花の花づくりをします。夕方かりこみをし汚ない葉や枝をとって、なりをなおし、たばね、手おけにいれて水をやると夜の十二時近くなる。そのころ家の人が花市をすませて帰ってくる。朝の二時にはもうでかけます。まず松波町へいくのだそうです。ここでは漁の神様にそなえる松のしんとさかきが、どうしてもいりようだったという事です。冬の花や不足の花はかん原方面から、五、六人グループで共同して仕入れます。

昔時、ねまり地藏、立地藏街の中央にあった時は、地藏のあたりで魚、野菜の市がたった。

○柏崎の新炭

(柏崎日報大正八、八)
冬用の木炭は谷根、河内、柿崎方面より年々二、三千俵。

養蚕發展につれて薪炭林減少、業者他郡外にでるもの三分の一となり、供給私底を憂慮されていたが、鶴川、源村から一千二、三百俵移送ができた。

宝田、日石で二千三百俵注文あり、高値になる心配あり。

現在の売価一円につき三貫五百匁から七、八百匁。

加納の雪が来た

— 大きい雪穴のこと —

▽……

雪の配達

七、八月のころ、三〇^{センチ}角の長さ六、七〇^{センチ}の箱形にきりそろえた雪を、何本もつんで配達（はいたつ）しているオート三輪を見たことがあるでしょう。この雪は加納（かのう）からはこんでくるのです。ここに冬の雪をしまっておく倉があります。雪穴です。

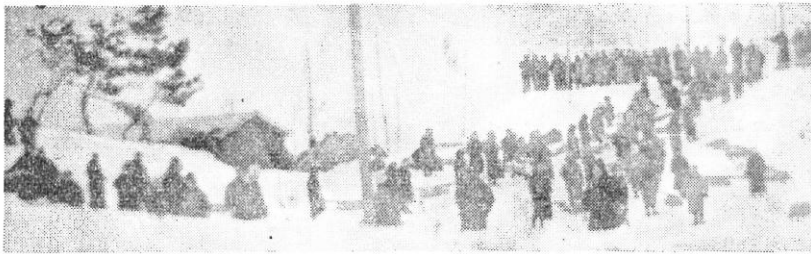
悪田の雪穴

悪田にもありました。今、大東セロハン会社のあると

ころです。小高い砂山を背にして、まわりはひろいあき地で芝草がしげり、雪のない時は子どもたちの遊び場になったものです。

およそ七十年前に始まったのですが、初めはただ雪をつみあげて、かこいをしたものだそうです。やがて穴をつくってたくさん、長く雪をかこう工夫をされます。穴といっても、道より高くしなければならぬので、マゼ石をつみあげます。九^{メートル}の三六^{センチ}ぐらいの四角を、高さ一八^{センチ}ほどにつみますから石の箱です。その外がわは、すそをひくように土をもち、道に面した

たがわに入口のとびらがつ



雪積みをしている悪田の雪穴（二十年前）

いていました。後にこの石がコンクリートがためにか

まりました。

雪が降ると近所の人たちがはたらきにて、タガラヤモッコで雪穴につめこみ、もりあげます。この雪穴の世話はいっさい、しま屋さんがなされたのです。この写真もしま屋さんからお借りしました。右に見えるように高くつみあげると、柱をたて、むなぎをわたしはさぎをたてかけて竹であみ、わらであんだノマを六百枚もまくと、屋根が雪穴にびったりついてできあがります。

こうして六月をでさかりにきりだされる、あの四角の雪は四、五千本になったろうと思われませんが、戦時中にやめになりました。

▽……

加納の雪穴

加納の雪もひょうばん

八二

○悪田の雪穴

（島屋主人談）

雪穴の大きさ、五間の二十間、深さ一丈に間瀬石でかこむ。

雪の切り出し規格は一尺角の長さ二尺、坪一〇八本、積みこんだ雪の五割位が売出せる分。

○加納の雪

（関操調査資料）

・明治二十年頃よりはじまる。

・加納の七人天狗 藤左衛門、市内、房五郎、木の七、新殿、赤砂、船正等親族関係で組合をつくって開始。

・明治四十年頃、大雪積組合。

・運びだし、荷車一台に十二本から十四本（一本六貫匁）を積む。

・大正十四年、フオード二台（一台千五百円）を購入、トラック輸送をはじめ。

○製氷会社

（山田良平著「柏崎

で、子どもたちは雪はこびの車を見つけると「加納の雪がきたぞ」とついであるいたものです。悪田の雪穴よりもすし早く始まって今でもつづいています。加納の七人テングといわれた方たちが、初められたのだそうですが、五十二、三年前には大きな組合をつくって、利益(りえき)をあげる工夫をされました。

雪もどっさりつみこみまです。まわりの山々から雪かごやそりではこび落します。毎日二百人ほどの人が、正月一カ月あまり仕事をしたということですからおどろぎます。

関さんのお話によりまして、朝二時にはガス灯をたよりに切り出しにかかり、三時半か四時には、荷車二十台ならべてはこびだしたそうです。私の父はよく三時おきをして、西の入へあ

きないにいったのですが、鳥越(とりごえ)にさしかかったとき、加納のバカリ里といわれる道に、ボウツと火の柱がたつて、おまけにカラコロと音がします。

近づいてくるのです。ヒヤッとして耳をすますと、話声もきこえるようです。鬼の火の車だ、父は青くなつて、そばのモクジキ堂のかげに、いきをひそめてかくれました。ところが、雪はこびの車だったのです。親子でひいたり、兄弟、夫婦でひく車のかじ棒に、弓はりちようちんがついていまます。雪からでる煙のようなすいじょう気に、ちようちんの火がうつつて、柱のようにあかるくなつていたわけです。

▽……

町の病院、魚屋へ

一台に三〇〇*もの雪が

つまれて、まちの病院、魚屋等へ送りとどけられます。たいやさばがたくさんとれたころですから、石油箱にさばを二十六本たてにいでて、この雪をかたくつめ、貨車(かししゃ)につめこみます。箱と箱の間にも雪をどっさりいれて、東京方面へ送りだします。汽車はポタポタ水をたらしながら走ります。台所でも利用されました。三十五年前からトラックではこびます。組合でトラックを持った始まりでしょう。

▽……

氷をつくる会社

昭和二年に氷をつくる会社

社が、ぜいむしよの裏の方、今のところにできました。商業高校の横の砂山をゴッソリ、田んぼへ持っていったあとです。「氷をつ

くる」というしごとがめずらしくて、休みの時間になると、校庭つづきの商業の生徒は見にいきます。たてものいっぱい、水をひやす機械があつて、できた四角の氷がすべりででてくる

と、おどろきの目でながめます。時に空気のまじった氷がでてくると、たたきわつて、ほうりだします。そのかけらをしゃぶつたり、標本でもみるようにしながら教室へもどつたものです。

今では百倍の大きさにのび、毎日四〇〇*の氷をつくつて、県外にまで送りだしています。私たちのくらしたに、どんなにか役にたつていふことでしょう。

歳時記)

昭和二年資本金五万円で発足、現在資本金五百万円、創業時代は需要期のかたよりが甚だしく、その苦心は容易ならぬものがあった。

生産

日産四ト、年間一、〇〇ト、消費は魚市場へ三〇ト、一般消費五〇ト、県外移出二〇ト。

○大正の水

(相崎日報大正四、八)直江津經由の軽井沢氷、車中で約一割、店で一夜明けると更に一割五分は減る。

荻菅張米店約五〇軒、各店一日に四貫匁をけずる。

柏崎駅渡し貫当十二銭、盆過ぎには十八銭となる小売値は三倍から四倍。

花をかざす

珍しい洋服姿

――十五代続いた郡役所――

▽……

刈羽郡役所のあと

写真はたかくわおいしやさんの家ですが、ここに刈羽郡役所がありました。このためのもへいもその時のままに残されています。八十年前に郡役所をおくことになったのですが、その時は今の信用金庫のところに星野藤兵衛さんの家があった、そこで仕事をされました。七年後にここになります。この横に郡病院の前へでる道がありますが、そのころは郡役所の庭でした。門を入ると右がわに農会の小さいたてものがあ

ったのですが、そのの木田さんは今のやまとめさんの店を開いた人です。大昔の石のお金にた形をした豆カスがならんでいました。

▽……

選挙で大さわぎ

郡役所は三十四年前にはい止になるまで、刈羽郡全体の仕事をします。今の商業高等学校や農業高等学校は、郡立（ぐんりつ）の商業学校、農学校でした。図書館も郡立でした。やまとめさんのお話ですと、ふだんはあまり人も通らず、こ

の道ばたで米をまいて、雀とりをたのしんだりするが、選挙などがあるときわぎなんです。まんじゅう籃、こんのももひきの車屋さん、人力車をひいて走りこんでくる。郡役所ひきやくの重野（しげの）さんがわらじばきで、いそがしそうにでかけていく。夜になるとかついだり、人力車にのせたりして、刈羽郡全部の投票箱が集まってきたものだそうです。

▽……

林子平の子孫も

第一代の山田郡長さんが、えんまさんの裏手の砂浜にまちの名をつけることになって「郡役所から寅（とら）の方角にあるから寅新田としたりよかろう」ということになりました。今は東学校町にはいっていません。栄（さかえ）町は四

十年程前になりますが、小町屋吉田さんが荒れ地かいこんに骨をおつて、とこなみ内務大臣が名をつづみした。それまではかねづみ町とか、まさご町、こがね町、浜町などよんだ砂浜でした。みごとな松林があったので緑八丁と呼ばれたりします。今も栄町の家々の庭にこの松が見られます。

五代の林郡長は歴史に名を残した林子平の子孫（しそん）で、九代の稲田郡長は詩のうまい人だったそうです。いつもえりの高いハイカラーにネクタイ、ダルマ靴で山高帽。書記さんはせんだいひらのはかまで、太いひもを結んだはおり。何しろ洋服をきている人は日石の社員とおまわりさん、それに黒のつめえり服に長靴という学校の先生くらしいの時ですから、郡長さんは一等しんしというところ。

（柏崎史誌 下巻）より

○刈羽郡役所

・明治十二年開設

五月、下町星野藤兵衛

旧宅にて執務開始。

・明治十九年現位置に新築

歴代の郡長

初代 山田八十八郎

原修斎塾出身

著書刈羽郡旧蹟志

二代 南部 信近

三代 安田 正秀

四代 辰野 宗治

五代 林 信

林子平の子孫

六代 久保田堅次

七代 石沢 兵吾

八代 神戸 豊

柏崎県立学校出身

九代 稲田 甫吉

十代 北見東一郎

十一代 深井 康邦

十二代 相原 澗

十三代 福原 桑治

十四代 尾久 次作

十五代 増田 穆

・大正十五年六月三十日郡

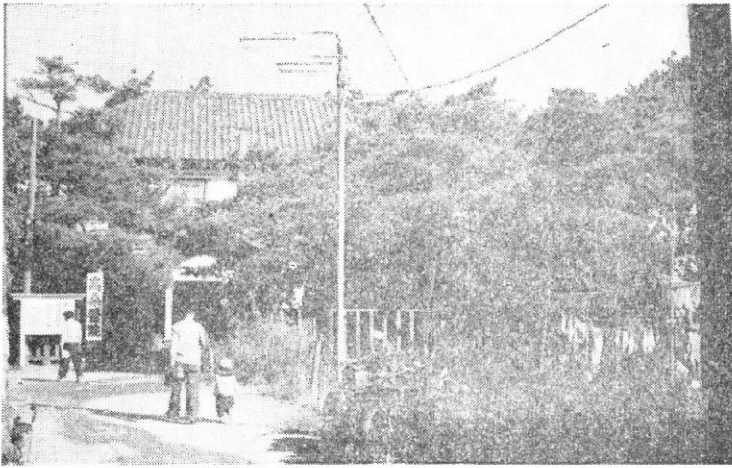
制廃止。

▽……

ほこり持つ制服

農学校の生徒は帽子に金すじをつけ、中学校は白線二本、商業の生徒は小倉のはかまで、すそに白の一本線、女学校の生徒はえび茶のはかまに一本線、古見野の生徒が二本線で三宮さんは三本線、補習科が波がた線、それぞれ、この制服にほこりをもったものです。郡役所の裏は今は郡病院ですが、ここは芝原で朝倉さんのさらし場、その奥に砂山があつてポットンと税務署があります。もとお蔵やしきのあとで洋風のたてものです。この山にから沢さんの「じやん」が桑を植えてかいかをかいます。今の品田ゴム靴屋さんのところで乾物屋（かんぶつや）をしていた人です。ふせ目いしゃさんのところは製糸工場があつたのですが、この

ころ柏崎れん隊区しれいぶ になります。



郡役所の名残をとどめている高桑医院

▽……

水泳協会でできる

十五代の増田郡長さんで郡役所は終わりになります。が、この方は水府流という水泳の先生でした。水泳協会ができたのはこの時です。郡の青年団も県大会のグラウンドでかつやくしました。「百はテイク（高田の阿部さん）のもんだし、二百はホカリか二田のニワヤマ、四百はシミズのもんだて」子どもたちは胸をわくわくさせました。下宿のホカリ、シミズの二選手は「兄弟みたいだナ。たかといはホンマだすけ、こっちのもんさ」こんなことをいいたったものです。県代表になつて、全国大会の優勝旗をもつてきたキタズミ選手のニヨニコ顔は、このころの子どもたちはいつまでも忘れないでしょう。

○女紅場

・明治十年 資本金四千万で建設。

機械教師 大島 基子
裁縫教師 三宮 しげ
事務員 加藤 才助
(旧桑名藩士)

近藤友之丞
(比角村の人)

世話人 中村喜平次
女工五十五人、寄宿生二十人(十三才以上廿五才以下)

・明治廿年 大久保屋火事
で全焼解散。

西巻永一郎、山田八十八郎の勞により開設されたもの。

趣旨は蚕糸業によつて土地の發展を期し、授産所と女子教育を同時に実施しようとする。当時としては進歩的な企画であつた。

最初の生徒募集は新潟県令永山盛輝の名でなされた。

八百人の朝起会

—町にひびいた体操の号令—

朝起会と坂田先生

▽……

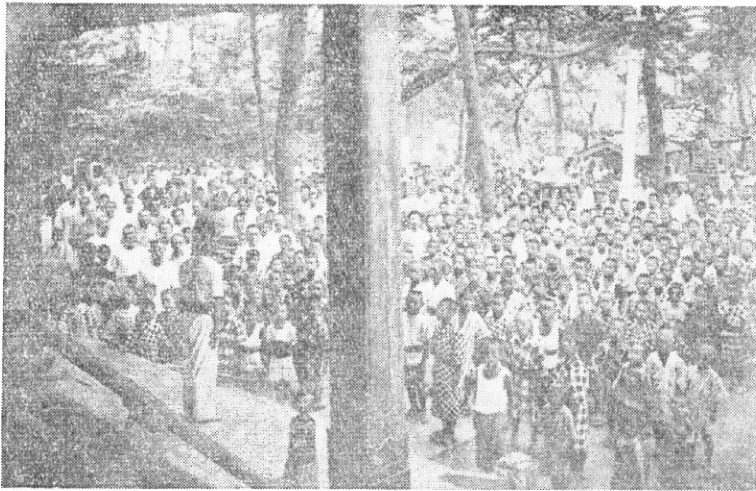
首の「馬の子鈴」をリンリンとならして子馬がいさんだように、子どもたちの元気なげたの音が、毎朝、まちにひびいたことがありました。朝の五時にはじまる朝起会（あさおきかい）に集まる足音です。三十六年前の柏崎神社のけいだいで、朝日をあびて体操がはじまりました。八月いっばいつづいて、おおい時は八百人も人が、柏小の坂田先生のごうれいで体操をしました。体操をする前に朝

起会の歌です。あまりきれいな声ではないけれど、坂田先生が一ふしうたつて見せます。「見よあけぼのの空の色」子どもたちがついてうたいます。時には調子があがりすぎたり、さがりすぎたりします。「しつれいシマシタ。センセイのノドのオルガンがくるいマンタ、ハイ。では、もう一度やりましょう、ハイ」調子をあわせて「あーびよ、ながるる朝の風」声をはりあげたものです。

▽……

みんなで早起き

早くから「みんなで早起きして、体操しましょう」と、坂田先生はいいつづけておられましたし、柏崎日



第一回の朝起会

○朝起会

(坂田体育研究所資料)

・大正十一年

坂田四郎吉「民衆体育」についての提案を再三発表。朝起会の提唱、運動を続ける。

・大正十二年

四月一日から三ヵ月間本町七丁目青年団主催でエンマ堂境内で実施(支部長新井理三郎)、午前五時ラッパ合図、十分間体操。

七月

朝起会振興発企人会、町役場にて開かる。

発企人総代村山助役

八月五日—二十五日

会場柏崎神社境内

五時煙火合図、五時半散会。参加者当初八百名、

やがて一千名をこえる。

以後、柏崎連合青年団主体となつて毎年開催。

参加章メダルのデザイン

第一回 宮川邦雄

第二回 室屋董道

第二回 室屋董道

報にも、その考えがのりま
した。これにさんせいして
本町三丁目と八丁目の青年
団が、四月からつづけてい
ました。坂田先生は時計の
ふりこのように、いったり
きたりで教えられます。そ
して、まちの青年団の世話
で柏崎神社の朝起会になっ
たわけです。これがラジオ
体操の会が始まる十年前の
ことです。

▽……

みんなの体操

柏崎神社の会場は三年程
だったと思います。年々盛
んになってここがせまくな
りました。八坂神社のけい
だいにうつります。プール
のところ、あの高さだけ
ひくく、プール下に家はま

だなくて、砂原で草やぶが
ありました。そのひくい原
っぱに集まりますと、プー
ルの上の高いところに坂田
先生が立ちます。そばに青
年団長の前忠さんがいま
す。ヒョロッとせいの高い
高橋さんも見えましたし、
小町屋さんがニコニコして
いました。柏井たみやの
おっさんの顔もありまし
た。時に白ヒゲの今井おい
しやさんの姿も見えまし
た。下に集まっている子は
たいていツンツルテンの着
物です。パンツはそろそろ

時はみんなハカマをはいて
とくいなったころです。
それに長い黒くつ下でゴム
ぐつはいたらオシヤレの
ほうだったのです。朝起会
の始まった年をもとにして
みますと、二年後に初めて
ラジオというものをみてび
っくりしました。丸万さん
がアメリカ製を二台持って
こられたのです。遠山さん
のバスが走りだしたのが五
年後、安達さんのトラック
が荷物をほこび始めたのが
八年後というわけです。

▽……

三千人をこえる

子どもたちは着物でも先
生発明の「舟こぎ体操」「ボ
ンブ体操」でゆかいになり
ました。舟こぎは号令でな

く、先生の「海ゆかば」の
うたに合わせてやります。
そしてヨイショ、ヨイショ
で結びます。八丁目や諏訪
町のはじの方から集まって
きたのですからたいへんで
す。全部出席するとメダル
をくださるのですが、三千
ご用意してたらなかったと
いうのですからおどろきま
す。「体操きちがい」とい
われながら、坂田先生の体
操へのいのりが、これから
なおもひろがります。

朝起会はさらに七つの地
区にわかれて行なわれるよ
うになりました。やがて、
これは子どもたちの仕事を
よびさましていくようになります。

朝起会のうた(曲「四辺
海もて囲まれし」)

柏小訓導 宮川邦雄作詞

一、見よ曙の空の色

浴びよ流るる朝の風

自然の靈氣に触るる時

我等の心は躍るなり

二、真紅に燃ゆる旭光を

まともうけて朝露の

大地に起てば我が行手

燦然として輝けり

(三、四略)

昭和四年より七会場

総指揮 坂田四郎吉

柏崎神社 柏井、小山、

相沢指揮 一〇〇〇名

八坂神社 赤堀指揮

六〇〇名

大洲小学校 乗松、青木、

品田、宮川指揮

四〇〇名

鶴川神社 内山、内山、

瀬下指揮 二五〇名

半田分校 深田、矢代、

今井指揮 八〇名

羽森神社 保坂、五十嵐、

小林指揮 五五〇名

岬町 清水、近松、村山

指揮 三五〇名

全員朝起会を一回グラウ

ンドにて実施。

少年団たんじょう

—ケンカしあったこともから—

この頃の戦国時代

町内の朝起会の後で、自分の家の前をそうじするきまりを作った子どもたちがあります。バケツを持って朝起会に集まり、冷水（れいすい）まさつをすることにした子どもたちもあります。少年団をかためるきっかけになったところもあります。

田町に少年団がうまれたのは大正十一年ですから、三十七年前のことになります。かしわざきでは一番ふるい少年団ですが、もうす

こしその頃の子どもたちのお話を聞いて下さい。

ボスを中心にしたくみが出ていて、ほとんどの子どもがどれかの組に入っています。組といいましたが、遊びなかもです。ボスといいましたがガキ大将です。兵隊ごっこも鬼ごっこもなかもでなければ入れてもらえない。雨の日や雪の日は大将の家へよって遊びま

ます。

いつでもケンカ

ほかのなかまの遊び場へ近よるとたいへんです。ワ

「ワー、ときの声をあげておっぱらいにきます。」「なあ、どこのもんだ。なあしたここにへきたんだ」としたたかにほほをたたかれたことがあります。お使いにいく時でも、よその町内を通るのがこわい。「なあして、おらほうのもん、いじめた」というので、なかまとなかまのけんかです。お祭りのお宮まいりのあとでうら浜にでて、二十人くらいずつの組がけんかしたこともあります。けんかがこわくても、なかまはずれにされるのがつらくて、びくびくしながら浜へいく子もありま

す。勝った方がまけた方をけらいにする、まるで子ども

やがて少年団に

▼……

門前の子どもはいつもけんかでした。

このようすを見て、二十

才だった土田さんが少年団を作ったらどうだろう、と

考えられました。これは見事な活動になりました。やはりはじめた洋服の子もあ

○柏崎連合少年団

(昭和九年九月資料)

- 団長 西巻進四郎
- 理事長 高橋 剛直
- 理事 長納賢明、土田喜一郎、小熊啓太郎、岩下祥児、近藤
- 指導係長 星野徳一郎
- 指導係 間瀬竹之輔
- 健児係長 能登 義雄
- 健児係 山田 英一
- 実行委員 能登義雄、間瀬竹之輔、小熊啓太郎、小山一郎

田町少年団

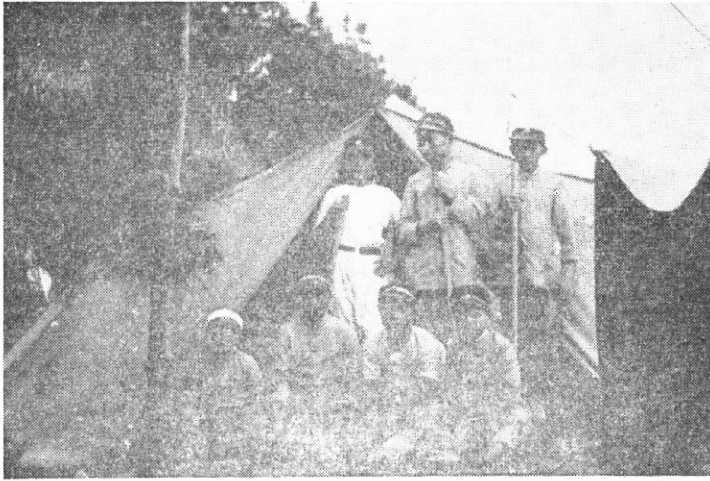
- 団長 土田喜一郎
- 幹部七 健児 四三
- 柏崎健児団
- 団長 長納 賢明
- 幹部七 健児 二七

諏訪健児団

- 団長 小熊啓太郎
- 幹部二 健児 二三

本四健児団

- 団長 岩下 祥児



柏崎で一ばん初めのキャンプ

ですから、今の中学三年生 あった子どもたちが「かお
から高校一、二年の年ごろ 田町の名をおいて」とう
の人たちです。けんかをし たいながら、一つになって、

自分のくらしをたてはじめ
たのです。大人の世話にな
らず、自分たちの手で仕事
をすすめる見事さです。写
真でみるキャンプは大正十
三年ですから、かしわざき
では初めてでしょう。

▽……

健児活動始まる

てんとは土田さんや青年
会の方たちが高田のれん隊
から、やっと借りてきたも
ので、たたみ二枚位の大き
さのものを、何枚かつなぎ
あわせるものです。なにわ
屋の裏山で、子どもの村を
作る楽しさを初めて知りま
した。団報も自分たちでガ
リばんをきって作ります。
一日一善の運動もあみだし
ます。こうしていつのまに
か、ボスのなかまこんじょ

うは消えて、新しい子ども
のきまりを共同の力でぎす
きはじめます。

おうそう寺さんの健児団
(けんじだん)もユニホーム
姿もりりしく、健児活動を
くりひろげます。つぎつぎ
とすばらしい健児を送り出
されました。諏訪健児団、
本四健児団、比角少年団、
枇杷島健児団と運動がひろ
がって、大洲に海洋少年団
があり、六丁目に中央少年
団ができます。この八団体
が一つになって柏崎れんご
う少年団を作りました。一
本のつるに八つのさつまい
もがつながっているので
す。子どもたちがひろいひ
ろがりて、つながろうとす
るあらわれということがで
きましよう。

幹部 四 健児 一七
比角少年団

団長 沂藤 禄郎

幹部 四 健児 二二

枇杷島健児団

団長 布施 知弘

幹部 五 健児 二八

大日本柏崎海洋少年団

団長 高橋 剛直

幹部 六 健児 三一

この翌年新団誕生

中央少年団

団長 前田義三郎

幹部 六 健児 三五

頼もしい夢育つ

—「ごまかすのは健児の恥」—

ちえをみがく

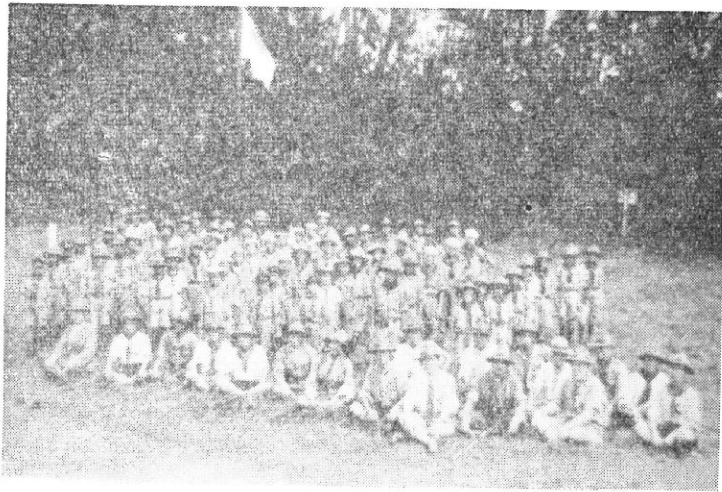
キャンプ

夏の御野立キャンプ村を、みなさんは毎年のように見えています。このキャンプのはじまりは少年団の野営場(やえいじょう)になってからです。三十四、五年前のことになりました。荒浜の青山や裏浜、半田山、かがみさと校の裏山などでもキャンプをしましたが、一番おおく使われたのが御野立でした。

キャンプは、少年団の行事では一番重いものでした。ジャガイモの皮や、ネギこしらえたあととのくずなど、見えやしないと、草やぶにほうりこんだりしても、さがしだされてたしなめられます。「いいかげんにごまかすのは健児の恥(はじ)だ」というのが少年団のキャンプです。ひまの時間でも自分のみつけた仕事をします。キャンプの終わるさいごまで、新しくきずいていく工夫をやめないのです。御野立の松林のなかで、子どもたちのたのしい夢が育てられてきました。

三つの県が野営

昭和五年のことです。ここで長野県や富山県の少年団と新潟県の少年団の合同



御野立で合同野営をする三県の少年(昭和五年)

九〇

○三県少年団連合野営指導会
昭和五年八月二十五日

野営場御野立公園

臨時大日本少年団連盟

理事長 二荒伯爵

指導者大日本少年団連盟

理事 芦谷主事

野営長 柏崎連合少年団

団長 西巻進四郎

キャンプファイヤーに於ける本部員の蕃人踊りを「野営ニュース」から拾うと、

ノトリノと現われませんでした

ギョロツリ目玉の蕃人

(ノト)

ものども恐ることはな
い
ふみだす足はツチダラけ
(ツチダ)
名はナガノなれど、背は
ちと
短い酋長さん(ナガノ)

野營を五日間やりました。

八一名集まり、テントも二一はり、三つの県の子どもたちが肩をくみ、手をつなぎあいました。富山代表のテントから、ちゅうもんのでたポブラの正体がわからないで、本部では首をひねり「こりゃ、きつと洋食に使うものだろう」ということになったのですが、カボチャとわかって一同ギャフン、などという笑い話もおきます。日本の少年団の親である二荒（ふたあら）はくしゃくも子どもといっしょにすごされました。

▽……

キャンプの道德

その時の写真をみて下さい。みなさんのお父さん、おじいさんの顔があるかも知れませんが、柏崎れんごうの西巻団長さんの、やさし

いめがねのお顔がわかりま

すか。キャンプファイヤーの時、この本部の方々がぼん人おどりをなさいます。キャンプが終わった日、新潟の子どもと富山の子どもも、それに柏崎の子どもが「長岡の、キノさんが、はアもないのに、モグモグと」と調子をあわせて穴うめをしていました。キャンプをしていたとはわからな

い程に、もどおりにするのが少年団のキャンプです。

だんだん御野立でキャンプする人が多くなってきました。キャンプ道德を知らない人たちが。それで少年団はここをすてて、昭和八年、剣野（けんの）に岩の原野營地を作りました。これには長納さん、山田さん、星野さんが骨をおられました。すばらしい野營場に作りあげたのですが、か

いこんされて、丘の畑にな

ってしまいました。子ども

のキャンプ地はつきつぎと、とりあげられてしまつた形です。

▽……

花は誰の手で

御野立は八十一年前に、

明治天皇がお通りになられた時、ここで景色をごらんになられて、お休みになられたので、こうよばれるようになりしました。下の海

の、たいあみのようすをごらんになられたということ

前に石黒先生や鯨波の青年

団の方たちの熱心な努力があつたからです。

グラウンドのまわりの丘がツルツルぼうずになって

います。もとは一面の芝

（しば）で、緑の丘でした。どうして、こんなにツルツルになったのでしょうか。

夏、たくさんの人たちがキャンプにきます。この

人たちの帰ったあとに、目をとめた人はありません

か。あらされたままになって

います。これが何年も、

くり返されたので緑の丘が

はだかの丘になってしま

りました。キャンプ村のすて

水は流れくたって、鬼穴前

をにごった海にします。花

を育てるしごとはどこにあるのでしょう。

天下一品ビール腹

しょう油腹なら日下開山
(ニシマキ)

○大日本少年団連盟公認

指導者講習会

・昭和十一年八月

於岩之原野營場

新潟、富山、長野三県少

年団三十四名。

生徒も勤労奉仕

—むかしの「ゴミのしまつ」—

こどものデモ行進

毎年九月一日になると、十台位の自てん車をならべてまちを走っていく子どもたちがありました。先頭の子が、リンリンとかねを振っていきます。つづく子どもたちは、どの子もボール紙で作ったメガホンを持っています。この頃、夏になると「コオリ、コオリ」と大声はりあげて、自てん車を走らせてくるブッカキ氷のキラクヤさんや、「げんまいパンのホヤホヤ」とメガホンでなってくるパン屋

さんのまねだそうですが、子どもたちは「火の用心」とさけんたり「左側を歩きましょう」とどなって走っていきます。以前は左側通行だったのです。どの子の自てん車も「火の用心・左側通行」と書いた大きなボール紙が、ハンドルの前にむすびつけられています。ぞろびつこで、うまい字ではありませんが、まじめな気持をにじませて、一列になつて走るかわい子ど

もです。裏通りの畑地のすみ、小路のおり口、田んぼのきわ、橋のたもと、浜へでる道のきわ、名物の山です。ごみといっしょにすてられた種子(たね)か芽がでていることがあら、芽がでていることがあら、き、モモの木、アンズの子ねよイ」子どもたちはうたいながらさがします。「おらナ、お寺の裏のごみすてばんとこで、こんがのモモの木をみつけたでヤ」と手ぶりで聞かされたりすると「よし、おらも」てがらをたてたくなつて「しゆんき、モモの木…」で

ごみすてば回り

ごみすてばのかたづけ仕事をしました。どこへいって、ごみすてばが目についたものです。裏通りの畑地のすみ、小路のおり口、田んぼのきわ、橋のたもと、浜へでる道のきわ、名物の山です。ごみといっしょにすてられた種子(たね)か芽がでていることがあら、芽がでていることがあら、き、モモの木、アンズの子ねよイ」子どもたちはうたいながらさがします。「おらナ、お寺の裏のごみすてばんとこで、こんがのモモの木をみつけたでヤ」と手ぶりで聞かされたりすると「よし、おらも」てがらをたてたくなつて「しゆんき、モモの木…」で

たまらぬにおい

この頃、ごみはまちのゴミヤさんが荷車で集めにきて、きまつた場所にすていきます。新花町うら、中浜の下、ようち園うらです。この頃、ごみはまちのゴミヤさんが荷車で集めにきて、きまつた場所にすていきます。新花町うら、中浜の下、ようち園うらです。ごみで浜をうめ立てて、ま

(市衛生体育課資料)

○し尿処理

昭和三十三年度

パキニウムカー大型二、小型三、オート三輪一、従事者一三人

汲取石数 一日平均

一月	三、二一九	一、二八
二月	三、五六九	一、四三
三月	三、三四一	一、三四
四月	三、九四五	一、五八
五月	四、〇六七	一、六三
六月	三、六六三	一、四六
七月	四、六〇三	一、八四
八月	三、一三七	一、二五
九月	三、六二九	一、四五
十月	四、八一二	一、九二
十一月	四、九二一	一、九七
十二月	五、六五〇	二、二六
計	四八、五五六	一、六二
最高		三〇八

○ごみ処理

昭和三十三年度

手車六、オート三輪一、大型トラック一

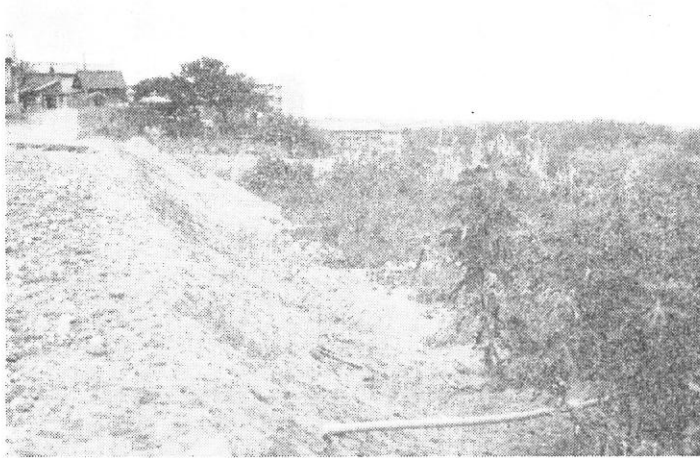
焼却場能力 一一、二五

はきませせん。「ごみすて
るべからず」の立札があつ
ても、平気ですてしてい
ます。道徳の時間を持って
いる皆さんは、それはおかし
なことだと思つてでしょう。
もののくさったにおいにた
まらなくなつて、自てん車
デモの子どもたちが、荷車
で浜のうめ立て場へはこび
ました。「たまげたね、一
山、浜へはこぶのに一日か
かったいや。車二十七台分
だで。くっさて、くっさ
て」これできれいになつた
らと思つたら「ようになつた
の」といながらまたすて
はじめます。

▽……

四百俵のコヤシ

今ではごみの焼き場がで
き、トラック、オート三り
ん、車がはたらいて、一日



ゴミのうめたてで出来た通り（柏崎保育所付近）

に八七〇〇*[△]も集めてい
ます。これで名物の山がか
げをひそめることになりま
した。

こやしも農家の方がくみ
とりにきてくれました。こ
やしおけをのせた車を毎日
のように見たものです。一

年の終わりにお礼のもち米
がとどけられますから、正
月のもちはたいいていこれ
まにあいます。「キタガラ
のジャン、まだこないか
な」と待ちどおだったの
は、おべんとうがわりに持
ってくるやきもちがねらい
でした。いろいろ灰で焼いた
やきもちが子どもにはめず
らしく、なかからシオイワ
シでもでてくるとばんざい
です。それがだんだんかわ
つて、コヤシさんがこな
いようになつてこまるよう
になりました。今はバキエ
ウムカーがくみとりにきて
くれ大助かりです。一日に
くみとる量は米俵にすると
四〇〇俵分位になります。

○*[△]△

一月十二日

三、二二五、八四〇*[△]△

内一、五一八、三四二*[△]

△残り埋立に利用

○柏崎の牛舎

（柏崎日報大正一〇、七）

柏崎で消費する牛乳

一日に一石二斗

岡本牛舎

明治天皇御巡幸の年に

創業

乳牛一七、仔牛沢山

県委託種付牛

第四ヨキムエス

県が下総御料牧場より

千余円で購入したもの

県産牛馬連合会から飼

糧二十余円の現品がく

る。

屠牛用の佐渡牛もいる。

殺菌場、冷蔵庫等の設備

県下に類なし。車五台で

配達、販売。

その他に、島町高橋、荒

浜高橋、中浜五十嵐、比

角近藤、新道金子、塔ノ

輪吉川、曾地小林。

赤坂山に汗流す

—療養所に奉仕—

町あげて手つだい

まちをあげて仕事のお手つだいをしたことがありません。昭和十三年のことです。赤坂山公園を作ろうと、熱心となえておられた方がありましたが、そこに戦地で病氣になった人の療養所（りょうようじょ）ができることになりました。これが後に今の新潟療養所になります。松林の美しい高地ですから、地ならしが先ずたいへんな工事です。この仕事をまちの人たち、学校の生徒が手つだいました。夏の日がカンカンてり

つける時です。三千本の木をきりたおし、その根をほりおこします。ロープをつけて十五、六人もの人が「ヨイシヨツ、ヨイシヨツ」とひきます。スコップで土をけずり、くわではこりおこし、モッコではこぶ、たくさんの人がいりまじっての仕事です。みんな汗ビッシヨリ、どろだらけ。「おーい、水くんできたぞ、ごま堂さわの水はだめだったスケ、ゴゼン水くんできたいヤ」（この話はあとでしましょう）バケツにとびついでのをうるおしました。町内の名を書いた旗が青竹の Teppen で光っています。向うの山に



元気になつて退所する人を見送る療養所の人たち

も、はだぬぎで作業をして、ひくいとこがうめらいる人たちが見えます。こゝろ、家をたてる場所がでうして十一の山がけずらきていきます。

九四

○五十嵐与助翁

（大洲小学校資料）

柏崎市中浜五十嵐仁助長男、明治十一年十月三日生。

・明治三十九年（二十九才）当時、東京にて果物商として大をなす。

日本漁業株式会社の再建をはかり、未開の北洋漁業に先鞭をつける。

千島列島のホロムシロ島に独力で与助港を築く。

米国へ我が国最初の鰹の輸出に成功。

・大正四年（三十九才）

バナナの早期色付方法を発案して、宮内省、台湾総督府の御用商人となる。

・大正九年

誰もが目をつけようとしなかつた芝浦に三千坪の土地を手に入れる。

・大正十一年三月

日米水産株式会社を創立

この地ならしは一カ月か
かり、二万人の人が奉仕(ほ
うし)しました。町内町内
がこうたいで、学校の生徒
や団体も日割をきめて、赤
坂山の松や土ととりくんだ
のです。中等学生(今の高
校生にあたります)二七〇
〇人、婦人会や青年団三二
〇〇人、消防団やざいごう
軍人一一〇〇人、町内会二
五〇〇人、少年団二〇〇人
県の役所や会社八〇〇人と
その頃の柏崎日報に書かれ
ていました。

▽……

美しい桜の並木

そこに、この写真のよう
に建物ができ、最初は二〇
〇人の病気の兵隊さんが入
りました。すっかりできあ
がって開所式をあげたのが
昭和十四年十月で、この時
は五〇〇人の方がゆっくり

やすめるようになりまし
た。石油の内藤さんが植え
た八〇〇本の桜は、今も正
門の道と三中の側の東門の
道に大きく枝をはって、春
になると美しい花の並木を
みせてくれます。近藤薬店
のお母さんが会長さんをし
ていた婦人会で、患者(かん
じゃ)さんにそろいの外出
コートをおくられました。

緑がかったダスターコート
を思わせるものですが、患
者さんはよくこれを着てま
ちを歩いていました。これ
から十五年後、私が入所し
たときも、すそまわしがズ
タズタになっていました
が、これを着た作業療法の
患者さんがあったのにびっ
くりしました。今は七〇〇
のベッドの数があるはずで
すし、はしからはしまで歩
くと、廊下の長さが八〇〇
はありましよう。歩くけ
いこをする患者さんは「シ

ベリヤかい道」とよんだり
します。赤坂山いっばいに
羽をひろげて療養所は、長
い病気の人たちのいろいろ
な心を包んで、たくさんの
人に再生の喜びをあたえて
います。

▽……

山回るで与助道路

蔵庫を完成したほどで、日
本の水産界(すいさんか
い)では忘れることのでき
ない方です。大洲に生まれ
た与助さんはりょう師の手
つだいからおけ屋のござう
になり、つむぎ職人、酒屋
ほうこう、米つき、車ひ
き、八百屋さん、小さい
ときからはたらきぬかれま
した。一昨年八十才でなく
なられましたが、きょう土
にのこされた与助さんのお
仕事や大洲小学校の図書館
は、みなさん一人一人にあ
たたかいはげましをあたえ
てくれることでしょう。

この人たちがもえるよ
うな心をおさえながら、静
かに散歩する「よすけ道
路」があります。療養所の
山をぐるりと、とりまいて
いる道で、五十嵐与助(い
がらしよすけ)さんが作っ
たので、この名がつけられ
ています。与助さんは番神
の銅像になっている人で、
北洋漁業(ほくようぎょぎ
ょう)を開いた方です。そ
の会社は二十年前に、一万
五千トンの冷凍(れいとう)
食品を作ることができた冷

・昭和十五年
総面積五千坪、総トン数
一万五千トンの冷凍庫(東
洋一といわれる)完成。
・戦後
下関に事業本部を移し、
南洋漁業に乗出す。

特長は共同井戸

— 水道のなかつたころ —

▽……

「ごま堂沢の清水」

この写真が「ごま堂沢の清水」とよばれているところです。東側は高い台地になつていて、大久保の焼物（やきもの）が作られたところ、かわらやれんがが焼かれた所で、そのものになる土をほりとつたあたりもあります。それにつづいて緑ガ丘の新しい家々がたちならぶところになつています。ここは年頭屋（ねんとうや）さんが中浜におられたころ、茶の木が頭をそろ

えて、見事だった茶畑のあとです。西側も高台で療養所の官舎があります。その沢の清水をこのように青石で、約四畳ましかくにかかつてあります。以前はふたがしてあつたそうですが、今はとりはらわれています。中はため池の水のようですが、きれいなすんだ水がパイプをくぐって流れだしています。

▽……

パイプで水引く

今の帝石のところに日石の大きな製油所ができてか

ら、鶴川の水がよごれるようになった話は前に書きました。それで日石がきれいな水をさがす仕事をされた。ちょうど、このごま堂沢のあたりから療養所の前にかけて、石油をほるけんりを日石が持つていました。（昭和十五年に、帝石も療養所裏の山で石油をほる計画をしていました）ここでよい水がみつかりました。パイプで水を引くこと

にします。荒町から柳橋にかがる橋の近くに、高いへいをまわして日石のテニスコートがありました。そのそばにやぐらの上にせたタンクを作り、水はいったんこのタンクに入りま

「おしみず井戸」

▽……

す。この頃は太掛ご服店のきわが橋のたもとでしたがその橋の「はねで橋」より、高さ一桁位のパイプがニョッキリたつていました。ステッキのにぎりのように、上の方が下向きにまがつています。タンクの水はここへつながつていますから、わ形のハンドルをまわせば、水はすきな程でできます。荒町にもこれが二カ所あつたとおぼえています。原酒屋さんにも、この水がひかれて利用されています。

○ 柏崎の茶
（山田良平著「柏崎歳時記」）
土地産、村上産、縮行商婦り荷、宇治茶等を扱つて、県内、長野県に販路をひろげた時代あり、当時年頭屋本家（中浜）は長野県上田市に支店をもち、山治茶店は蒲原方面に有力な地盤をもつていた。

・年頭屋本家

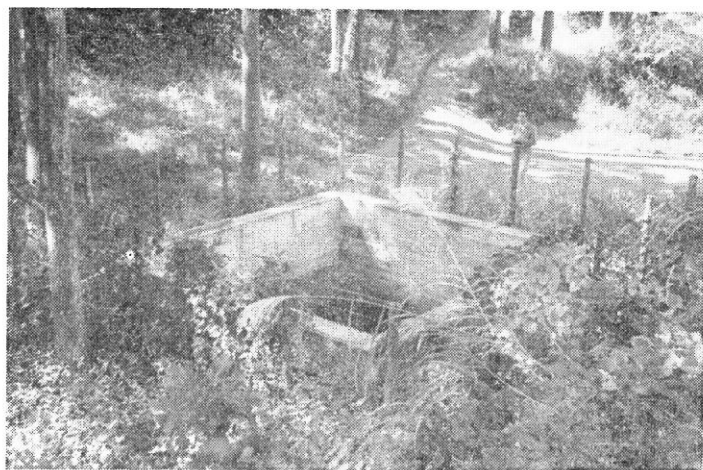
（中浜・山岸午一郎）
明治初年剣野山で茶の栽培をはじめ。

剣野山産の茶、全国勸業博覧会にしばしば入賞、明治三十年鉄道開通と同時に、地方茶の将来を見通し、静岡へ移る。

新道秋幸苑（飯塚知信）では今日も、自家用の茶は栽培している。

○二ツ井戸

（柏崎史誌 下巻）



大久保にある日石水道の水源池

れと細道をはさんで、今は庭畑のすみにある「まござえ門井戸」のことです。明治天皇がお出でになられる

といたので、水のけんさをしました。一番よい水だったのがこれで、二番目が文書院のかどにあった井戸、次が柏崎神社の大門か

家老さんが勝願寺（しろうがんじ）から陣屋へもどる途中、ここでやみうちされたという話が残っています。

井戸の深さはかしわざきの砂丘のようすを教えてください。八坂神社の井戸が一一尺、納屋町の共同井戸が一尺、小町永徳寺（よとくじ）前のものが一〇尺、文化書院かどが一〇尺で深く、東へいくにつれて浅くなります。四銀の西かどにあったものが五尺、四谷ひきぎ町かどのものが三尺半です。広小路や島町にあったものはずっと浅くなり、田町ビチャモンさんの裏の井戸は一尺七〇です。これらは砂丘の厚さを示していると思っていでしょう。

「まござえ門井戸」のことです。明治天皇がお出でになられる化書院のかどにあった井戸、次が柏崎神社の大門かど、もと小鶴屋という床屋さんのところにあったものです。それで、行在所（あんざいしょ）で使われたのが「ごぜん水」のいわれです。大久保の渡辺さんは厚さ三丈、幅三〇程の板に、長さ四〇程のひのきの板に、ごぜん水にさしあげたものだということばを書き、新瀧泉という大きな、まるい焼印のあるものを、ごらんになられたことがあろうです。

▽……

砂丘の厚さ示す

柏崎神社かどの水を駆通りの人たちが、大きなおけにくんで、車ではこぶ話は前になりました。あわしま大門の中ほどにある「二ツ井戸」は今も利用されていますが、九十年前に桑名のご

慶応四年四月三日、家老吉村権左衛門二ツ井戸付近にて暗殺される。

松平越中守定敬、百余人をひきつれ、汽船で江戸を発し、柏崎に來り、勝願寺を本陣とし、兵は西光寺下の広場に仮營、藩老吉村権左衛門官範、桑名を發してかけつけ、忠諫して恭順を説く。郡代平松多門、郷士星野藤兵衛と力をあわせ苦心す。中将様善根にうつり、伏罪と決した翌三日、勝願寺へ出動の途中、反対派の二兇徒に斬られる。歴戦の藩士二百名余、後を追って到着したためである。これによって苦心、水泡となる。

60年変わらぬ湯量

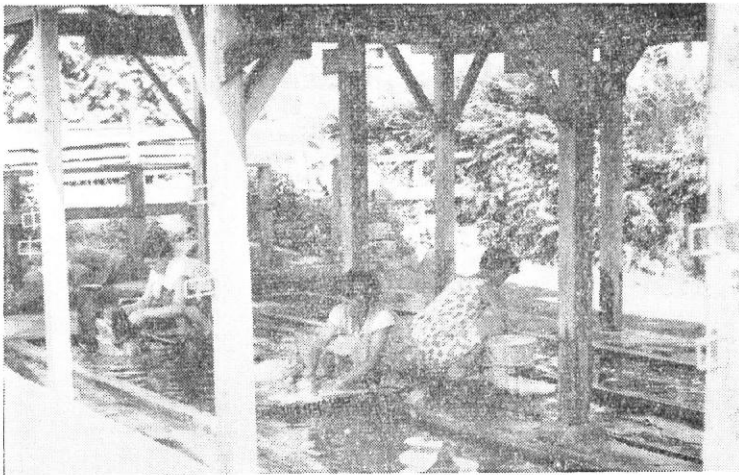
— 八坂町の共同せんたく場 —

共同のせんたく場

△……
ここは八坂プールのそばにあるせんたく場です。共同井戸をせんたく場に使っているところは、前に書いた大久保のおしみず井戸、二つ井戸、中浜の茶の池井戸などがありますし、三十年程前までは川岸にもありました。多くは橋のたもとにあって、鶺鴒川の大橋のたもと、荒町にかかる橋のたもととはよく使われていました。この写真のせんたく場はかしわざきでは、ちょっとめずらしいものです。

石油井戸を利用

△……
六十年位前になりました。うか、石油ほりが盛んになった時、横関大工さんがむちゅうになり、小倉さんや石坂さんもここで石油をほりました。ところが石油がでないので、パイプはそのままにして、やめになりました。水だけが直径二〇センチくらいの、そのパイプからふきこぼれています。ここは小石川さんの土地ですが、いつのまにか木わくがくまれ、せんたく場ができています。早くからたくさんの人に利用されてきました。今でもこの掲示板を見ますと、八坂町はもちろん、港町一、二丁目、本町一、二丁目、鶺鴒川町、島



六十年利用されている八坂町共同せんたく場

町、小町の人たちが使って、共同でここをととのえられます。水利組合を作

- 柏崎永字銀 (柏崎史誌 上巻)
元和、寛永の頃、銭山にて鑄造した。
柏崎永字小間銀の原料は佐渡の銀を用い目方一定せず、厚さ二分位にて長く吹き、極印をうち、大小意にまかせて切取りて通用。里言に鈍切銀という。
- 内山無曆庵談 (昭三二・柏崎日報)
県内長岡、村上、高田、佐渡、柏崎などの各地で「切銀」といって、長細い棒状の銀に極印を押し込んだものを出し、それを切っては目方でいくらと通じた。
- ・ 明治七年、柏崎県庁で古銭の展覧会が開かれた時、星野藤兵衛家から出品された。現在は所在不明。
- ・ 国内で所在の判明してい

の池でもそうです。茶の池組合で使い方をきめたり、なおしたりしています。

この水は工業高校の生徒さんがしらべられたことがありますが、いおう分をふくんでいるので、さらし粉を使った時のように、早くきれいになるそうです。それに十七度くらいの温度になつていきますから、冬はあたたかいのです。ゆげが煙のように雪の道の上まではいでてきます。

▽……

温泉のはじまり

水といいましたが実は湯です。柏小の例の砂にうずまる場所が、今のようになつて直しの時、古い校舎は買

われて岩戸屋別館になり大きな鉄道の寮がそれです。ここへこの湯が送られまし

た。ですから柏崎温泉のはじまりはここ、といつてよいかもしれません。この別館はやがて料理屋にかわり、高柳寮とかわります。柏崎の中等学校（今の高等学校）へかよう高柳の子どもたちが、ここでいっしょにくらしたのです。今の柏崎温泉の井戸を新花町の砂山にほつている時、せんたく場の湯が二週間くらいとまったことがあります。せんたく場の深さと同じくらいほり下げた時だそうですが、さらにはりすすんだらまた、もとのように、六十年來かわらぬ湯量がでてきたということ。土の下の湯のくらがつづいてい

▽……

「柏崎銭」が出る

せんたく場の小路とよば

れているのが、プールわきへ出る海岸道路から一本東へよつた小路です。これは小熊さんにお聞きしますと、もとは天王小路とよばれたものです。天王さんといふのは八坂神社のこと、子どもたちはギオンさんで、子どもたちはギオンさんといつていました。このギオンさんは天王小路を入つて左へまがると、プールにぶつかりますが、ここにありました。ここが一段ひくい原っぱであつたことは「朝起会」の話で書きました。縮のさらし場で芝っ原でした。今のところは銭山がそれをひいていました。これを平らにならして八坂さんがうつたのです。この地ならしの時、銭山でつくつていたという「柏崎銭」がでてきたそうです。かしわざきの人が初めて見ることできた「柏崎銭」です。

▽……

昔はわなみ神社

八坂神社について勝田さんは「昔は和那美（わなみ）神社とよばれたものが、後に京都風に名をかえたものでないか」と書いていられます。鶉川に輪形の波がよせるところからこの名があると伝えられています。千数百年の昔、御所から逃げた白い鳥を越の国、

和奈美でつかまえた記録があるそうです。そこがここではないだろうか、ということですから、柏崎という地名が記録に見えるよりもずっと早く、和奈美の地名が記録にでていることになります。

るもの一つもない。東京でニセ物がでたが、銀性が良すぎで、すぐわかつた。

○八坂新地の霊泉

小倉常二郎、石坂周造両氏が石油をほつた時に噴出したもの。

○忘庵筆（柏崎日報）

「こんじゃく柏崎」
維新の志士、石坂周造は明治初年、信州で石油井をほつた程の油界先覚者。

鎌田に所有する鉱区を解放して、開坑料を納め、採油の歩割さえ定めれば許したのでやぐらが林立した。

初めての水道

—三年がかりの大工事—

▽……

くふうした飲み水

きょう土の土台になって
 いる砂丘のすそをたどる線
 が、水の良いところ、わる
 いところのさかいになって
 いることは前に書きまし
 た。水のわるいところでは
 昔から毎日の水を用意する
 のに苦労しました。大八車
 で水をはこべないところで
 は、砂や小石、炭、シエロ
 の皮などを、いろいろに積
 みかさねて水をこしたり、

岬町でみかけましたが、横
 井戸をほって水をひいたり
 します。高田地区では川の
 水をくみあげて、こしてい
 ます。安田へいくと、山の

横穴から何百^ヤも、竹のと
 いを通して水をひいてきま
 した。田の中に「分水」と
 よばれるものが、あちらこ
 ちらにたっていたのを思い
 出します。高さ一^ダ五〇く
 らいで、山からひいてきた
 水が、二けんに分けられる
 しくみです。頭のコロに穴
 が三つあって、一つの穴か
 ら水が流れてで、他の二つ
 へ流れこんでいきます。工
 夫された共同の水道です。

▽……

水の不便なげく

四十年前前に、ピシヤモ
 シサンの裏にタンクがたち
 ました。二つの井戸をほ
 り、水は第一の井戸から第

二の井戸にうつり、ここか
 らモーターでタンクにくみ
 あげられます。そしてパイ
 プで駅前の家へつながら
 ます。この人たちの組で
 つくられたかんい水道で
 す。こういうタンクは、本
 町二丁目交番のうしろにも
 ありました。これは広小路
 へ水を送るものです。けれ
 ども、水のくらしの不便さ
 をなげく地区がたくさんあ
 りました。

このなげきをなくするた
 めに、水道の工事が昭和
 十年からはじまりました。
 今の水源池ができるので
 が、筆やことばでいづく
 せない西巻町長さんの苦労
 がありました。

▽……

すすんだ町にする

には

かしわざきの古い本に箱

水道、大小十三カ所と書い
 てありますから、二、三百
 年前前に水道があったもの
 でしょう。五十五年前の中
 越新聞(のちに柏崎日報に
 なります)が、かしわざき
 をすすんだ町にするには、
 まず水道を作ることだと主
 張しています。その仕事に
 西巻さんがのりだされたの
 です。昭和七年から実地に
 ついてしらべたり、計画の
 もとになる資料の準備にか
 かられます。その翌年、計
 画が町会で発表されてから
 がたいへんです。

そのころのかしわざきの
 三年分のけい費のかかる大
 工事です。今の柏崎のけい
 費にくらべてみますと、こ
 の間できた二中が鉄きんコ
 ンクリート二階だてと三階
 だてですが、これを一度に
 三十校たてると同じです。
 海岸の白く、美しい三階ア
 パートなら六十たてること

○水道完成当時使用戸数

(昭和十三年調査)

戸数	水道使 用戸数	%
廣小路	四〇	一〇〇.〇
田中	三三	一〇〇.〇
半田	九	一〇〇.〇
岩上	二〇	一〇〇.〇
表町	七	一〇〇.〇
新島町	一	一〇〇.〇
鏡町	一	一〇〇.〇
枇杷島	一	一〇〇.〇
本町三	七	一〇〇.〇
旭町一	七	一〇〇.〇
本、二	二	一〇〇.〇
田町	二	一〇〇.〇
南町	二	一〇〇.〇
剣野	三	一〇〇.〇
本町六	一	一〇〇.〇
島町	一	一〇〇.〇
本町五	一	一〇〇.〇
本町七	一	一〇〇.〇
本町八	一	一〇〇.〇
住吉町	一	一〇〇.〇

廣小路	四〇	一〇〇.〇
田中	三三	一〇〇.〇
半田	九	一〇〇.〇
岩上	二〇	一〇〇.〇
表町	七	一〇〇.〇
新島町	一	一〇〇.〇
鏡町	一	一〇〇.〇
枇杷島	一	一〇〇.〇
本町三	七	一〇〇.〇
旭町一	七	一〇〇.〇
本、二	二	一〇〇.〇
田町	二	一〇〇.〇
南町	二	一〇〇.〇
剣野	三	一〇〇.〇
本町六	一	一〇〇.〇
島町	一	一〇〇.〇
本町五	一	一〇〇.〇
本町七	一	一〇〇.〇
本町八	一	一〇〇.〇
住吉町	一	一〇〇.〇

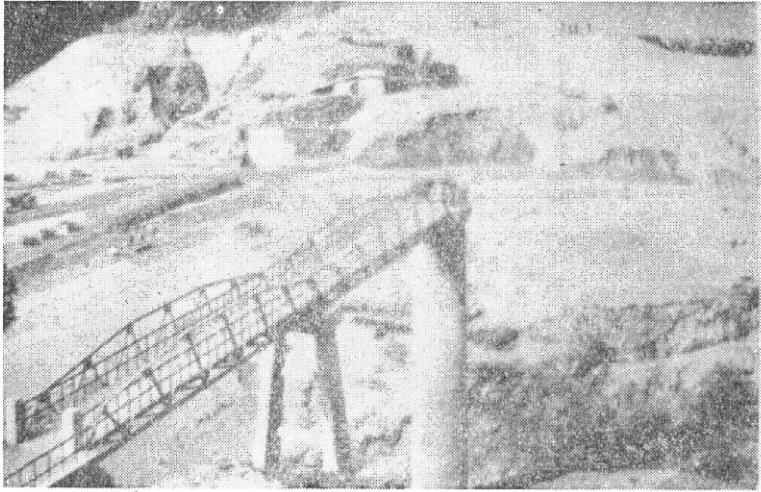
になり、消防自動車千台ならべる仕事です。こんな大きな仕事は、まちの人にとっては初めてですから大ききわぎになりました。水のよいところの人はほんたいします。まちをたいせつにする気持ちは同じですが、まちのおふる屋で体を洗いながらさんせいだ、ほんたいだと議論します。床屋でさんばつしながらもいきまきます。お茶のみ話もこれです。ほんたいからさんせいにまわると「もうおれの家へくるナ」というしまつ。

▽……

西巻町長の苦心

こんなようすですから、西巻町長さんの心をいためることは、なみたいていのことではありません。上水道がよい水をはこぶだけで

なく、もっと大きく、まちをはってんさせる役割を持つていたことをときつづけられました。町内をまわっ



水源池工事のようす（昭和十年）

て話もなさいます。体を休めるひまありません。こうして始まった工事です。工事は三年かかりました。水源池の水は三八〇〇坪のパイプを流れてゴロゴロ山の配水池へひとりであがります。ここから家庭へ水を送るパイプは三七〇〇坪、これはその後の三度のかくちよう工事で、およそ百倍の長さになります。一〇七九軒の人人が初めての水道の水にどんなに喜んだことでしょう。二年後には二一四〇軒になり、今では五四六六世帯です。田尻、西中通の上水道と共に、くらしをたかめるきそになります。

八坂町 一五・五
鶴川町 一四・九
岬町 二四・三
旭町二 七
旭町一 二
本町四 二
小町 八
学校町 二
栄町 二
港二、三、三 二
比角 二〇二
新花町 一四〇
諏訪町 三〇二
中久保 七三

八坂町	一五・五
鶴川町	一四・九
岬町	二四・三
旭町二	七
旭町一	二
本町四	八
小町	二
学校町	二
栄町	二
港二、三、三	二〇二
比角	二〇二
新花町	一四〇
諏訪町	三〇二
中久保	七三

駅通りの発てん

—町を作ったガスと水道—

▽……

三十五、六年前の駅通り

これは日本一、絵葉書を持っていられる小竹さんから、おかりした写真です。

堂々とした岩戸屋が目につきます。あだち食堂のところに、こんなにりっぱな旅館「みやじま」があります。

石油の中村さんも高い蔵、昔風の店、運送店です。三十五、六年前の写真になりましょう。今のみのやさんのところは米仙（こめせん）さんです。せいまいの仕事をされた家で、せいまい機械の首でにぎやかでした。

ここも前には運送店をかねていました。そのそばの川のむこうがマルカシ運送店、こしかけ机がめずらしがられて「ハイカラの事務所だ」といわれたりします。

▽……

モダンな店一号

岩戸屋のがわをみると北日本の会社が今の正門のところにできていて、盛んにドロップスやビスケットをつくっています。そのかみどなりが、みのやの支店です。本店は本町三丁目、今の「おぼあちゃんの店」の



はじめて自動車が走つたころの駅前（大正十五年）

ところにあつて、ギオンの娘さんたちが、くしダン夜は、すがすがしいゆかたの娘さんたちが、くしダンゴをいそがしく売っています

1011

○モダンな店

洋風建築の第一号という意味では高由呉服店をあげねばならない。三丁目から会田写真館へ下りる火防小路の西角を占めていた。

大正四年の「葉月、三四郎著、柏崎」に次の一文あり。

屋根看板を柏崎に始めて企てたのは、先年故人となつた高由呉服店主人の「国産縮」というのだったが、店が現今の柏崎には珍しい洋風の建築に変わると共に、再び見るを得なくなつた。同店の飾窓には時々、目新しい意匠人形などが陳列されるが、それが皆同店員の手によつてのみ作製されるというのは嬉しい事だ。この飾窓がちょうど角店の中央にあつて、この上がグンと高く、三階になつていたと思う。屋根は六角形に尖塔をなしていた。ちょうど時計台のよ

した。この支店はまもなく
かしわざきのモダンな店の
第一号になります。やが
て、今のところに本、支店
いっしょになった店になり
ます。そのあとが北日本の
直売店になるわけです。そ
のとなり、川のそばは笠屋
そばさんでした。

ワラウちのきね

この写真よりちょっと前
に、この川のところにはね
つるべがありました。水ま
き車に川の水をくみこむた
めです。そばやと川をはさ
んで竹田運送店の長い店が
ありました。今の北日本の
裏門や、製品倉庫のところ
です。道から二丁近くひっ
こんでいて、プラタナスが
四、五本ならんでいます。
その一、二けんかみに村山
運送店があり、前がわはさ

つきのマルカンのところに
おのみや運送店、この本宅
が今の天京のとなりの山田
たばこやさんです。そして
北日本正門のところが運運
会社、そこから岩戸屋まで
が熊木運送店、ずらりとた
らんでいます。このうち
米仙・中村の両運送店は、
自分の家で集めた米や石油
の運送せんもんです。宮島
旅館裏のほう、今の日通倉
庫のところはなわ工場で
す。裏通りの中村石油の車
庫のところで、わら打ちの
きねが一列にならんで、ゴ
ットンゴットンとわらをう
っています。昔の駅前ら
しい姿でした。

町を作りかえる

この駅通りも山田小路の
昔からみると、ずい分か
わってきました。加納(か

う)本屋さんの前にあった
大工のゼニヤは「はずれ」
とよばれ、山田小路のはじ
っこだったのです。加納さ
んがここに家をたてられた
のは六十二年前で、そのこ
ろここからしもの方はずつ
と、畑や田んぼで、土田時
計店のとこまで、ひと抱え
もありそうなたモギがなら
んでいたそうです。この前
の年から、かしわざきまで
汽車をとおす工事がはじま
っていたので、山田小路も
駅通りの道の用意はしてあ
りました。今の道のはばに
なわをずうっとはって、こ
れが道のしるしです。ゼニ
ヤのやしきをけずって今の
安中さんと上田さんの間に
でる旭町の道をきめたのも
その時、それまでは旭町の
道は、へんじょう寺のけい
だいにある井戸をまわっ
て、今のニールックさん
とオギノさんの間に出る、

荷車がやっと通る位のもの
だったそうです。なわだけ
は、まっすぐはってありま
すが、小川が流れこんでい
るところは、それにそって
まがって歩く道です。そし
て駅前にポツンとはたご屋
がある、さびしい田舎道で
した。
それが前後左右に羽をひ
ろげたように、新しいまち
づくりをして、今日のように
になりました。まちをつく
りかえた手品のたねは、ガ
スと水道だということがで
きましよう。
十年、二十年のさきを考
える仕事の大切さを、私た
ちの目でたしかめていきま
しよう。

うに、異彩を放った塔を
中央にして、左右にひろ
がる店構えで、名物とな
った。
後十全堂医院となり、改
修が加えられて尖塔がな
くなり、現在はいはずみ屋
青果店となっている。
○駅通りの交通調査
(柏崎日報)

- 大正三、九、八
- 男六五、女一二六、荷
- 車三六、自転車二四、
- 人力車一二、犬四、猫
- 一、ウバ車七
- 昭和三、一〇、二五
- 歩行者 二九七六
- 人力車 六〇
- 自転車 一七三五
- 自 転 車 一七三四
- 荷 車 一五五
- 牛 馬 車 一二五
- 自動自転車 一二
- 自動車乗用 一一三
- 乗合 七八
- 貨物 一一八

駅通りの変わり方

— 10年で70%も入れ変わる —

▽……

かし本屋の第一号

やしきがスカ町へ入る道になった「はずれ」の大工ゼニヤさんは、今のオギノさんとニールックさんのところで「たび屋」を始めます。加納さんはむかいがわの「はずれ」で「貸本と石油小売り」の店です。一週間一錢五厘、月ぎめ七錢で何回でも貸出す、かしわざきの第一号貸本屋というところでしようか。

▽……

初めて見た汽車

加納さんの話ですと、こ

くらく寺までおかしようき（汽車）がくるといふので「どんがのもんだこんでら」とでかけたはよいが、よ

い時間を一時間すぎてもやつてこない。「いいかげんやんなるころ、きたてもんだ。でつかいえんとつで、トロッコみたいの箱車をひっぱっているがんだも、いや、ぶったまげたもんです」きょう土に初めて

走る汽車です。これが六十二年前の八月一日、直江津の一つてまえ、春日新田と柏崎をつないだ鉄道です。

「春日新田いでぬれば、五つの駅のそのつぎは、柏崎にといたるなり」そのころの歌のもんくです。十一月

二十日に北条まで走ります。二年後にこのまん中、田尻のお墓山あたりに駅を作ろうとしたのですが、田

ぼをつぶされてはこまると反対にあって、ずっと北条によつたところにできました。これが安田駅です。機関車が火をふきだしたまま走りだしたという電話を鉢崎から受けて、ごくらく寺の門のところであき俵をつみ、砂をはこんで、いざ、火の車ござんなれ、と待ちかまえたという奇妙なできごとが起つたりします。

まず長屋がたつ

▽……

やがて畑や田ンぼの中の、墓地が二場所もある駅通りに、家がたち始めます。先ず長屋がたてられました。モハツツアのたてた八軒長屋、今は新しいよ

そおいをしたマルタ百貨店です。初めマルタさんは岩美屋のとりの青果市場のところ、米屋さんをして

いて、この長屋の裏の方に麻さなだの工場があり、長屋のはしに雑貨店をひらいた時には、八字ひげのおじいさんがはかまをつけて店番していました。茂八つあ

んは田町のかど、村山タバコやさんで大工だったので、赤堀さんが材木屋さんで、けいさつ署へいく小路のところ、工場をおきましたが、ここに貸家や三軒長屋をたてます。谷根の竹内

○北越鉄道

（柏崎史誌 下巻）

・明治二十八年十二月十二日 工事着手

・三十年八月一日 春日新田、柏崎間開通

・同十一月二十日 北条まで運転

・当時の料金 柏崎鉢崎間 中等七錢、下等五錢

・三十一年十二月二十九日 柏崎、長岡間開通

・鯨波駅は三十二年二月十七日設置請願書提出

・安田駅工事同年三月着手

○ぎきよ堂談

当時、汽車の発着不定期だったので、駅長が鈴をふつて、汽車が入ってくることを知らせた。

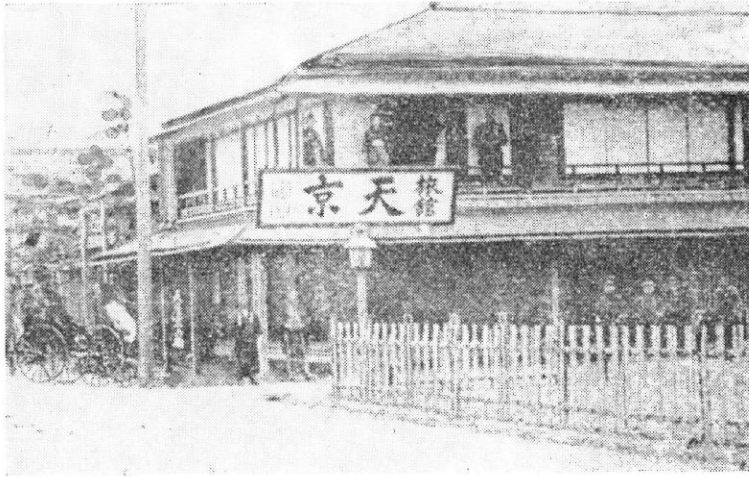
岩戸屋や宮島旅館で汽車待ちをしている客は、鈴がなると、とびだしたものだといふ。

○せんだく親

学資を提供したりして、一人前になるまでのめんどうをみる。

○盛来軒をめぐるドブ川が

桂川、深い川で、芹田石



はじめのころの天京ふきん(明治四十年)

ものだそうです。海津さんの長屋が前に話した熊木運送店のところ。駅通りを歩いてごらん下さい。今でも

残っているこの形を、たくさんみることができましよう。

▽……

新しい店古い店

太田肉屋さんのとなり、品田さんのところは、平井天海さんのせんだく親になった猪俣のいえもち、二つの墓地の壁になってくれているのが朝日屋旅館、それに本間洋服店と内山下駄屋(今の新潟日報)に保坂酒屋(今の宮田けしゅう品店)。雑貨組合のところが金子お茶づけやさんと、浴場。今も入口のところに、山田きょうご先生の字をほった石がたっています。ふせガソリンスタンドのところ

が渡辺鉄工所、郵便局のところは「いそにしき」のひっこんだ店の長屋、ここは、この前は長浜石油のあ

ったところ、となりのあき地は吉川ガラス工場、小川にそって柳がならんでいました。その下がわが茂木製油所で、新野屋さんの前にはあじろ材料のたるが何十本も並んでいましたし、ヤマモの材木おきばではかくれんぼもします。高伝の屋根には、モヤンが何十枚もほしてありました。最上屋のかんばんのカステラという字が、歩くにつれて変わるのが面白いのです。

最近十年間にかわらない店は十のうち三つで、はげしいかわりかたをしています。店の作りもこれまでの役割をになつてきた古い店と、それにつながる新しい店がいろいろまじっています。長い駅通りはいつも宿題にとりくんでいるのでしよう。

材店前から、駅通りをくぐって、向側「用便は溝にして下さい」の川になって材木置場を流れる。

○東映のところはかつて、日石鉄管置場、向いが浜田屋旅館、その裏に大正十五年に焼けた常設館旭館があった。

○停車場付近の歌地(中越新聞明治三六、六) 枇杷島田辺文吉所有地借地人へ売却、一等地一坪十円、二等地坪八円。

○中野平左衛門談(柏崎日報昭三、八) 鉄道開通当時宿泊料一泊二八銭、中食つき四十銭 当時人力車一台二五円 自動車一台 百何十円

明治三十年岩戸屋駅前に移る。他に建物なく付近渺茫たる田圃、この年洪水二回、駅はプラットホームの上まで、岩戸屋軒下一尺のところまで水につかる。

あすへの願い

勝海さんの苦心

— 全国に知られた絹織物 —

▽……

洲の栄のはぶたえ

かしわざきの一番古い工場に、絹織物（きぬおりもの）の洲崎工場がありました。子どもたちは洲栄（すのえい）さんとよんでいました。

ネズミドウの水にかけをうつつたながめを思い出します。三十五年前、火事をおこして二十年らしいの工場を焼き、ときわ高校のうらに大きい工場をたてました。戦争になってやめねばならなくなりました。その用地に今の日本油機がたち

ました。この絹織物は

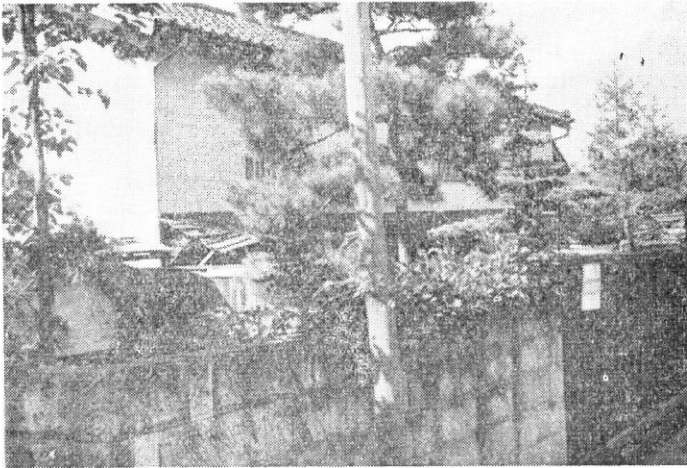
「洲の栄の羽二重（はぶたえ）」といわれて、全国に名がひびいていました。それは勝海栄治郎さんの研究とわざがすぐれていて、図柄（ずがら）の織出し方法をあみだされたりしたので「洲の栄の勝海さん」の名はしらぬ者がなかったのです。この方は諏訪町勝海齒医者さんのお父さんです。

▽……

自分たちの手で

勝海さんがこの仕事に入られて、はたおり工場を始

められたのが六十年前、柏崎神社大門の大橋医院の前がわに姉崎さんの「もうあ学校」があって、そのとな



柏崎の絹織物業の出発となつた勝海工場のあと（田町）

一〇六

○勝海工場

（柏崎史誌 下巻）

- ・ 明治二十九年四月南片町に柏崎織物会社創設。
- ・ 明治三十年焼失して解散。

後、この織物工場の機械を買って田町の勝海工場が業を継ぐ。

勝海工場は明治四十年頃は既に機械化工場として動力化し、県下における二番目の工場であった。後洲栄工場に入り、工場建設に縦横の才腕を揮う。

・ 昭和十三年工場全焼、ただちに復興、資本金十二万円の洲栄工場として輸出羽二重の生産で全国有数の業績をあげる。

全盛時代、年産一〇〇万円。従業員二五〇名。

○勝海栄治郎談

（柏崎日報大正九、五）
農繁期の手伝いをする

の平野さんのものと家のところでは、「まちをあげて縮の行商(ぎょうしょう)は盛んだが、まちでおあげたものではない。自分たちの手でおりのをつくりたい」これが二十一才の青年勝海さんのきもちでした。

なかまをふやす

き受けることになりました。この工場は「五」の字のマークを使って、前忠さんの裏にありました。

▽……

勝海さんは二つの願いを

座にするには、もっとなかまをふやしたいのです。勝海さんの家でしばしば講習(こうしゅう)会も開きました。「うまくいかなければ、あとは引き受けます」とすすめしました。まるつきり、那役所の人かと思

動力でする仕事

▽……

第二の願いは動力しよ

きで仕事をするのでした。新潟鉄工所の発動機を買ってきて、動力は米仙のせいまい用のものをかりてやってみます。早くまわりすぎたり、とまったり、そのたびにランプのあかりをたよりにおします。動力がまた弱い。青海川の発電所からくる電気で、駅なども青白いかすかな光だったといひます。こうして県下でもすすんだ苦勞がみられます。洲の榮さんは二百五十

三年後に田町のもとガラス会社の事務所あとにうつります。この写真の家です。二階に十数台のはたおり機がおかれ、かしわざきの絹織物のスタートをきった勝海工場です。更に三年後にはこの「はた」を全部もって洲の榮工場に入りました。この頃、前忠さん、花田屋さん、朝倉さん(五丁目日本そうご銀行のところ)、半田屋さん(六丁目高忠文具店のところ)二宮さんが共同で、たてていた「柏崎織物」という工場も、洲の榮の勝海さんが引

もっていました。一つは「はたおりの仕事をする人をふやしたい。同業なかまをせめて十けんにしたい」ということでした。諏訪町の巻淵さんは綿(めん)織物の大きな工場を裏手にたてていられました。比角内山小路の内山さんは「とちつむぎ」の工場を始めてい

ました。桃山町には大寅工場ができ、駅通り最上屋の新宅さんのところには、佐藤さんの工場がありました。広小路の金子さんも始められました。「輸出(ゆしゅつ)羽二重をまちの名

いをかりてきて、四、五十日間の講習を二年やりま

いう人には一日三十銭の手当を払うことにして帰している。これが全体の四分の一位で、あとに九十五、六名就業している。需要先は京都を主とし、目下生産十万円、使用している絹織物の機械は氏の考案。京都の大商店から莫大な給料で招かれたが固く辭す。羽二重工場としては県下有数、製品の優秀性を全国的に誇る。他に綾織、壁織、高貴織、縞縞等の製織に苦心し、着々曙光を見出しつつあり。

石油から機械へ

— 理研ができ第四の時代に —

▽……

柏崎またピンチ

石油王国をほこったかしわざきも昭和五年をさかいにして下り坂になります。油田がおとろえて石油がでなくなつてくると、またまた、自分のものを持たないかしわざきはピンチに追いつめられます。

この頃、三〇〇〇人の人たちが仕事をしている新潟鉄工場が、もとの三中のよこ、今のウオシントン工場のところ活気を見せていました。日石が石油をほる機械を作るためにたてたのが始まりで、駅ふきん工業

地区の中心になっていました。きょう土の工業地区は二つあって、一つはこの石油事業を中心にして盛んになった駅ふきんで、もう一つは比角の北がわで、織物工場が中心になっていました。ここが新しい工業地区になる時がきました。昭和九年に理研(りけん)ピストンリングの工場が来たからです。まちは急に活気づいてきました。工業のまちなう第四の時代をつくり出す。幸運のかしわざきというべきでしょう。

▽……

理研で活気戻す

写真で見るとこの工場で盛んな時は一万人からの人たちがはたらきました。この人々は、いつもぎまっただ服そうをしていますが、朝や夕方の方のまちの人通りは理研の色でいっぱいです。汽車でおる人は大正九年にくらべると柏崎駅では三倍になり、比角駅では五倍になります。汽車で積みだす貨物もくらべてみましよう。大正九年と昭和十二年のものをみると、柏崎駅であつかう荷物は九分の五にへつています。比角駅では三倍になります。このことから石油を多くあつた柏崎駅の貨物が、だんだん少なくなり、理研の品物を積みおろすようになった比角駅が、ぐんとふえたことに気づくでしょう。

▽……

町工場もふえる

町工場もふえます。これは大きな工場の下うけといつて、その工場の仕事の部品を作つたり、材料を作つたりするのですが、昭和七年には三工場、職工一二人でした。だんだん多くなつて、昭和十一年には一〇工場一六二九人、翌年にはと四九工場二九〇四人となります。つくりだす品物の金額は三十倍にはねあがります。それから半年後には工場数七二、その頃のお金で千二百万円の仕事となり、年をおうてぐんぐんふえます。うなぎのぼりというのは、このことでしょう。

さらに理研の下うけ工場は農村にもふえていきます。油のしみたたてものか

○ 柏崎南と北の工場

昭和十三年当時

- ・南の工場(創立・従業員) 柏崎ガス会社 大正一五
- 北日本製菓 大正一三
- 西川鉄工所 明治四四
- 日石試験所 明治二一
- 日石製油所 明治二一
- 理研特殊鋼柏崎工場 昭和一〇
- 新瀉鉄工柏崎工場 明治三三
- 桑山製材会社 大正一五
- 柏崎興業柳橋工場 昭和一一
- 渡辺鉄工所 大正 七
- 小形鉄工所 渡辺ポンプ製作所 明治 五
- 明治 五
- 柏崎ガラス会社 明治四〇
- 北の工場 明三六
- 洲崎工場 明三六

八〇 六〇 四五 六〇 七〇 三〇〇 三〇〇 七〇 三〇〇 一〇七九 三〇〇〇 七〇 三〇〇 二五〇 三〇〇 三〇〇 七〇 三〇〇 六〇 四五 六〇 八〇

らひびきたす、モーターのうなりの聞えないところはなかつたほどです。どこへ行っても、工場ではたらく人の姿を窓越しに見ました。

比角の工業区

四十五年前（大正九年）の柏崎日報に「これから比角村方面に諸工業が発展（はってん）するだろう」という記事があります。さきほどお話をした絹織物の洲の栄工場を中心にして、ここが急に工業地区らしくなってきたからです。越後線も、この年より七年前に全線が開通してしましたから、比角駅中心の動きが活気をおびてきたのでしよう。

比角駅と諏訪（すわ）町間に、三千坪（つぼ、一



第四の時代を作つた理研ピストンリング会社

が二千四百坪もつづいています。ゆうめいな清水組がたてたもので、東京本社からの設計（せつけい）書で板をひき、木を組みます。新式機械がいくつもあつて三五馬力の電力です。四十人からの人が仕事をしていきます。

だんご山のそば、一面のむぎのほが波うち、咲きみだれ菜の花のゆれるところに、織物の大寅（とら）工場ができたのもこの年。十八台の機械で一カ月一万たばのわらを使うナワ工場、西川さんのレンガ工場、サナダ工場、練香工場、そして五十頭の養豚（とん）場があつたり、理研がくる前の比角工業区のようにです。

坪は三・三平方だ）のしき音をたてはじめます。材木地をもつた製材所がすごいをはこぶトロッコのレール

理研チャック

宮内工場本社 昭一二

理研旋盤宮内工場本社

昭和一二

理研鑄造宮内工場本社

昭和一二

自動車製作工場

昭和一二 二〇

理研ピストンリング

柏崎工場 昭和九

大寅織物工場

大正九 六〇

日東製麵所 大正一四

柏崎興業小倉山工場

昭和一二

○新潟鉄工所

明治二十八年

日本石油の所屬工場として創立、製油、鑿井等に

必要な機械器具の製作工場。資本金二十万円。

明治三十三年

・ 柏崎に分工場設立。

・ 明治四十三年六月

日石より分離、独立。資

本金二〇〇万円。

越後一の大タンク（一万

石入り）を作つたのは明

治三十三年のこと。

工業のまち

― 理研を中心にした時代 ―

文化のせんたんを

行く

理研がきたのは昭和九年とお話しましたが、理研の柏崎工場の記事が柏崎の新聞にでるようになったのは昭和四年からです。

「なんと、デッカイ工場だノウ」茶のみ話でおとなが目をまろくしました。しき地二万坪の工場ですから「理研テヤ、ごうぎだネツカ」とてもなく大きいとこどもたちもびっくりします。理研の仕事がすすむにつれて、まだまだびっくりさせられるのです。

このしき地の中にガソリン工場とゴムを作りなおす工場、それにマグネシウム工場ができました。急でしたから電力が思うようになりません。

二年目の昭和六年、倍以上の送電を受けることができるようになりました。月に一トのマグネシウムがこんどは二トくらいできるようになります。まん洲のマグネシウム一トは約四千円、これをドイツから毎年十三ト輸入していたのですが、こんどは柏崎工場です。この分は作りだしてしま

う。「オラホウの理研は世界的だ」こどもたちは自

分まで世界的になった気で「海の水からも作るツア」早耳のこどもがタマゲ顔をします。そういう研究をする理研です。

三階だての大工場

理化学研究所で研究発明したものを作りだそうという会社です。昭和九年に柏崎工場を理研ピストンリング会社にして、大かくちゅうします。五百人の女工さんを千人にし、きしゆく舎をたて、ピストンリングも年に二百万本作るとうい

のです。前の写真で見えていただいた三階のたてものは今は事務所になっていまして、この時できた大工場です。三階だての工場ですからおどろきました。このピストンリングの作り方は研究所の発明です。

力のあたえ方がどこでも同じい、というあの丸いわの作り方は、エンジンの働きを大きくするもので、すばらしい仕事になりました。イギリス、アメリカ、ドイツ、スイスなどの特許(とつきよ)もとって、目ざましい発展ぶりをみせます。

農村工場のひびき

理研の下うけの町工場がうなぎのぼりにふえ、農村に下うけ工場がひろがったお話を前にしました。自分の家に理研の機械をすえて

店番しながら仕事をす人もあります。長野のほうまで農村工場ができて、理研の人たちが教えにまわったということ。このころ世間(せけん)は農村問題でたいへんだったのです。生糸(きいと)

○資金未払工場数

- (柏崎日報、昭和六)
- 長野 二七 埼玉 一〇
- 千葉 一 愛知 三
- 静岡 一 滋賀 二
- 群馬 二 計 四〇

○今の理研

- 従業員 一、六三三名
- 製品 ピストンリング
- 月産 約二億
- 弾力性のある鑄鉄
- (配管部品約千種類)
- 月産 約一億三千万

・特許

- センダイトメタル
- 耐熱、耐摩耗、強靱性の高い鑄鉄、製品材質
- ユニコラム
- 高磁気エネルギーを持つ永久磁石
- シヨープロセス

- 加工困難な硬い材料でも容易にする金型
- ジルコナール
- 高級耐火物の製造技術
- バイロマックス
- 安定した電気抵抗材

○柏崎の工場数 (市勢要覧一九六四)

は安くなり、農作物のねだ
んはガタ落ちをつづける。
糸工場へ働きにいても、
賃金がでない。昭和四年か



荒浜の理研農村工場

らつづいていける不けいきで
す。国や県、町や村でいろ
いろの方法を考えてもぬかに
釘「農民の不安が山野にみ
なぎり、あわれな話がぞく
しゅつしている」昭和九年
の柏崎日報のことばです。
お金がなくて学校の先生に
給料(きゅうりょう)をあ
げられない村までできま
す。

こういう時にはじまった
理研の農村工場が、どんな
役わりをしたか考えてごら
んなさい。

▽……

戦争後さびれる

朝日ののぼるような、と
いうことばがありますが、
かしわざきはまさにその勢
いでした。そのほかの工業
生産もズンとのびて、昭和
十二年には刈羽郡の八〇
割、新潟や長岡にせまろう

とする勢いです。

それが昭和二十年、せん
そうが終わるといっしょ
に、この工業のまちの火が
いっぺんに消えてしまいま
した。花火が消えるよう
に、お借りしたものをお返
ししたあとに、何が残った
のでしょうか。

昭和二十四年に理研工業
は十一の会社にわかれて、
理研柏崎ビストリング工
業となつて、再び活動を開
始します。十年後には下う
け工場は三八、このころ新
潟ウオシントンの下うけは
一三工場、上島(かみしま)
製作所は二一の下うけ工場
をもっています。新しい町
づくりがはじまるのです。

一〇〇人以上 一二

四、二九六名
九、二六六、〇一〇千円
五〇人以上 一〇

六五七、〇六〇千円
一〇人以上 一五

一、九四四、一九〇千円
九人以下 二三六
九四二名

計 六〇五、七一〇千円
八、三五四名
三三七

〇工場適地
一二、三七二、九七〇千円

①荒浜五、六〇九、三八八㎡

②悪田 一七九、七七七㎡

③田塚一、〇四七、〇一㎡

柏崎機械金属団地
(昭和三八、九現在)

日本メッキ 一、七八〇坪

矢島鉄工所 一、八八〇坪

酒井鉄工所 二、五五〇坪

吉田鉄工所 一、〇〇〇坪

日精電気 一、五〇〇坪

高美鉄工所 一、八〇〇坪

松木鉄工所 一、〇〇〇坪
前沢鉄工所 四〇〇坪
④枇杷島 六〇一、八四九㎡

第五の時代は何

—生みだす工夫と努力を—

▽……

かんこうの町に

工業のまちという四つめの山から、ころげおちたかしわざきは、どんな第五の時代にはいるのでしょうか。

これを「観光(かんこう)のまちだ」という人もあります。

けれど、ほんとうはこれからなのでしょう。

いきなり山の下におろされたきょう土の人たちは、いたでのなかからいろいろな活動をはじめます。いくすじかの流れが、それぞれのみにちを作って、ひろがるのになっています。これらの水流を一つにまとめて流れる太

く、大きい川ができなければなりません。その時が、第五の時代を作り出す時になります。いまみなさんのまわりに見られる、きょう土の人たちのはたらきは、そのためのしんげんな

いとなみです。

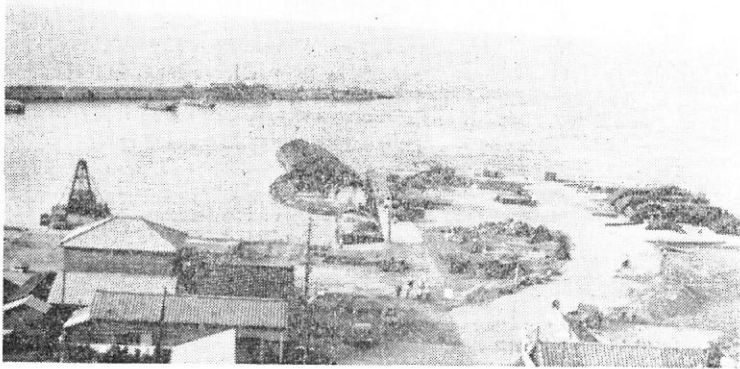
▽……

電話使用数から

きょう土の力を知る手がかりに、ちょっとかわった方法でのぞいて見ましよう。昨年一年間の数をもとにします。人口は柏崎をひとすると新潟は四、長岡二となりませんが、市外電話の使い方は柏崎一とみると新

潟六、長岡三です。同じ方〇、長岡三とできます。電話法で電報の使い方は新潟三のあるわりあいは柏崎は長

一一一



四十年きずきつづけてきた柏崎港

○電報電話について
(電報電話局三十三年度資料)

・市外通話取扱回数

新潟 五、七六六、三九二
長岡 三、一七七、九一三
柏崎 一、〇〇六、七七一
三条 一、七八九、二八二
高田 一、二三五、三五一
電話加入数

人口一〇〇人当り

新潟一三、〇二六、四・八
長岡 五、〇三四、三・七
柏崎 二、四〇五、三・七
三条 二、七六二、四・〇
高田 一、九五〇、二・八
・国内電報取扱総通数
新潟 三、二八七、五〇五
長岡 三五九、七五九
柏崎 一四四、六七六
三条 一六九、五一八
高田 一五六、四一七

○金融機関預金貸出残高
(日銀新潟支店三四、三資料)

岡と同じですが、力のひらきは長岡三倍というわけ
です。

柏崎と人口のほぼ同じ三
条や高田とくらべてみます
と、一人あたりの市外電話
をかける回数には柏崎は一五
回、柏崎より電話のあるわ
りあいのずっとひくい高田
が一八回、三条は二六回と
なります。

事業のもとは、どのく
らい銀行や信用組合をと
して、動いているかをみま
しょう。昭和三十四年三月
末現在の数字です。柏崎は
十八億五千三百万円がいろ
いろの事業に使われている
こととなります。これを一
として、ほかの市にくらべ
ます。新潟は一・六・三です
から、柏崎の一六倍のしごと
です。長岡が八・二、八
倍となりますし、柏崎と同
じくらいの三条は一・八
倍、高田は二倍です。柏崎

より小さい燕(つばめ)が
一・二倍のようすをみせて
います。

では、銀行や信用組合に
預けている貯金は、どうでし
ょう。柏崎は二十九億四百
万円です。たくさんの貯金
です。けれども新潟は一二
倍、長岡は五・六倍になっ
ています。三条は二倍、高
田一・六倍、このマラソン
でも、残念ですが引きはな
されませんでした。

郵便貯金は二十市全部の
合計が、銀行貯金の十四分
の一くらいですから、くら
べる重みがちがいますが、
柏崎は県下で三番目、新潟
は柏崎の一・九倍、長岡が
一・二倍です。けれども、
六カ月間の事業のもとの
のびは、わずかながら他の
市をリードしています。

▽……

“タナボタ”終わる

また、三中きょう土はん
の生徒さんが一年間にどの
くらい汽車にのったかをし
らべたものを見ますと、高
田駅は柏崎の一・三倍、長
岡駅は一・八倍で、新潟駅
は二・四倍となっていま
す。人の動きでも力のひら
きをみとめなくてはなりま
せん。

きょう土は四つの時代と
も幸運にめぐまれました。
それだけに一つの時代の終
わりに「たなからボタモ
チ」の苦しさをあじわって
きました。きょう土の力を
知れば知るほど、きょう土
から生みだす工夫と努力の
大切なことを教えていま
す。

けんの山の山田農園二十
年のかいこんも、十年守り

あげた油機の話も、四十年
きざぎづづけている港の間
題も、何かほかの力をあて
にするのでない、きょう土
のものを育てようとする歩
みの一つです。

▽……

根気づよい気風

目まぐるしいほどに交通
も進歩しました。きょう土
のひろがりも大きくなりま
す。なくなられた北日本三
十年の積みあげをなされた
吉田さんが「いくつもの町
村をつないで大きな生産都
市を作ろう」となされた
「まち作りの夢」をもう一
度思い出してみましょう。
きょう土の底に流れて、し
みついているはずの大き
く、はげしい、そして根気
づよい気風をほりだす時が
きているように思えます。

・貸出残(割引手形を含む)

単位 百万円

新潟 二九、四四四

長岡 一四、八〇六

三条 三、三四〇

高田 三、六五五

柏崎 一、八五三

・預金(単位百万円)

日銀資料 郵便局資料

新潟三四、八四六

一、二三七

長岡一六、一〇七 八〇四

三条 五、四九二 三六五

高田 四、六四四 三九〇

柏崎 二、九〇四 六五三

あとがき

柏崎日報社の大橋さんから「子どもたちに読ませる郷土の話を書いてみないか」とすめられたのが昨年の六月、エンマ市の笹とり

がはじまる頃です。気がるにひきうけて書きだしたのが七月、「かしわざき物語」のせ骨だけを書いておこう。肉づけや、どう考えたらよいかは、やがてみなさんがきおくをたどり、新しい資料を手がかりにして、ひろげてくださる。そういう楽しさをえがいて、二十五回で終わるけいかくでした。

八月の末、二十五回目のげんこうを終わった時、「こどものためですよ」と大橋さんは「もっと、つづけるべきだ」というのです。柏崎の歴史をしらべて、深いお考えをお持ちの方はたくさんおられます。とうてい、およばない私ですが、みなさんとお話しできる喜びで書きつづけることにしました。

こうして五十五回を終わる頃「一冊の本にするように」とたくさんの方々のおすすりめ

あり、新聞発行でいそがしい柏崎日報社が本にしてくださいになりました。その上、たくさんの方のみなさんの机の上に、おいていただけることになって、ささやかな歩みをつづけた三十年間、こんなにうれいことはありません。

ただ、かしわざきの古い話をなつかしむというのではありません。むかしのすがたを、いつまでもそっとしておきたいというのでもありません。そのなかのかしわざきの人々の生き方を、その時々のくらし方、心のかまえ方を、みなさんといっしょにさぐりたいのです。それは、今の私たちのくらしをもっとひろく、大きくながめるための目を開くことになりましょ。う

そのためには、まだ書かねばならぬことがあります。皇太子たんじょうの花火を聞いてチョコビヒゲをたてた、陸上王国の鳥掛タイチョウさんやスキーの川合先生の話、紙の会旗の下で少年のクラブをつくった緑会の話、むかしの若い人たちが祈りをこめた仕事、魚場のダックリさんが工夫したすきとおった紙

や、小熊薬屋さんの発明したメンツブのつかないペントウ箱、名物塩からの生まれるまで、ぬり物の工夫、郷土をささえた人々の話など、たくさん残しましたが、せい一ぱいの仕事でした。たくさんの方々の助けをおかりしました。

むかしの人が書き残してくださった本の大切さを、しみじみ感じました。柏崎史誌や布施宗一、宮川邦雄、堀桃坡、勝田志庵、西巻達一郎、山田良平の方々のお書きになられたもの、ふるく切り抜いておいた柏崎日報、越後タイムスの記事などに、ずいぶん助けられました。いろいろな方々から教えていただきましたが、吉田正太郎、桑山太市朗、佐藤英夫、渡辺米蔵、渡辺政石、関操、勝海清助、前田チヨ、加藤久泰、坂田四郎吉、戸川憲美のみなさんには、ことのほかお世話になりました。小熊哲哉さん、大橋穂波さんのお二人には終始、お手つだいいただきました。また、この本が発行されるについては柏崎日報社の主幹山田竜雄さん、柏崎印刷会社の吉田吉行支配人さんの格別のお骨折りをいただきました。お忙しい時に「はじめのことば」を

くださいました恩師、先輩、比角と荒浜の子どもさん、表紙の箕輪先生、ほんとにありがとうございました。筆をおくにあたって、深くお礼を申しあげます。

郷土にしんせんな目をそそがれるみなさんと、たくましく、道をきりひらかれる柏崎の人々の多幸を祈って、筆をおきます。

一九六〇、一、二五

お礼にかえて

たくさんの方々のおはげましやお力ぞえで、ふたたび上巻をみなさんの手もとにおとどけすることができて、こんなうれいことはありません。

おこぼをいただきました柏崎市教育長大橋先生、ありがとうございました。計画をすすめることができましたのは柏崎市校長会のみなさん、ことに関口校長会長さんのお力で、刈羽郡校長会の方々や江口校長会長さん

のおうえんもいただきました。社会科研究会の先生方も力をかしてくださいました。ほんとうにありがたいことです。

こんな美しい本にしてくださいましたのは柏崎日報社の山田社長さんです。柏崎印刷の勝田さんにたいへんお世話をかけました。ごさいせんくださったみなさま、ありがとうございました。

お礼を申しあげます。

六十二年前の話になります。

「野俣酒店のあっせんで、東京エビスビル会社が柏崎の街頭にガス灯を三十本たてることになった。

停車場通り六本、納屋(なや)町三本、
 鶴川橋から扇(おおぎ)町五本、広小路
 から柳橋四本、浦町二本、下町からエン
 マ町六本、比角二本、新田(しんでん)一
 すわ町)二本

これをたてる費用は百二十円で、一年間の灯火費は百八円である」(中越新聞、明治三六、五、一〇)

町の通りがあかるくなりかけたのは、この

時からです。

五十年前の話です。

「柏崎付近の電灯を使っている数は次のとおり

家の電灯を使っている家 % 電灯の数 動力

柏崎 二、三六 一、六七 三三、三三 二馬力

大洲 七六 二二、三三 四四、三三 三馬力

比角 四七 一七、〇五 三六、七六 三馬力

枇杷島 三七 一四、〇六 六六、〇〇 三馬力

下宿 〇 〇 〇 〇

鯨波 〇 〇 〇 〇

長浜 〇 〇 〇 〇

西中通 〇 〇 〇 〇

荒浜 〇 〇 〇 〇

一戸あたりの灯数は柏崎一・四五灯で、長岡は二・二灯である」(柏崎日報、大正四、七、三〇)

まだランプのホヤそうじや油火、ロウソクしょくだい、ちようちゃんが姿を消したわけはありません。

「最近の西山、高浜方面は電灯工事がさか

んである。

電灯使用者 二九〇戸 六、九一九灯、二

一% 一戸あたり五・〇二灯

内わけ 五燭(しよく)二、七八五灯

一〇燭二、七五三灯、一六燭

三七〇灯、二四燭九灯、五〇

燭二灯」

(柏崎日報、大正四、一二、二七)

石油のしごとで活気づいているところで
す。

動力モーターはおもに米屋さんで、白い粉
だらけの精米(せいまい)機を動かしていま
すが

「北越水力電気会社のしらべでは、管内の
動力モーターの総数は一六八コで、最も多い
のは精米業の四九、次は鉄工場の二九、その
他一三である。

このうち三六コが柏崎付近に原動機として
そなえられている。これは電力工業の発展を
しめすもので、長岡本社管内では一番であ
る」(柏崎日報、大正四、一二、二七)

中越全体の二一%の動力を使っていたので
すから、マラソンのスタートではたしかに先

頭をきっていたことになりました。西川鉄
工所、日石、新潟鉄工所、渡辺ポンプ、ガラ
ス会社、洲ノ栄工場が活動しています。

それから四年後

「安田駅では、この二十七日から電灯をつ

けることになり、ただ今工事中である」

(柏崎日報、大正八、七、一一)

そのよく年

「北鱈石村では電灯をひくことになったが
六千円の費用がいる。同村の人で東京にいら
れる神林敬太郎さんが三千円だしてくださっ
たので、残りの三千円を村内の電灯希望者が
寄付(きふ)することになった」

(柏崎日報、大正九、八、一八)

そして、五十年後の今は電灯の数一九二、
九六九灯電力の口数は五、四四七口で二八、
五六一キロワット。みなさんがあたりまえの
ように思っている今の中に、六十年の歴史が

ひそんでいるのです。みなさんの学校はヤド
カリ学校から九十年のトシをかさねていま
す。きょう士のくらしはもっともっと長い月
日の流れです。その時、その時の苦しみの中
にそそがれた、くじけぬたくましさと、する

どいちえの目がわたしたちのイノチであるこ
とに気づきます。

わたしたちはこれからのきょう土に生きる
のです。物を見る目と、考えるあたまと、や
りぬくからだで、新しい物語を書きはじめま
しょう。

その糸口をわたしは書きつづけてきたので
す。しらべるのも、書くのもわたしのつとめ
をすましてからです。土曜も日曜もありませ
ん。夏休みも冬休みもありません。毎日、夜
の九時ころから朝がたの三時近くまで机にむ
かいました。気がついたら夜が明けていたこ
ともあります。そんな日を五年間つづけてし
まいました。ほんとにつかれました。

こんな楽しいことがほかにあるでしょう
か。みなさんとお話できる喜びをあたえてい
ただいたのは、もったいないくらいうれしい
ことでした。つかれなど忘れていました。ど
うぞ、上巻と下巻をあわせて読んでくださ
い。二つをあわせて、やっと一つの仕事にな
ったのですから。

三十年近く、こういう勉強をしてきました
が、書きはじめてみると、しらべなおさねば
ならぬことがたくさんです。お教えを受けに
おたずねしてまわった方が七十四人にもなり
ました。しらべてまわったメモが十二冊でき
ました。市立図書館に大正四年からの柏崎日
報、越後タイムスが三百数十冊に整理されて
います。これを一枚一枚めくってしらべまし
た。この書き抜き帳が十五冊になります。

書庫の夏はムウツとして汗が落ちます。冬
は背に白金カイロをいれていても指がかじか
みます。図書館の戸川さんや赤堀さんの心づ
くしの火鉢は世界一あたたかいものでした。

むかしの写真も千二百枚ほど作りまし
た。これはミドリヤさんや若月さんのお力ぞえが
なければできなかったでしょう。

十数冊のスクラップ帳や九十冊にもほる
参考書や資料を机のまわりにひろげて、まる
で紙くずかごになったような部屋で、五年間
すごしたことになります。妻は家計のなかか
ら調査費をさいてくれましたし、長女は原稿
を清書してくれました。野外調査になると、
次女がメーターではかれば長男がメモをと

り、三女のチビちゃんが道具を持ってくれ
りします。高崎の国光の弟や藤五の弟も研究
費を送ってくれました。みなさんにお話する
ために、わたしたち家族はよい経験をさせて
いただいたと、しみじみ思うのです。

五年前の上巻、きょう年の下巻、そして今
の上巻再版と、八千冊の「柏崎物語」をみなさ
んのそばにおいていただくことになりました。
すべてはわたくしをあたたかく包んでく
ださった、たくさんの方々のおかげです。

ありがとうございます。

比角のこどもが帰省(きせい)した時「柏
崎物語を読んで勇気がでた」と話してくれま
した。うれしいことです。みなさんの限りな
い前進に「柏崎物語」をおともにしていただ
ければ、これにまさる喜びはありません。

一九六四、一一、一

笹川芳三



著 者 近 影

著 者 略 歴

- 明治44年 3月28日、柏崎市田町でうまれる。
大正6年 柏崎小学校入学。
大正12年 柏崎商業学校入学。
昭和4年 高田師範学校本科2部へ入学。
昭和5年 以来安田小学校、荒浜第二小学校と教員生活に入る。
昭和10年 酒井校長指導のもとに全職員分担の安田郷土史をつくる。
昭和14年 高田師範専攻科入学。夏、学生勤労隊として満洲ですごす。「満洲の子どもの話」を新潟放送局から放送、県知事から表彰をうける。
昭和15年 再び教壇にもどり、高柳村岡野町小学校、比角小学校、新潟第2師範学校付属小学校を歴任。
昭和20年 7月召集をうけ、同年10月解除。
昭和21年 比角小学校勤務。全職員共同研究による「教育の診断とその省察」まとまる。「子供の世界」「学習評価の方法と実践」を東京牧書店から刊行。
昭和26年 9月より3年間柏崎市内新潟療養所で療養。入所学童のため「療養学園」設立運動をはじめる。
昭和30年 柏崎市教育委員会指導主事。
昭和37年 石地小学校長になり現在に至る。

推薦

柏崎市教育委員会
柏崎市商工会議所
刈羽柏崎地教委連絡協議会
柏崎市小中学校校長会
刈羽郡校長会
郷土研究会
柏崎市社会科学研究会
刈羽郡社会科学研究会
柏崎市PTA連絡協議会
刈羽郡PTA連絡協議会

昭和三十五年三月二十五日初版発行
昭和三十九年十二月一日再版印刷
昭和三十九年十二月五日再版発行
定価二百二十円

著者 柏崎市田町 笹川芳三

発行所 柏崎市本町四丁目 柏崎日報社
電話二〇一〇番

印刷所 柏崎市本町四丁目 柏崎印刷株式会社
電話三〇二〇番

